

たかみずま

# 高三瀦遺跡

— 第6～8次発掘調査報告 —

平成31（2019）年3月

久留米市教育委員会

# 高三瀦遺跡

— 第6～8次発掘調査報告 —

平成31（2019）年3月

久留米市教育委員会

## 序

筑紫平野の中央部に位置する久留米市は、九州一の河川である筑後川と耳納連山の山並みに代表される水と緑が豊かな都市です。一方で、少子高齢化や高度情報化などの社会環境の変化に対応するために、本市では市民と行政がパートナーシップの理念の基に協働し、質の高い生活中心の街づくりを推進しております。また、豊富な水と緑を活かした、歴史を活かしたまちづくりを実現するため、歴史風土の継承に尽力しているところです。

この恵まれた環境と立地は、今日を生きる私たちだけでなく、先人の生活や社会・文化にも多大な影響を与えてきました。先人の足跡は、市内各所に存在する文化財として現代に残されています。私ども教育委員会では、開発によって失われる、先人の残した貴重な文化財を後世に伝えて行くために、現状保存、あるいは発掘調査を行い、記録保存の措置を講じています。

今回、本書で報告する高三瀧遺跡は三瀧町に位置し、平成28～29年度に国費・県費による補助を受けて発掘調査を実施しました。古くから弥生時代後期の標式遺跡として知られる高三瀧遺跡から、久留米の弥生時代を語るうえで重要な資料を得ることができました。本書が地域史や考古学の研究、学習の一資料として、また文化財保護行政に対する理解とその普及の一助として役立つことができれば幸いに存じます。

末文となりますが、発掘調査に際して多大なご協力とご理解をいただきました土地所有者や周辺住民の方々をはじめ、関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成31年3月31日

久留米市教育委員会  
教育長 大津 秀明

## 例 言

1. 本書は、平成28年度から平成29年度に久留米市市民文化部文化財保護課が国・県の補助を受けて実施した、高三瀦遺跡第6～8次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は久留米市教育委員会が主体となり、市民文化部文化財保護課の江頭俊介と小川原励が担当した。
3. 本書に掲載した遺構の測量は、江頭と小川原、発掘調査臨時職員の塚本明美、中村麻衣、舟越朝菜、森啓恵、山口誠が行った。測量は、主にトータルステーションで三次元データを取得し、CUBIC製遺構実測ソフト「遺構くんcubic」にて編集・保存した。ただし、土層と遺物出土状況は糸切りメッシュ法で記録した。製図作業は、江頭と小川原、専任非常勤職員の今村理恵と宮崎彩香、米澤美詠子、整理作業臨時職員の丸山裕見子、山元博子が行い、一部は「遺構くんcubic」と米アドビシステムズ製の「Adobe Illustrator」を用いて製図した。
4. 遺物実測は江頭と小川原、小澤太郎、長谷川桃子、米澤、丸山が行い、製図作業は江頭と宮崎、米澤、整理作業臨時職員の中野美代子、丸山が行った。拓本作成は、今村と宮崎が行った。遺物観察表は江頭と小川原が作成し、一部の入力作業を米澤と整理作業臨時職員の梶島かおりが補助した。
5. 遺構写真はマミヤRB67（江頭）とマミヤRZ67（小川原）を用いて撮影した。フィルムは6×7判で、モノクロフィルムは富士フィルム「ネオパン100ACROS」、カラーリバーサルは富士フィルム「プロヴィア100」を用いた。なお、第8次調査の空中写真のみ、有限会社空中写真企画に委託して撮影した。
6. 遺物写真は江頭、小川原がニコンD700とCANON EOS6Dで撮影し、一部を有限会社システム・レコに委託し、久留米市埋蔵文化財センターにおいてデジタルカメラで撮影した。
7. 本書に使用した遺構図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成した。図版の方位は全て座標北を示す。なお、平成28年の熊本地震に伴うパラメータ補正は行っていない。
8. 本書に使用した遺構標記は下記の略号による。遺構番号は、調査回数ごとに付した。

SD……溝

SI……堅穴建物

SK……土坑

SP……柱穴、ピット

SX……その他の遺構

9. 遺物実測図の凡例は以下のとおりである。

- ・ 遺物の断面黒塗りは須恵器、表裏面の網掛けは黒色部や丹塗り、使用面、赤色顔料、被熱の範囲を示す。

10. 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。

- ・ 法量の単位はcmである。( )は復元値、残存値を、－は欠損または該当する部位が無いことを示す。
- ・ 色調は『新版 標準土色帖』(日本研事業株式会社、平成9年)に拠った。
- ・ 胎土は、0.5mm未満の砂粒を「微砂粒」、1mm未満を「細砂粒」、1mm以上を「砂粒」とした。
- ・ 登録番号は、久留米市市民文化部文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

(例) 201614 - 00001  
調査番号                      登録番号

11. 各遺跡の調査番号と遺跡略記号は、本文目次と第1表を参照されたい。

12. 本書に収録した遺物及び調査に係わる記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管され、活用される。

13. 本書の執筆にあたり、韓神大学の李亨源氏と小郡市文化財課の山崎頼人氏に助言をいただいた。

14. 本書の執筆は江頭と小川原が行い、編集は小川原が行った。

## 本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	(小川原) 2
III. 第6次調査 (201614/TMZ-6)	(江頭) 6
IV. 第7次調査 (201704/TMZ-7)	(小川原) 22
V. 第8次調査 (201715/TMZ-8)	(小川原) 61
VI. 総括	(小川原) 114
抄録	巻末

## 挿図目次

### II. 位置と環境

第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	4	第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)	5
------------------------------	---	-----------------------------	---

### III. 第6次調査

第3図 遺構配置図 (1/200)	7	第14図 S D 3 軟骨出土状況 (南から)	16
第4図 S D 1 土層断面図 (1/40)	8	第15図 S P 4 柱根検出状況 (北東から)	16
第5図 S P 5 実測図 (1/20)	8	第16図 S P 4・S P 5 掘削状況 (南西から)	16
第6図 遺物実測図① (1/2, 1/4)	9	第17図 S P 5 柱根検出状況 (南西から)	16
第7図 遺物実測図② (1/2, 1/4)	10	第18図 S P 5 掘削状況 (南西から)	16
第8図 遺物実測図③ (1/2, 1/4)	11	第19図 出土遺物写真①	17
第9図 西区近景 (南から)	15	第20図 出土遺物写真②	18
第10図 東区近景 (南西から)	15	第21図 出土遺物写真③	19
第11図 S D 1 土層断面 (東から)	16	第22図 出土遺物写真④	20
第12図 S D 1 完掘状況 (南東から)	16	第23図 出土遺物写真⑤	21
第13図 S D 6 土層断面 (東から)	16		

### IV. 第7次調査

第24図 遺構配置図、遺構番号図 (1/100)	23	第33図 S X 30 実測図 (1/10)	33
第25図 S 1 500 実測図 (1/60)	24	第34図 S 1 220・500、S D 149 出土遺物実測図 (1/4)	35
第26図 S 1 220、S D 149・150 土層断面図 (1/30)	25	第35図 S D 150 出土遺物実測図① (1/2, 1/4)	36
第27図 S D 510 土層断面図 (1/20)	26	第36図 S D 150 出土遺物実測図② (1/4)	37
第28図 S K 10・40・50・52・53 実測図 (1/20)	27	第37図 S D 510、S K 10・40・50・52・53・100 出土遺物実測図 (1/4)	38
第29図 S K 100・103・108・110 実測図 (1/20, 1/30)	28	第38図 S K 103・110・112・115・120・145・160・189・230・530・545・560、S X 30 出土遺物実測図 (1/4)	40
第30図 S K 112・115・116・120・145・160 実測図 (1/20, 1/30)	30	第39図 その他遺構出土遺物実測図 (1/2, 1/4)	41
第31図 S K 189・230・530・543・545・549・550・553 実測図 (1/30)	31	第40図 出土土製品実測図① (1/2)	43
第32図 S X 4 実測図 (1/10)	32		

第41図	出土石製品実測図② (1/2)	44
第42図	出土石製品実測図③ (1/2)	46
第43図	出土石製品実測図④ (1/4)	46
第44図	出土石製品実測図⑤ (1/2, 1/4)	47
第45図	北区全景と塚崎御廟塚貝塚 (北上空から)	52
第46図	北区全景 (北東上空から)	52
第47図	北区東部完掘状況 (東から)	53
第48図	北区西部完掘状況 (西から)	53
第49図	南区全景 (東上空から)	54
第50図	S I 220 (南東から)	54
第51図	S I 500完掘状況 (北東から)	54
第52図	S D149・150土層 (南東から)	54
第53図	S D150土層 (北西から)	54
第54図	S I 220, S D150土層 (北西から)	55
第55図	S D150東部掘削状況 (南東から)	55
第56図	S D150西部掘削状況 (北西から)	55
第57図	S D150貝検出状況 (北西から)	55

第58図	S D150貝検出状況 (北西から)	55
第59図	S D150遺物出土状況 (北から)	55
第60図	S D510土層 (北から)	55
第61図	S D510完掘状況 (北から)	55
第62図	S K10完掘状況 (西から)	56
第63図	S K40土層 (南から)	56
第64図	S X 4動物骨検出状況① (南から)	56
第65図	S X 4動物骨検出状況② (東から)	56
第66図	S X30馬骨検出状況① (東から)	56
第67図	S X30馬骨検出状況② (西から)	56
第68図	調査区東壁壇砂検出状況 (西から)	56
第69図	調査区南部壇砂検出状況 (西から)	56
第70図	出土遺物写真①	57
第71図	出土遺物写真②	58
第72図	出土遺物写真③	59
第73図	出土遺物写真④	60

## V. 第8次調査

第74図	調査区配置図遺構配置図 (1/150)	62
第75図	S D80・110土層図, S K I・3・30・34・35土層遺構実測図 (1/40)	64
第76図	S K40・45実測図 (1/30, 1/40)	65
第77図	S K50実測図 (1/40)	66
第78図	S K55・60・65・100・102・120実測図, S K105・120土層図 (1/20, 1/30)	68
第79図	S K143・145・151・155実測図 (1/20)	69
第80図	S K160・161・164・170実測図 (1/20, 1/30)	71
第81図	S K180・181・199・200・210実測図 (1/30)	72
第82図	S I130・215・230出土遺物実測図 (1/4)	74
第83図	S D80・110出土遺物実測図 (1/4)	75
第84図	S K I・3・30・34・35・40・45・50出土遺物実測図 (1/4)	76
第85図	S K50出土遺物実測図② (1/4)	78
第86図	S K50出土遺物実測図③ (1/4)	79
第87図	S K50出土遺物実測図④ (1/4)	80
第88図	S K50出土遺物実測図⑤ (1/4)	81
第89図	S K50出土遺物実測図⑥ (1/4)	83
第90図	S K50・55・60出土遺物実測図 (1/4)	84
第91図	S K60・65・100・105出土遺物実測図 (1/4)	85
第92図	S K105・143・145出土遺物実測図 (1/4)	87

第93図	S K151・155出土遺物実測図 (1/4)	88
第94図	S K160出土遺物実測図 (1/4)	89
第95図	S K160・161・164・170出土遺物実測図 (1/4)	90
第96図	S K170出土遺物実測図 (1/4)	91
第97図	S K170・180・181・200出土遺物実測図 (1/4)	92
第98図	S K210・その他遺構出土遺物実測図 (1/2, 1/4)	93
第99図	石製品実測図① (1/2, 1/4)	94
第100図	石製品実測図② (1/2, 1/4)	95
第101図	石製品実測図③ (1/4)	96
第102図	北区全景 (北上空から)	102
第103図	北区西部掘削状況 (北上空から)	102
第104図	北区東部掘削状況 (北上空から)	103
第105図	調査区全景 (北上空から)	103
第106図	調査地から塚崎御廟塚を望む (南東上空から)	104
第107図	S I130, S K155, 160掘削状況	104
第108図	S I140検出状況 (北東から)	104
第109図	S I215掘削状況 (北から)	104
第110図	S I215, 230, S X250 (南東から)	104
第111図	S D80掘削状況 (北東から)	104
第112図	S D80土層堆積状況 (南西から)	104
第113図	S D110土層 (南西から)	104
第114図	S K1完掘状況 (南東から)	105

第115図	S K 3 完掘状況 (北西から)	105
第116図	S K 40完掘状況 (南西から)	105
第117図	S K 45完掘状況 (南東から)	105
第118図	S K 50掘削状況① (西から)	105
第119図	S K 50掘削状況② (南から)	105
第120図	S K 50掘削状況③ (東から)	105
第121図	S K 50東部土層 (北東から)	105
第122図	S K 50西部土層 (北東から)	106
第123図	S K 55掘削状況 (北西から)	106
第124図	S K 65掘削状況 (北東から)	106
第125図	S K 105掘削状況 (北東から)	106

第126図	S K 155・160遺物出土状況 (北から)	106
第127図	S K 170遺物出土状況 (北西から)	106
第128図	S K 210完掘状況 (南西から)	106
第129図	S X 255検出状況 (南西から)	106
第130図	出土遺物写真①	107
第131図	出土遺物写真②	108
第132図	出土遺物写真③	109
第133図	出土遺物写真④	110
第134図	出土遺物写真⑤	111
第135図	出土遺物写真⑥	112
第136図	出土遺物写真⑦	113

## VI. 総括

第137図	6 S D 1・6・7 S D 150模式図 (1/1,000)	114
-------	----------------------------------	-----

# 表 目 次

## I. はじめに

第1表	発掘調査体制	1
-----	--------	---

## III. 第6次調査

第2表	出土遺物観察表①	12
-----	----------	----

第3表	出土遺物観察表②	13
-----	----------	----

## IV. 第7次調査

第4表	出土遺物観察表①	48
-----	----------	----

第6表	出土遺物観察表③	50
-----	----------	----

第5表	出土遺物観察表②	49
-----	----------	----

第7表	出土遺物観察表④	51
-----	----------	----

## IV. 第8次調査

第8表	出土遺物観察表①	97
-----	----------	----

第1表	出土遺物観察表①	100
-----	----------	-----

第9表	出土遺物観察表②	98
-----	----------	----

第12表	出土遺物観察表⑤	101
------	----------	-----

第10表	出土遺物観察表③	99
------	----------	----



# I. はじめに

## 1. 高三猪遺跡の調査概要

久留米市では、平成5年度より市内遺跡発掘調査等国費・県費補助事業によって発掘調査を実施した遺跡について、『久留米市内遺跡群』として成果を取りまとめ、報告書を毎年刊行している。

本書は、平成28年度から平成29年度の市内遺跡発掘調査等補助事業による発掘調査のうち、宅地造成と専用住宅建設に先立ち久留米市三瀬町高三猪で実施した高三猪遺跡第6～8次調査の報告を一括して収録した。各調査の調査期間と調査原因などは、下記の第1表を参照されたい。なお、整理作業と報告書作成は、平成31年（2019）3月31日まで、西町発掘調査整理事務所で行った。

## 2. 調査の体制

高三猪遺跡第6～8次調査の発掘調査と整理作業、報告書作成の調査体制は第1表のとおりである。

第1表 発掘調査体制

調査主体		調査総括				文化財保護課							
久留米市教育委員会		久留米市民文化館				課長	課長補佐 (兼主査)	主査	事務主査	庶務担当	事前確認 調整担当	発掘調査担当	整理担当
教育長	部長	文化芸術担当部長	次長	課長	課長補佐 (兼主査)	主査	事務主査	庶務担当	事前確認 調整担当	発掘調査担当	整理担当		
磯 正則	野田 秀樹	甲斐田 忠之	竹村 正高	馬場 博文	山崎 万里子 白木 守	水原 道範	豊福 早苗	豊福 早苗	塚本 映子 本田 岳秋 神保 公久	江頭 俊介 (第6次)	古賀 和子		
大津 秀明	野田 秀樹	甲斐田 忠之	西村 信二	馬場 博文	山崎 万里子 白木 守	水原 道範	塚本 映子	豊福 早苗	塚本 映子 神保 公久 大隈 彩未 橋之口 雅子	小川原 助 (第7・8次)	米澤 美生子 岩坪 純子 宮崎 彩香		
大津 秀明	野田 秀樹	宮原 義治	西村 信二	水島 秀雄	久保田 由美 白木 守 丸林 祐彦	水原 道範	塚本 映子	市村 久美子 古賀 文子	塚本 映子 小澤 太郎 橋之口 雅子		米澤 美生子 今村 雅恵 岩坪 純子 宮崎 彩香		
発掘調査作業員(平成28～29年度)													
青木佐智子・井上 知哉・石橋 康子・上重 友記・江藤 光男・居石 寿智・堀江 浩・久保田 英嗣・佐田 農夫男・高尾 春代・田中 樹子・塚本 明美・津留崎 順子・中村 万喜雄・中村 麻衣・原口 貞子・原 学・日吉 政勝・平田 広之・福田 猛・藤木 幸子・舟越 朝葉・御手洗久山・山口 誠也・由布 幸子・森 啓恵・丸山 幸・渡辺 しげ子・渡辺 やつ子													
出土品整理作業臨時職員(平成30年度)													
丸山裕見子・湯川翠美													

## II. 位置と環境

久留米市三潞町は筑後川の下流域の左岸に面し、久留米市西部に位置する。九州を代表する大河である筑後川は、熊本県阿蘇外輪山を水源として夜明地峡部を経て有明海へ注ぐ全長約143kmの一級河川である。その中・下流域の両岸には沖積作用によって形成された筑紫平野が広がる。三潞町は筑紫平野のほぼ中心部に位置する。三潞町の東部から北西部にかけては八女丘陵から低位段丘が延びるが、大部分は標高5m以下の沖積平野が占める。北部の広川と南部の山ノ井川が筑後川に合流し、豊かな土壌と、発達したクリークを利用し、福岡県内でも有数の穀倉地帯が広がる。

縄文時代以前の遺物はこれまで三潞町内では確認されていないが、道手牟田遺跡では落とし穴を検出しており、これが縄文時代の遺構である可能性もある。

弥生時代の遺跡は三潞町で複数確認されており、特に高三潞遺跡は北部九州の後期初頭の標識土器である「高三潞式土器」の名称の由来として学史に残る。発掘調査はあまり行われていなかったが、平成25年度から平成29年度にかけて計8度の発掘調査が実施された。玉満松木ノ遺跡では直径4m以上の弥生時代後期の大型井戸や堅穴建物、弥生時代終末から古墳時代にかけての堅穴建物が出土し、環濠の可能性のある溝や土塁なども検出している。城島町久保遺跡は現在の筑後川から約500mの地点に位置し、弥生時代前期末から中世にかけての遺物、遺構を確認している。弥生時代前期末から中期初頭にかけての擬朝鮮系無文土器の黒色磨研土器が多数出土したことや、朝鮮半島に類例がみられる木製劍把が出土していることから、有明海、筑後川を通じて渡来人との何らかの関係性が想定される。大川市に位置する下林西田遺跡からも久保遺跡と同様、黒色磨研土器が出土している。二次被熱を受け赤く変色し、白い付着物がついた弥生時代中期前半の甕が出土しており、これは製塩を行った際の煎傲(せんごう)過程に使用したものと考えられている。

弥生時代の筑紫平野は海岸線が現在より内陸に入り込んでいたと考えられ、筑後川下流域では弥生時代の貝塚が多数ある。筑後川左岸では久留米市三潞町の塚崎御廟塚貝塚、同城島町の能保里貝塚、大川市酒見貝塚などがある。能保里貝塚、酒見貝塚では近辺に大きな平石があることから支石墓があった可能性が指摘されている(伊崎1998)。酒見貝塚は発掘調査が実施され、井戸や土坑など弥生時代中期以降を中心とした遺構を確認している。貝塚は主にカキ殻が占めており、酒見貝塚や能保里貝塚に近接する下林西田遺跡、塚崎御廟塚遺跡に近接する塚崎東畑遺跡からは動物遺存体が多数出土している。特に酒見貝塚と塚崎東畑遺跡からは弥生時代の資料としては貴重なニワトリの骨が出土している。広川の右岸には集落跡が確認された道蔵遺跡、碓遺跡が所在する。

筑後川右岸では左岸よりも多くの貝塚がある。佐賀市詫田西分遺跡では鐙形土製品、鳥形木製品、木剣、木文などの祭祀具が出土したほか甕棺墓や土壇墓から人骨が出土している。人骨の中には渡来系の形質をもつものが含まれる。同高志神社貝塚からは銅剣や鐙形土製品が出土している。みやき町本分貝塚では墳墓や土坑が確認されている。

古墳時代には、三瀨町においても八女丘陵沿いに多くの古墳が造営されたといわれているが、現在、残存する古墳は少なく2基のみが知られる。高三瀨遺跡周辺では裏畑古墳が存在し、消滅した五十町さん古墳の石室の石材が、三瀨町高三瀨に石碑として建てられている。玉溝向工野古墳群では、墳墓は消滅していたが周溝の一部や馬具などが確認されている。これらの古墳群の存在から高三瀨遺跡群の南側では古墳の造営が行われていたことがわかる。

中世には、三瀨庄高三瀨村に地頭職として赴任した、横溝氏の居館や高三瀨氏の居館の推定地が高三瀨遺跡南部に所在する。高三瀨遺跡の調査で中世の遺構が検出され、土地開発が行われていたことが分かる。

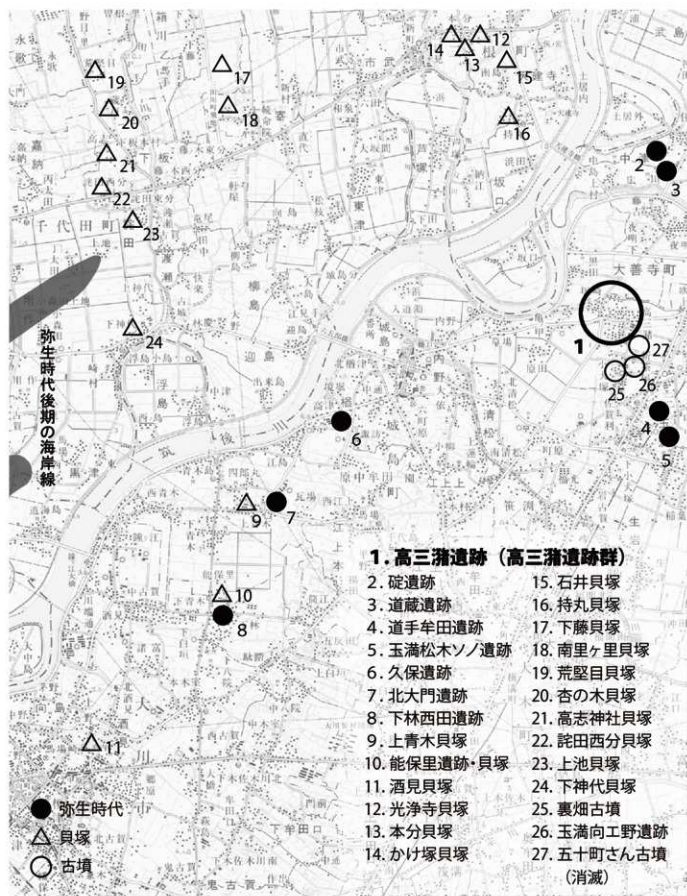
これまで高三瀨遺跡群の発掘調査は本報告に掲載した高三瀨遺跡第8次まで含め計11回実施されている。最初に発掘調査が行われたのは、遺跡群を東西に分断する県道710号宮本・大川線の拡幅前に福岡県が実施した塚崎東畑遺跡である。塚崎東畑遺跡では弥生時代前期から中期の竪穴建物や木棺墓、甕棺墓、土坑墓の墓群などを検出している。遺跡群の東部に位置する高三瀨北小路遺跡では、甕棺墓が2基検出されている。遺跡群の西部妙覚院内では弥生時代前期の溝や土坑などが検出されている。平成25年以降は遺跡群内の遺跡を高三瀨遺跡と総称している。高三瀨遺跡第1次調査では中世の遺構、遺物が中心に確認されている。第2次調査では弥生時代中期から古墳時代の遺物が出土した自然流路を検出している。第3次調査では弥生時代中期の溜池状遺構や後期以降の掘立柱建物を確認され、第4次調査では上面幅4m以上の溝から多量の土器、木器と共に小銅鐸が出土し、第5次調査では中期から後期にかけての墳墓群が検出されている。高三瀨遺跡の性格が少しずつ明らかになってきている。周囲にも弥生時代の遺跡が多く存在し、高三瀨遺跡の北端に位置する鳥帽子塚付近からは銅剣が2点出土し、自然堤防の最高位付近に位置する御廟塚貝塚は、矢野一真が『筑後将士軍談』の中で墳墓の存在を示し、箱式石棺と考えられる棺外に銅剣が2点副葬されていたと紹介している。また、現在でもカキ殻などが散乱する貝塚でもある。

高三瀨遺跡は三瀨町高三瀨に位置し、これまでの調査で低位段丘上を中心に広い範囲に広がっていることが確認されている。最も標高が高い地点で約8m程度を測り、周囲とは3m程度の比高がある。これまで弥生時代から中世にかけての遺構や遺物が確認されている。

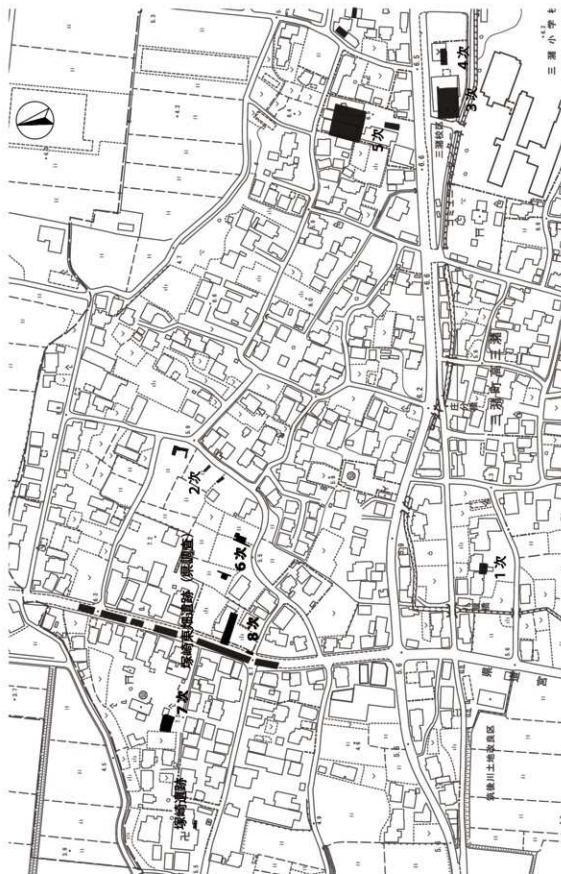
今回報告する高三瀨遺跡第6～8次調査は遺跡の西部に位置し、第7・8次調査地点は遺跡の中でも最も標高が高い地点付近に当たり、標高約7mを測る。第6次調査地点は第8次調査地点の東隣で、本来は東へ向かって緩やかに標高が下る地形であったと考えられるが、掘削され標高は約5mを測る。

#### 〈参考文献〉

- 伊崎俊秋 1998 『下林西田遺跡 県道大川大木線関係埋蔵文化財調査報告1』福岡県文化財調査報告書第132集  
福岡県教育委員会  
下山正一 1996 「有明海北岸低平地の成因と海岸線の変遷」『文明のクロスロード MUSEUM KYUSHU』52 博物館等建設推進会議九州



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/3,000)

## III. 第6次調査

### 1. 調査に至る経緯

本調査は平成28年8月10日付で、土地所有者より久留米市三潞町高三潞63における、宅地分譲に伴う「埋蔵文化財包蔵の有無について」の照会が提出されたことに端を発する。調査地は周知の遺跡である高三潞遺跡の範囲内に含まれ、調査地を含む周辺は弥生時代の遺構が展開していると考えられた。そのため、土地所有者との協議の結果、道路建設予定地のうち、100㎡について調査の対象とし、平成28年10月24日より調査に入る運びとなった。なお、調査区狭小のため、確認調査として実施した。

### 2. 調査の記録

#### (1) 調査の経過

平成28年10月24日、調査区の縄張り及び表土剥ぎを実施した。水田の耕作土である表土は20cm程度であり、その直下に黄褐色粘土の地山を検出した。過去に水田にするために相当量削平されているとみられ、後に第8次調査が実施された西側隣地とは2m程の比高差が確認できる。調査区は試掘の結果から溝が存在する部分に限られており、西区と東区に分かれている。

西区、東区ともに遺構の掘削及び記録作成を進め、11月2日に全体写真を撮影した。同日から埋戻しを行い、11月4日に機材を撤収し、調査を終了した。遺構の測量データは株式会社CUBIC社製ソフト「遺構くんcubic」にて編集・保存している。また記録写真は6×7判で撮影した。

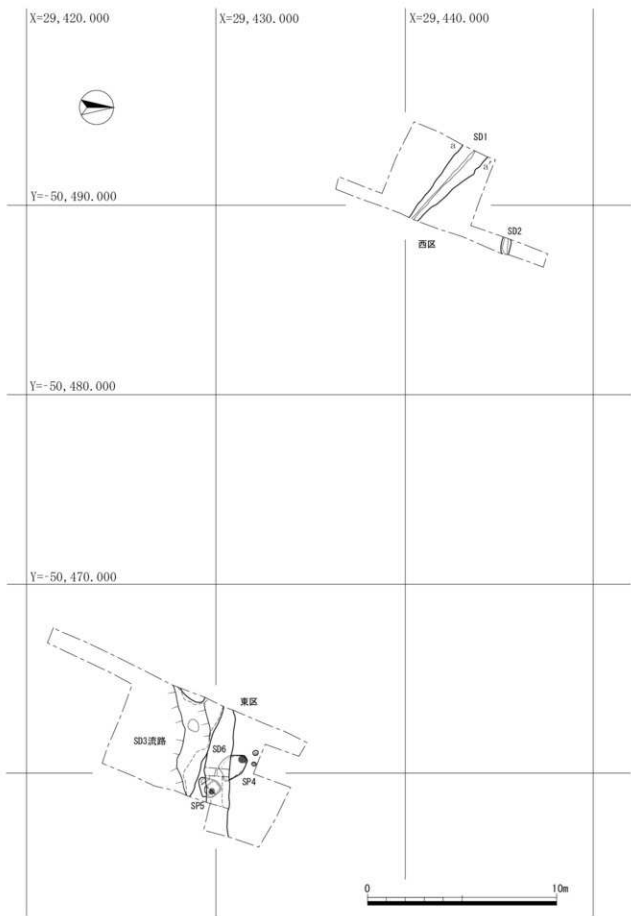
#### (2) 検出遺構

今回の調査では、溝2条、流路1条、柱穴2基が検出された。削平のために大部分の遺構が既に消滅している可能性が高い。

#### 溝

##### SD1 (第3・4・11・12図)

西区中央で検出された長さ4.8m以上、上端の最大幅1.4m、深さ0.7mの溝である。平面形は直線的な形状を呈し、断面形は逆三角形を呈する。軸はN-132°-Eを測る。埋土は1層～4層までは暗褐色土を主体とするが、5層以下は地山由来と見られる黄褐色粘土が主体をなす。遺物は弥生前期の土器、紡錘車、石器などが出土している。調査地は西に隣接する高三潞遺跡第8次調査地点から2m程度低く、おそらく水田にする際に削平されていると考えられる。この遺構の上部も同様に2m程度削平されている可能性が高い。他の遺構との切り合いはない。



第3図 遺構配置図 (1/200)

SD2 (第3図)

西区北側で検出された溝である。調査区狭小のため詳細は不明である。遺物は弥生土器が出土している。

SD6 (第3・13図)

東区北側で検出された長さ6.9m以上、幅1.2m、深さ0.6mの溝である。平面形は直線的な形状、断面形は逆三角形を呈する。軸はN-90°-Eを測る。埋土は暗褐色土が主体をなす。遺物は弥生中期の土器、石器などが出土している。断面形状や埋土、遺物の時期を鑑みると、SD1とは同一遺構である可能性がある。SD3に先出し、SP4とSP5に後出する。

流路

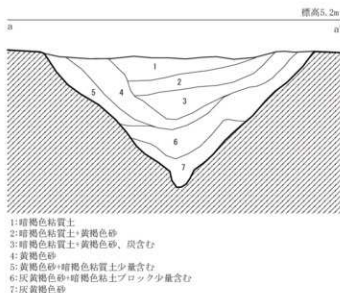
SD3 (第3・14図)

東区南側で検出された長さ6.1m以上、幅3.9m以上の溝である。肩は北辺しか検出されておらず、南側に深くなっていく。確認調査のため北辺付近しか掘削しておらず、南側の深さは不明である。埋土は、北辺付近は暗褐色粘質土、南側上面には灰色の砂層が堆積している。遺物は前期～中期の土器、石器などが出土している。SD6に後出する。

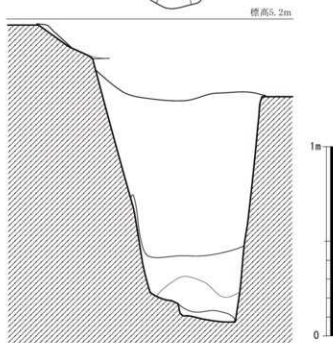
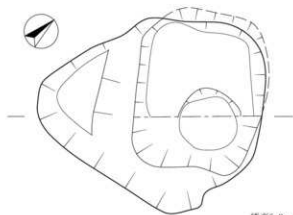
柱穴

SP4 (第3・15・16図)

東区北側で検出された長辺1.4m、短辺1.1m、深さ1m以上の柱穴である。平面形は楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。検出面から5cmほど下位から柱根が検出された。柱根の周囲には裏込めとみられる砂と粘土の互層が確認できる。遺物は弥生前期の遺物主体をなす。SD6に先出する。

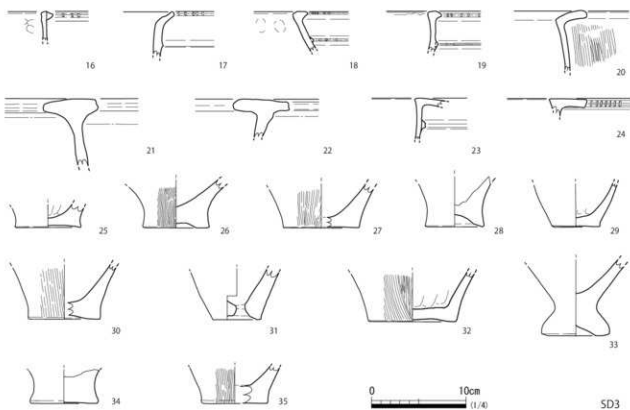
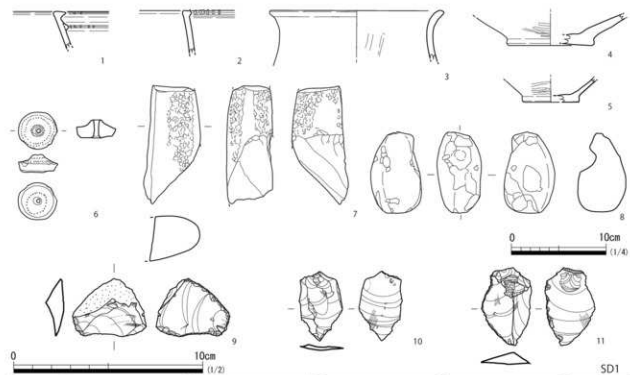


第4図 SD1土層断面図(1/40)

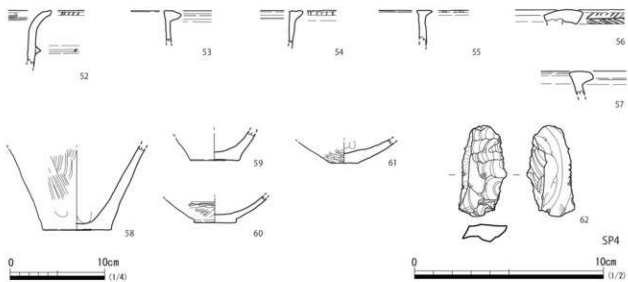
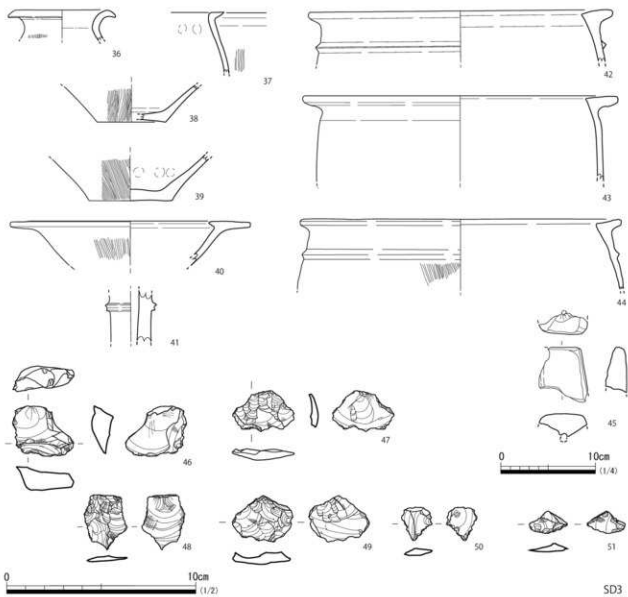


第5図 SP5実測図(1/20)

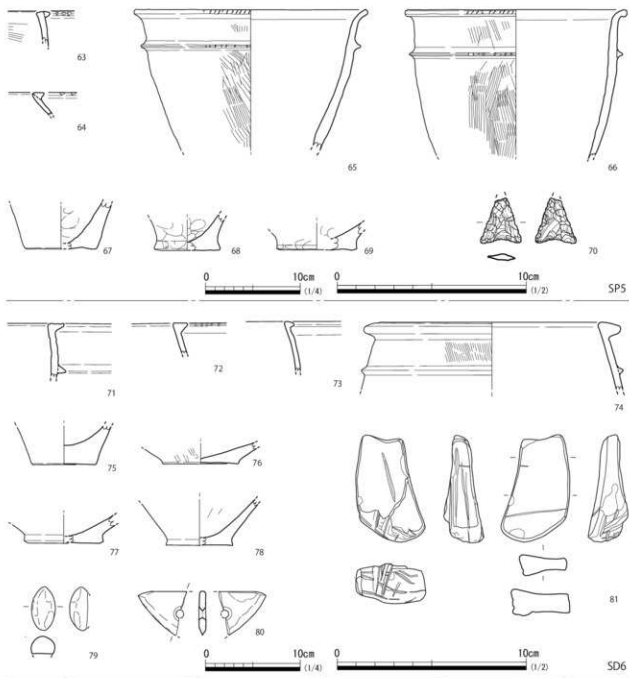




第6図 遺物実測図①(1/2、1/4)



第7図 遺物実測図②(1/2、1/4)



第8図 遺物実測図③(1/2, 1/4)

## SP5 (第3・5・17・18図)

東区北側で検出された長辺1.1m、短辺1.0m、深さ1.6mの柱穴である。平面形は隅丸方形、断面形は逆台形を呈する。検出面から5cmほど下位から柱根が検出された。柱根の周囲には暗褐色の粘質土の埋土が確認できる。遺物は弥生前期の土器、石器が出土している。SD6に切られる。

## (3) 出土遺物

今回の調査では弥生土器、石器、獣骨などパンコンテナー6箱分の遺物が出土した。まずSD1

第2表 出土遺物観察表①

遺物番号	発掘番号	出土段階	材質	形状	位置			色調		調製(土質)		出土	備考	発掘番号
					経度	緯度	深さ	内側	外側	内側	外側			
					[度]	[度]	[m]							
1	第4期	201	粘土土器	壺	-	-	4.0	にじみ-褐色	褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000970
2	第4期	201	粘土土器	壺	-	-	4.5	にじみ-褐色	褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000971
3	第4期	201	粘土土器	壺	113.81	-	5.0	真黒褐色	真黒褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000972
4	第4期	201	粘土土器	壺	-	-	5.0	にじみ-褐色	灰白	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000973
5	第4期	201	粘土土器	壺	-	-	10.0	にじみ-褐色	にじみ-褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000974
6	第4期	201	粘土土器	壺	-	-	10.0	にじみ-褐色	にじみ-褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000975
7	第4期	201	土製品	粘機織	4.1	-	1.0	にじみ-褐色	-	-	-	-	201414	000976
8	第4期	201	石製品	石片	13.0	4.0	4.0	-	-	-	-	4号土器	201414	000977
9	第4期	201	観心製品	平形土	4.0	5.0	4.0	-	褐色	-	-	-	201414	000978
9	第4期	201	石製品	スチロイター	5.0	5.0	5.0	-	-	-	-	5号土器	201414	000979
10	第4期	201	石製品	スチロイター	5.0	5.0	5.0	-	-	-	-	5号土器	201414	000980
11	第4期	201	石製品	スチロイター	4.1	5.0	5.0	-	-	-	-	5号土器	201414	000981
12	第4期	202	粘土土器	壺	-	-	10.0	にじみ-褐色	灰白	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000982
13	第4期	202	粘土土器	壺	-	-	4.0	にじみ-褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000983
14	第4期	202	粘土土器	壺	-	-	5.0	真褐色	にじみ-褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000984
15	第4期	202	粘土土器	壺	-	-	5.0	真褐色	にじみ-褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000985
16	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	10.0	にじみ-褐色	にじみ-褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000986
17	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	4.0	真褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000987
18	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	4.0	真褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000988
18	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	4.0	真褐色	にじみ-褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000989
19	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	6.0	真褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000990
21	第4期	202	土製	粘土土器	壺	113.81	10.0	にじみ-褐色	褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000991
22	第4期	202	土製	粘土土器	壺	10.0	10.0	褐色	褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000992
23	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	4.0	真褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000993
24	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	1.0	真褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000994
25	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	5.0	にじみ-褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000995
26	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	5.0	真褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000996
27	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	4.0	にじみ-褐色	褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000997
28	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	5.0	真褐色	褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000998
29	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	4.0	真褐色	褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	000999
30	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	4.0	真褐色	褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	001000
30	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	4.0	真褐色	褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	001001
31	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	5.0	にじみ-褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	001002
32	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	5.0	にじみ-褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	001003
33	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	10.0	褐色	褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	001004
34	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	5.0	にじみ-褐色	褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	001005
35	第4期	202	土製	粘土土器	壺	-	5.0	にじみ-褐色	褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	001006
36	第5期	203	土製	粘土土器	壺	113.81	10.0	にじみ-褐色	褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	001007
37	第5期	203	土製	粘土土器	壺	-	4.0	真褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	001008
38	第5期	203	土製	粘土土器	壺	-	4.0	真褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	001009
39	第5期	203	土製	粘土土器	壺	-	4.0	真褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	001010
40	第5期	203	土製	粘土土器	壺	-	4.0	真褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	001011
41	第5期	203	土製	土器	器	-	5.0	真褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	001012
42	第5期	203	土製	粘土土器	壺	113.81	5.0	にじみ-褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	001013
43	第5期	203	土製	粘土土器	壺	113.81	5.0	真褐色	真褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	001014
44	第5期	203	土製	粘土土器	壺	113.81	10.0	真褐色	にじみ-褐色	黄	黄	1-1000000000000000000	201414	001015
45	第5期	203	土器	丸形	4.0	4.0	5.0	-	-	-	-	-	201414	001016
46	第5期	203	土製品	粘機織	5.0	5.0	5.0	-	-	-	-	5号土器	201414	001017
47	第5期	203	土製品	スチロイター	5.0	5.0	5.0	-	-	-	-	5号土器	201414	001018
48	第5期	203	土製品	スチロイター	5.0	5.0	5.0	-	-	-	-	5号土器	201414	001019
49	第5期	203	土製品	スチロイター	5.0	5.0	5.0	-	-	-	-	5号土器	201414	001020
50	第5期	203	土製品	丸形	5.0	5.0	5.0	-	-	-	-	5号土器	201414	001021

第3表 出土遺物観察表②

遺物番号	出土階層	材質	形状	測長(±mm)				測厚(±mm)	測定方法	出土	備考	記録番号	
				全長		最大長							測定
				(mm)	(mm)	(mm)	(mm)						
61	第 7 階 200 上層	石製品	スズメナイフ	3.8	2.8	0.3	-	蒸	-	-	201414 000020		
62	第 7 階 204	粘土土器	鉢	-	-	0.25	21.15	筒状、口縁微 凹縁	ラ	ラ	201414 000042		
63	第 7 階 204	粘土土器	鉢	-	-	0.30	21.55	21.55	筒状	ラ	201414 000044		
64	第 7 階 204	粘土土器	鉢	-	-	0.25	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000045		
65	第 7 階 204	粘土土器	鉢	-	-	0.25	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000046		
66	第 7 階 204	粘土土器	鉢	-	-	0.25	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000047		
67	第 7 階 204	粘土土器	鉢	-	-	0.20	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000048		
68	第 7 階 204	粘土土器	鉢	-	-	0.20	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000049		
69	第 7 階 204	粘土土器	鉢	-	-	0.20	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000050		
70	第 7 階 204	粘土土器	鉢	-	-	0.20	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000051		
71	第 7 階 204	粘土土器	鉢	-	-	0.20	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000052		
72	第 7 階 204	粘土土器	鉢	-	-	0.20	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000053		
73	第 7 階 204	石製品	スズメナイフ	3.8	2.8	0.3	-	蒸	-	-	201414 000054		
74	第 8 階 202	粘土土器	鉢	-	-	0.30	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000055		
75	第 8 階 202	粘土土器	鉢	-	-	0.30	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000056		
76	第 8 階 202	粘土土器	鉢	114.45	-	114.35	筒状、口縁 凹縁	筒状	ラ	ラ	201414 000057		
77	第 8 階 202	粘土土器	鉢	114.45	-	114.6	筒状、口縁 凹縁	筒状	ラ	ラ	201414 000058		
78	第 8 階 202	粘土土器	鉢	114.75	-	114.75	筒状、口縁 凹縁	筒状	ラ	ラ	201414 000059		
79	第 8 階 202	粘土土器	鉢	-	-	0.30	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000060		
80	第 8 階 202	粘土土器	鉢	-	-	0.30	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000061		
81	第 8 階 202	粘土土器	鉢	-	-	0.30	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000062		
82	第 8 階 202	粘土土器	鉢	-	-	0.30	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000063		
83	第 8 階 202	粘土土器	鉢	-	-	0.30	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000064		
84	第 8 階 202	粘土土器	鉢	-	-	0.30	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000065		
85	第 8 階 202	粘土土器	鉢	-	-	0.30	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000066		
86	第 8 階 202	粘土土器	鉢	-	-	0.30	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000067		
87	第 8 階 202	粘土土器	鉢	-	-	0.30	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000068		
88	第 8 階 202	粘土土器	鉢	-	-	0.30	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000069		
89	第 8 階 202	粘土土器	鉢	-	-	0.30	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000070		
90	第 8 階 202	粘土土器	鉢	-	-	0.30	21.45	筒状	ラ	ラ	201414 000071		
91	第 8 階 202	石製品	スズメナイフ	3.8	2.8	0.3	-	蒸	-	-	201414 000072		
92	第 8 階 202	石製品	丸石	11.8	7.8	2.8	-	21.45	筒状	-	201414 000073		
93	第 23 階 2103 上層	動物遺存体 シカ	角	15.0	-	5.1	-	-	-	-	201414 000074		
94	第 23 階 2103 上層	動物遺存体 イノシシ	右下顎第2大臼歯	3.8	1.1	11.0	-	-	-	-	201414 000075		
95	第 23 階 2103 上層	動物遺存体	上腕骨	15.0	5.3	1.3	-	-	-	-	201414 000076		
96	第 23 階 2103 上層	動物遺存体	恥骨	9.6	5.9	5.6	-	-	-	-	201414 000077		
97	第 23 階 2103 上層	動物遺存体	中手骨	15.0	5.4	1.8	-	-	-	-	201414 000078		
98	第 23 階 2103 上層	動物遺存体	椎骨	15.7	13.0	9.9	-	-	-	-	201414 000079		
99	第 23 階 2101	動物遺存体 シカ	右1動物	14.3	13.0	14.0	-	-	-	-	201414 000080		
100	第 23 階 2101	動物遺存体 シカ	角	15.0	13.0	5.9	-	-	-	-	201414 000081		
101	第 23 階 2101	動物遺存体 シカ	角	14.3	13.75	1.7	-	-	-	-	201414 000082		
102	第 23 階 2101	動物遺存体	肩胛骨	15.0	-	15.0	-	-	-	-	201414 000083		
103	第 23 階 2101	動物遺存体	肩胛骨	14.8	11.4	11.1	-	-	-	-	201414 000084		
104	第 23 階 2102	動物遺存体 イノシシ	大臼歯	11.5	11.5	8.8	-	-	-	-	201414 000085		
105	第 23 階 2103	動物遺存体	肩胛骨	15.4	11.5	16.0	-	-	-	-	201414 000086		
106	第 23 階 2103	動物遺存体	肩胛骨	15.0	11.45	15.0	-	-	-	-	201414 000087		
107	第 23 階 2103	動物遺存体	肩胛骨	14.8	11.9	16.75	-	-	-	-	201414 000088		
108	第 23 階 2103	動物遺存体	椎骨	15.7	13.75	16.0	-	-	-	-	201414 000089		
109	第 23 階 2103	動物遺存体	椎骨	15.7	13.40	17.5	-	-	-	-	201414 000090		
110	第 23 階 2103	動物遺存体 イノシシ	椎骨	15.0	14.8	15.0	-	-	-	-	201414 000091		
111	第 23 階 2103	動物遺存体 イノシシ	椎骨	16.0	14.8	15.0	-	-	-	-	201414 000092		
112	第 23 階 204	木炭	片	10.0	107.0	106.0	-	-	-	-	201414 000093		

の出土遺物について述べる。1、2は甕である。弥生前期末頃とみられる。1、2ともに口縁上部が平坦であり内傾する。3は壺の口縁、4、5は底部である。4、5は外面にミガキが施されている。6は土製紡錘車と考えられる。上下両面に針等による刺突文が施されている。上面内輪に24、中輪に40個、外輪に48個、下面に24個の刺突文が並んでいる。7は磨製石斧である。安山岩系の火成岩とみられる。8は軽石である。側面が円形に抉られている。9～11は黒曜石製のスクレイパーである。SD2からの出土遺物について述べる。12、13は甕の底部である。SD3の出土遺物について述べる。14は列点文のある土器片である。15は夜白式の浅鉢の口縁部である。16～24は甕の口縁である。16は口唇部に刻目突帯が施される。突帯は貼り付けであり断面三角形を呈する。17は如意形口縁を呈し口唇に刻目を施す。18は口縁が内傾し、二重の刻目突帯を有する。19は二重の刻目突帯を有する。20は口縁がくの字形に屈曲する。21～24は中期の鋤形口縁の甕である。24は口唇部の刻目を有する。25～35は甕の底部である。31は焼成後に穿孔されている。33は上げ底でくびれるため中期の傾向を示す。36は前期の壺の口縁である。中期の短頸壺である。38、39は壺の底部である。40、41高坏である。42～44は中期の甕の口縁である。42と44は胴部の突帯を有する。45は土製支脚である。断面四角形を呈し、中心部は焼成前に穿孔されている。46～51は黒曜石製の石器である。46は剥片、47～49、51はスクレイパーである。50は石錐である。SP4の遺物について述べる。52～57は甕の口縁である。52は如意形口縁、52は断面三角形の突帯を有する。52と54、55は刻目を有する。56、57は中期の甕の口縁である。58、59は甕の底部である。60、61は壺の底部であり、ともに外面にミガキが施されている。62は黒曜石製のスクレイパーである。SP5の出土遺物について述べる。63～66は前期の甕の口縁である。いずれも口唇に刻目突帯を有し、65、66は胴部にも刻目突帯を有する。67～69は甕の底部である。70は安山岩製の石鏝である。先端が欠損している。SD6の出土遺物について述べる。71～74は甕の口縁である。72は前期、他は中期の様相を呈する。75は甕の底部、76～78は壺の底部である。79は土俵である。80は石包丁である。石材は堆積岩系とみられる。81は砥石である。断面U字の溝が多く残っており、玉を磨いた可能性がある。石材は砂岩とみられる。

#### 4. 小 結

出土遺物から、SD1は弥生時代前期の所産と考えられる。断面はV字を呈し、検出面から上位が2m程削平されていることを鑑みれば、集落の環濠である可能性が考えられる。SD2は遺物が少なく、時期決定には至らない。SD3は前期の遺物も混じるが、中期が主体を占める。北西に隣接する第2次調査では、地形から同一遺構とみられる2SD1から弥生時代中期及び古墳時代前期の土器が出土している。SD6は弥生時代前期から機能し、中期には埋没したとみられる。SP4はわずかに中期の遺物が混じるがSD6からの混入と考えられ、SP4、SP5ともに弥生時代前期の所産と考える。また、SD1・3から動物遺存体（イノシシ、シカ）が一定量出土していることも興味深い。

（江頭）



第9図 西区近景（南から）



第10図 東区近景（南西から）



第11図 SD1土層断面 (東から)



第12図 SD1完掘状況 (南東から)



第13図 SD6土層断面 (東から)



第14図 SD3軟骨出土状況 (南から)



第15図 SD4柱根検出状況 (北東から)



第16図 SP4・SP5掘削状況 (南西から)

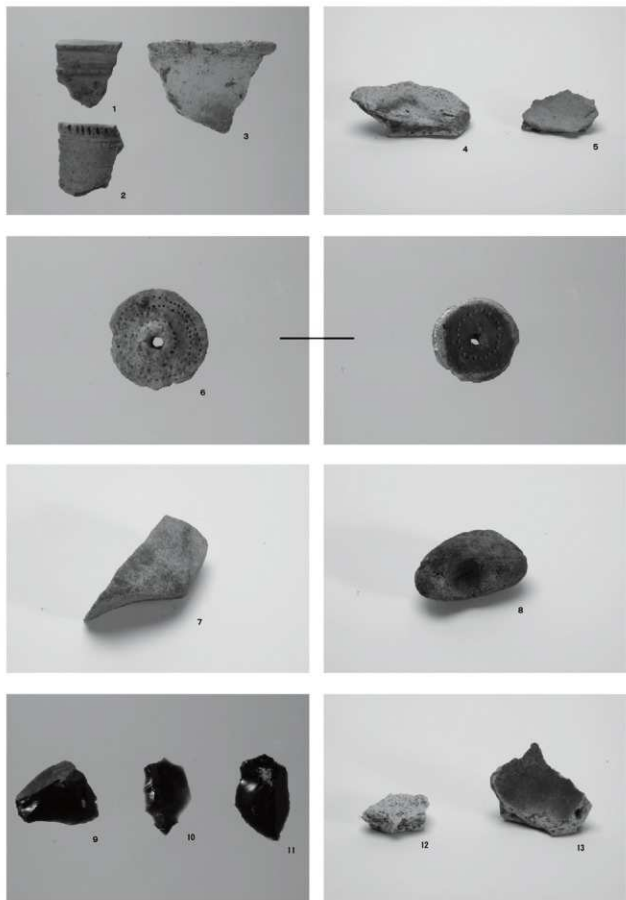


第17図 SP5柱根検出状況 (南西から)

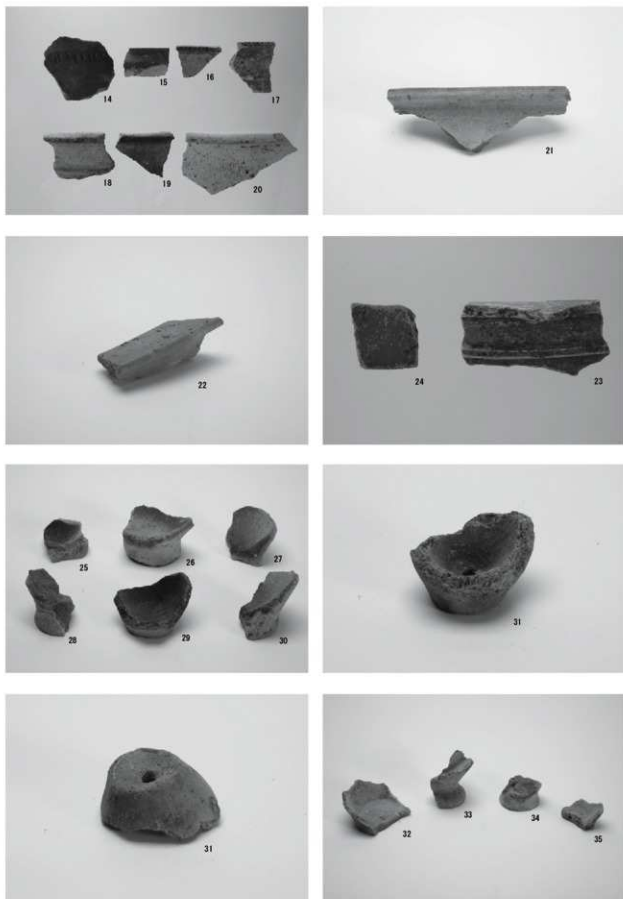


第18図 SP5掘削状況 (南西から)

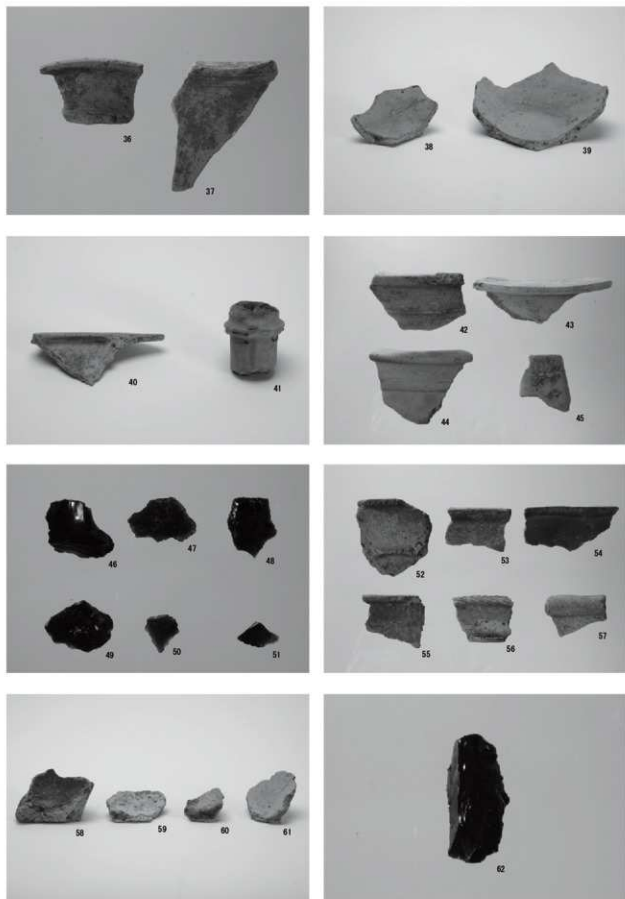




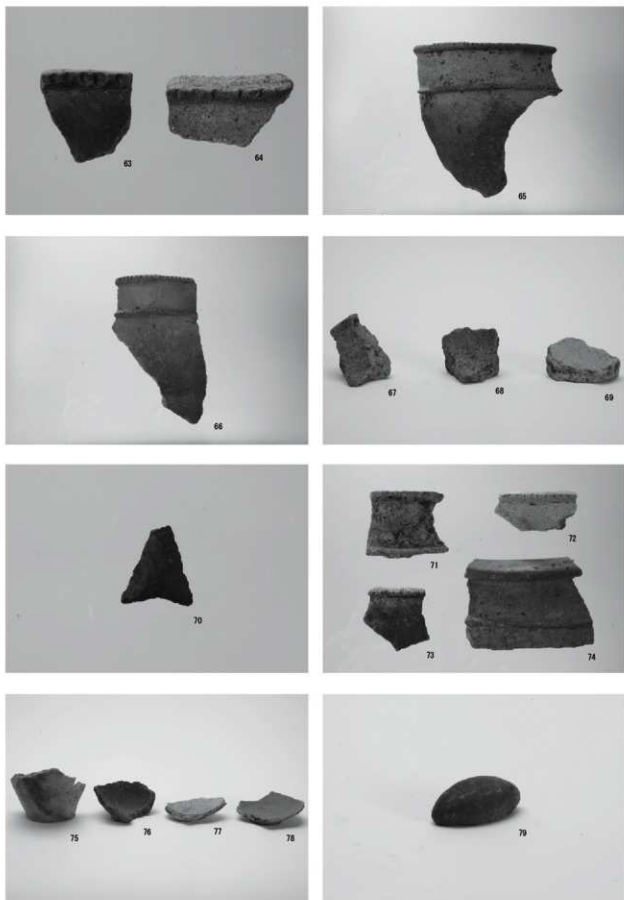
第19図 出土遺物写真①



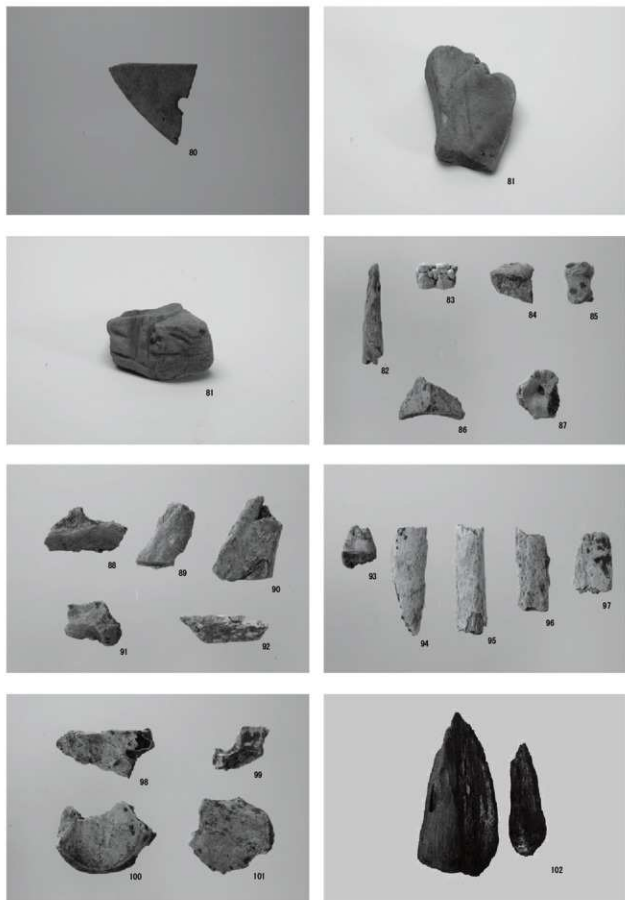
第20図 出土遺物写真②



第21図 出土遺物写真①



第22図 出土遺物写真④



第23図 出土遺物写真⑤

## IV. 第7次調査

### 1. 調査に至る経緯

平成29年2月27日、土地所有者より久留米市三潞町高三潞161-5における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である高三潞遺跡の範囲内であり、塚崎御廟塚貝塚の南30mに位置する。工事計画では保護層が確保できないため、土地所有者に対して住宅建設部分の発掘調査が必要である旨を回答した。2月27日、土地所有者から発掘調査の依頼が提出されたため、協議の上で住宅建設部分を対象に発掘調査を実施する運びとなった。現地での発掘調査は、平成29年4月17日から開始し、6月15日に完了した。対象面積は299㎡で、調査面積は118㎡である。

### 2. 調査の記録

#### (1) 調査の経過

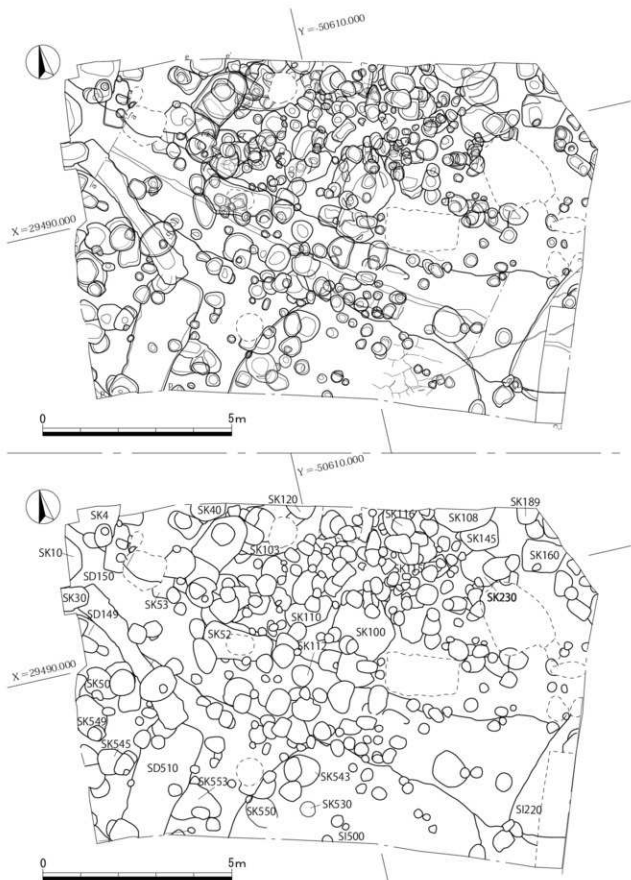
今回の発掘調査は、高三潞遺跡における遺構の位置・範囲確認を主な目的として実施した。なお、排土置き場を確保するため、調査区は北部から中央部にかけてと南部とで二分した。平成29年4月17日に器材を搬入し、18日に調査区北半を重機による表土剥ぎを西部から行った。調査区東部では地表下約0.3mで遺構検出面に至ったが、調査区西部では同一標高では遺構が確認できなかったため、東部はさらに0.3m掘削した。19日、表土剥ぎ終了後、遺構の検出、掘削を開始した。測量、撮影などの記録を適宜実施し、6月1日に北部の全景写真を気球によって撮影し、残りの測量や実測、遺物取り上げを完了した。2日に北区を埋め戻し、5日に南区の表土剥ぎを行い、遺構の検出、掘削を開始した。測量、撮影などの記録を行い、13日に南区の全景写真を高所作業車から撮影した。その後、遺構の実測、写真撮影を行い、15日の埋め戻しと撤収を経て、現地での発掘調査を終了した。

#### (2) 基本層序

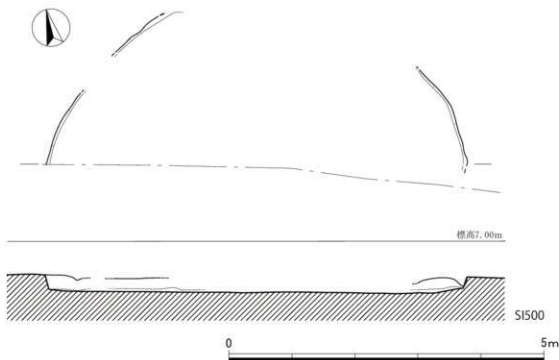
調査区東部では50cmの褐色粘質土、調査区中央部では30cmの褐色粘質土、15cmの暗灰色砂質土、15cmの暗褐色砂質土の表土が堆積する。調査区西部では調査区東部と同一標高で遺構が確認できず、西部は地山が低くなると考えたが、堅穴建物等大きな遺構が重複していた可能性もある。

#### (3) 遺構の概要

弥生時代の遺構が主体で堅穴建物2棟、溝3条、土坑23基、ピット多数、不明遺構2基を検出した。調査区北部は遺構の密度が高く、ピットや土坑が複雑に重複する。調査区東部、南部は遺構が希薄になる。以下、各遺構について述べる。



第24図 遺構配置図、遺構番号図 (1/100)



第25図 S 1500実測図 (1/60)

#### 竪穴建物

##### S 1 220 (第24・26・50・54図)

調査区の南東隅で検出した。平面形は方形と考えられるが、大部分が調査区外へ延びる。長軸3.6m以上、短軸1.7m以上、深さ0.5mを測る。S D150に後出する。弥生土器、石器、土製品が出土している。弥生時代中期初頭に属する。

##### S 1 500 (第25・51図)

調査区南部で検出した。北部はS D150に先出し、南部は調査区外へ広がるが平面形は円形を呈すると考えられる。長軸6.6m以上、短軸2.6m以上、深さ0.3mを測る。弥生土器、石器、土製品が出土している。弥生時代前期末に属する。

#### 溝

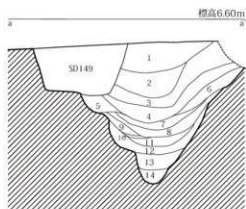
##### S D 149 (第26・59図)

調査区西部で検出した。長さ4.4m、上面幅0.7m、深さ0.7mを測り、直線的に延びる。軸はN-27°-Wを測り、S D150・510に後出する。断面形は逆台形を呈する。弥生土器、石器、土製品、貝殻、動物骨が出土している。弥生時代中期初頭に属する。

##### S D 150 (第26・52～60図)

調査区北西部から南西部へ延びる溝である。長さ14.5m以上、上面幅3.1m、深さ1.6mを測り、北東を中心として緩やかに弧を描く。断面形は三角形を呈し環濠である可能性がある。弥生土器、石器、土製品、貝殻、動物骨が出土している。弥生時代前期後半から中期初頭に属する。



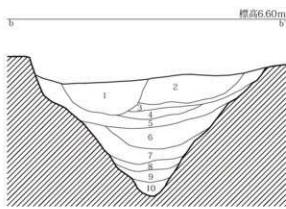


S D149・150西部

SD149. 暗灰色粘質土。黄褐色粘質土ブロックを含む

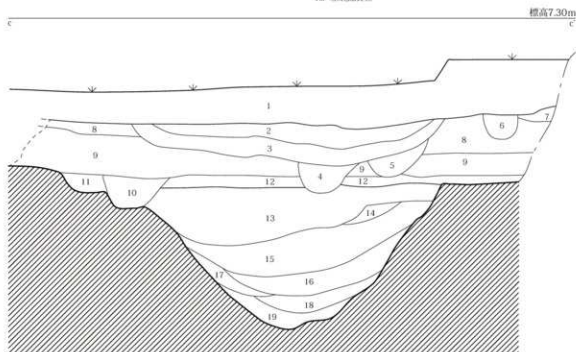
SD150

1. 黒褐色粘質土。黄褐色粘質土を含む。
2. 暗褐色粘質土。黒白色粘質土を多く含む。
3. 暗褐色粘質土。黒白色粘質土を含む。
4. 暗褐色粘質土。少量の黒白色粘質土を含む。
5. 黒褐色粘質土。細かい黒白色粘質土を含む。
6. 黒褐色粘質土。黒白色・褐色粘質土を含む。
7. 褐色粘質土。白粘質土。
8. 黄褐色粘質土。白色粘質土・褐色粘質土。
9. 暗灰色粘質土。黒白色粘質土を含む。
10. 褐色粘質土。
11. 暗褐色粘質土。少量の黒白色粘質土を含む。
12. 暗褐色粘質土。細かい黄褐色粘質土を含む。
13. 灰白色粘質土。
14. 暗褐色粘質土。



S D150中央部

1. 黒褐色粘質土。少量の褐色粘質土を含む。カキ殻を少量含む。
2. 暗褐色粘質土。カキ殻を多量に含む。
3. 暗褐色粘質土。褐色粘質土ブロックを含む。
4. 灰褐色粘質土。カキ殻を多量に含む。
5. 暗褐色粘質土。暗褐色粘質土ブロックを多量に含む。
6. 灰褐色粘質土。黄褐色粘質土ブロックを多量に含む。
7. 黄・黄褐色粘質土。
8. 暗褐色粘質土。細かい黄褐色粘質土を含む。
9. 灰白色粘質土。褐色粘質土を含む。
10. 暗褐色粘質土。

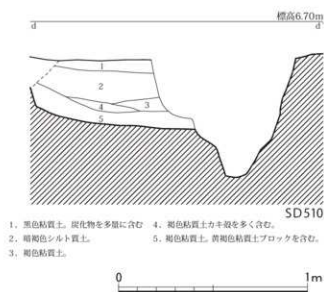


S I 220・S D150西部

1. 暗褐色粘質土。固い土層が多く含む。
2. 暗褐色粘質土。貝・土層片をわずかに含む。
3. 黒色粘質土。貝を多量に含む。土層片を含む。
4. 暗褐色粘質土。黄褐色粘質土ブロックを含む。
5. 暗褐色粘質土。黄褐色粘質土ブロックを含む。
6. 暗褐色粘質土。貝・土層片をわずかに含む。
7. 黒色粘質土。
8. 暗褐色粘質土。2m大の黄褐色粘質土ブロックを含む。
9. 暗褐色粘質土。黄褐色粘質土ブロックを含む。わずかにカキ殻を含む。
10. 暗褐色・黄褐色粘質土。
11. 黄褐色粘質土。10cm大の黄褐色粘質土ブロックを含む。
12. 褐色・暗褐色・黄褐色粘質土。
13. 褐色粘質土。10m大の黄褐色粘質土ブロックを含む。
14. 暗褐色粘質土。
15. 暗褐色粘質土。10cm大の黄褐色粘質土ブロックを含む。
16. 黄褐色粘質土。暗褐色粘質土ブロックを含む。
17. 暗褐色粘質土。
18. 暗褐色粘質土。黄褐色粘質土ブロックを含む。
19. 暗褐色粘質土。



第26図 S I 220、S D149・150土層断面図 (1/30)



第27図 SD510土層断面図 (1/20)

**SD510 (第27・60・61図)**

調査区南西部で検出した。南側は調査区外へ延び、上面幅は北側になるにつれ広がる。長さは3.3m以上、上面幅の最大は1.5m、深さ0.3m、軸はN-32°-Eを測る。弥生土器、石器、土製品、貝殻が出土している。弥生時代中期初頭に属する。

**土坑****SK10 (第28・62図)**

調査区北西部で検出した。東側は調査区外へ延びるが平面形は円形を呈すると考えられる。長軸1.2m以上、短軸0.4m以上、深さ0.6m以上を測り、SD150に後出する。

弥生土器、石器、貝殻が出土している。弥生時代中期初頭に属する。

**SK40 (第28・63図)**

調査区北部で検出した。北側は調査区外へ延びるが平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。長軸0.9m、短軸0.5m以上、深さ0.95mを測る。弥生土器が出土している。弥生時代前期末から中期初頭に属する。

**SK50 (第28図)**

調査区西部で検出した。平面形は楕円形を呈する。長軸0.85m、短軸0.5m、深さ0.3mを測る。調査区南半部を調査した際は検出できなかった。製塩に使用した可能性のある甕などの弥生土器、石器が出土している。弥生時代前期に属する。

**SK52 (第28図)**

調査区北部で検出した。平面形は楕円形を呈する。長軸1.8m、短軸1m、深さ0.15mを測り、SD150に後出する。弥生土器、貝殻、動物骨が出土している。弥生時代中期初頭に属する。

**SK53 (第28図)**

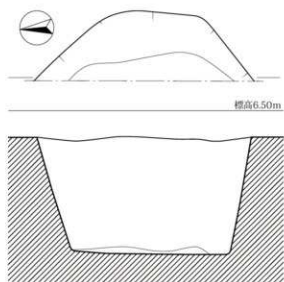
調査区西部で検出した。平面形は楕円形を呈する。長軸0.6m以上、短軸0.5m、深さ0.3mを測り、SD150に後出する。弥生土器、石器が出土している。弥生時代中期前葉に属する。

**SK100 (第29図)**

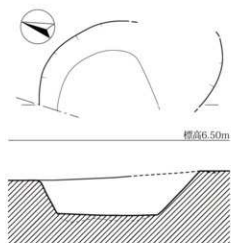
調査区中央部で検出した。平面形は不整形を呈し、東西に段を有する。複数の遺構に削平されているが、長軸1.8m以上、短軸1.5m、深さ1.2mを測る。弥生土器、石器が出土している。弥生時代中期初頭に属する。

**SK103 (第29図)**

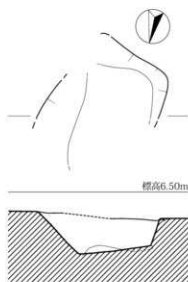
調査区北部で検出した。平面形は円形を呈すると考えられる。長軸2.8m以上、短軸1.4m以上、



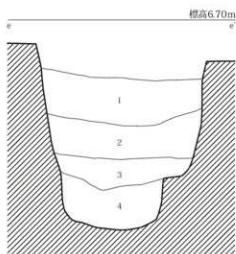
SK10



SK50

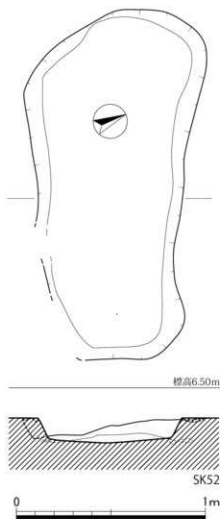


SK53



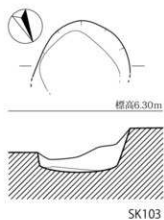
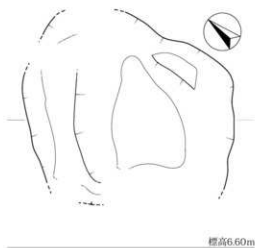
1. 暗褐色粘質土・赤褐色粘質土。
2. 暗褐色粘質土・暗黄褐色粘質土。
3. 暗褐色粘質土・黄褐色粘質土。
4. 暗褐色粘質土。黄褐色粘質土ブロックを含む。

SK40

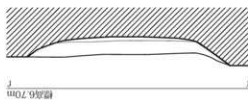
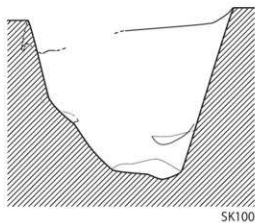


SK52

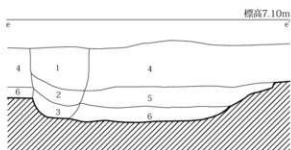
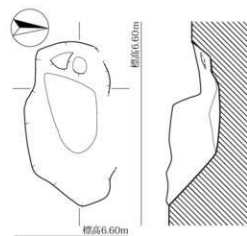
第28図 S K 10・40・50・52・53実測図 (1/20)



標高6.60m



SK100



SK108

1. 黒色粘質土。明黄褐色粘質土ブロックをわずかに含む。
2. 黄褐色粘質土。
3. 明黄褐色粘質土。黄褐色粘質土ブロックを含む。
4. 暗褐色粘質土。遺物破片を多く含む。
5. 暗黄褐色粘質土。黄褐色粘質土ブロックを含む。
6. 黄褐色粘質土。白色粘質土ブロックを少量含む。



SK110



第29図 S K100、103・108・110実測図 (1/20、1/30)

深さ0.3mを測り、SK120に先出する。弥生土器、石器が出土している。弥生時代中期初頭に属する。

#### SK108 (第29図)

調査区北東部で検出した。北部は調査区外へ延びるが平面形は円形を呈すると考えられる。長軸1.7m以上、短軸0.7m以上、深さ0.3mを測り、SK145に後出する。弥生土器が出土している。弥生時代中期初頭に属する。

#### SK110 (第29図)

調査区中央部で検出した。平面形は楕円形を呈し、西部に2つの段を有する。複数の遺構が重複している可能性もある。長軸1.3m、短軸0.7m、深さ0.4mを測る。弥生土器、貝殻が出土している。弥生時代中期初頭に属する。

#### SK112 (第30図)

調査区中央部で検出した。平面形は不整形を呈し、南北に段を有する。長軸1.1m以上、短軸0.9m、深さ0.7mを測り、SD150に先出する。弥生土器や石器、動物骨が出土している。弥生時代前期後半に属する。

#### SK115 (第30図)

調査区北部で検出した。平面形は楕円形を呈し、西部に段を有する。長軸0.8m、短軸0.5m、深さ、0.3mを測り、SK116に後出する。弥生土器や石器が出土している。弥生時代中期前葉に属する。

#### SK116 (第30図)

調査区北部で検出した。平面形は楕円形を呈する。長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.4mを測る。弥生土器や石器、動物骨が出土している。弥生時代中期前葉以降に属する。

#### SK120 (第30図)

調査区北部で検出した。北側が調査区外へ延びるが、円形を呈すると考えられる。長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.4mを測る。弥生土器や石器、動物骨が出土している。弥生時代中期前葉に属する。

#### SK145 (第30図)

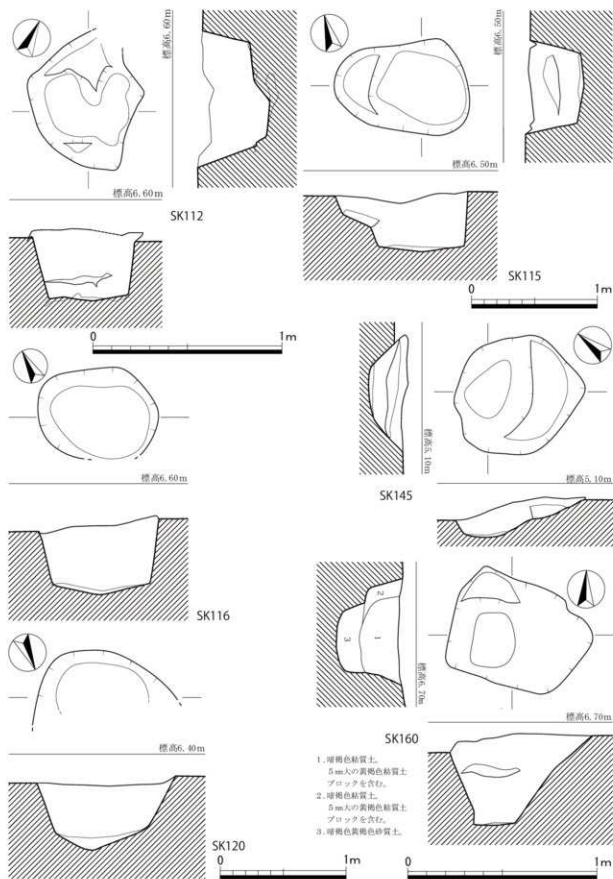
調査区北東部で検出した。平面形は円形を呈し、南側に段を有する。直径1m、深さ0.3mを測る。弥生土器や石器が出土している。弥生時代中期前葉に属する。

#### SK160 (第30図)

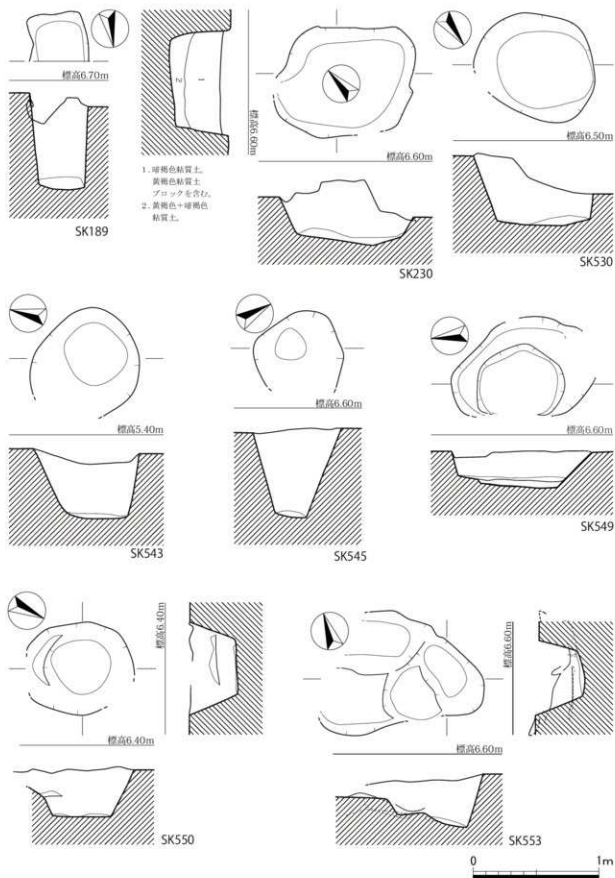
調査区北東部で検出した。西側は調査区外へ延びるが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、北側には段を有する。長軸1.1m以上、短軸0.8m、深さ0.7mを測る。弥生土器や動物骨が出土している。弥生時代中期後葉に属する。

#### SK189 (第31図)

調査区北東部で検出した。北側は調査区外へ延びるが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。長軸0.6m、短軸0.4m、深さ0.8mを呈する。弥生土器や石器が出土している。弥生時代中期中葉



第30図 S K112・115・116・120・145・160実測図 (1/20, 1/30)



第31圖 S K 189・230・530・543・545・549・550・553実測図 (1/30)

に属する。

**S K 230** (第31図)

調査区西部で検出した。平面形は隅丸方形を呈する。長軸1 m、短軸0.9 m、深さ0.5 mを呈する。弥生土器や石器が出土している。弥生時代中期後葉に属する。

**S K 530** (第31図)

調査区南東部で検出した。平面形は円形を呈する。直径0.9 m、深さ0.6 mを測り、S D 150に後出する。弥生土器が出土している。弥生時代中期初頭以降に属する。

**S K 543** (第31図)

調査区南部で検出した。平面形は円形を呈する。直径0.8 m、深さ0.6 mを測り、S I 500に後出する。弥生土器が出土している。弥生時代中期初頭以降に属する。

**S K 545** (第31図)

調査区南西部で検出した。平面形は円形を呈する。直径約0.7 m、深さ0.7 mを測る。弥生土器や石器、動物骨が出土している。弥生時代前期から中期に属する。

**S K 549** (第31図)

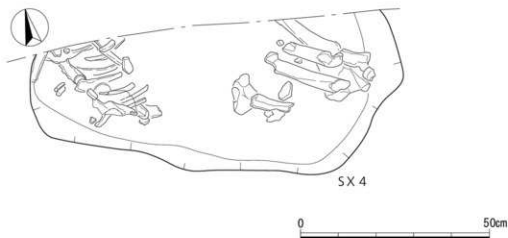
調査区南西部で検出した。平面形は楕円形を呈し、中央部に段を有する。長軸1.1 m、短軸0.8 m以上、深さ0.3 mを測る。弥生土器や石器が出土している。弥生時代中期に属する。

**S K 550** (第31図)

調査区の南部で検出した。平面形は楕円形を呈し、南側に段を有する。長軸0.9 m、短軸0.7 m、深さ0.4 mを測り、S I 500に先出する。弥生土器が出土している。弥生時代前期後半に属する。

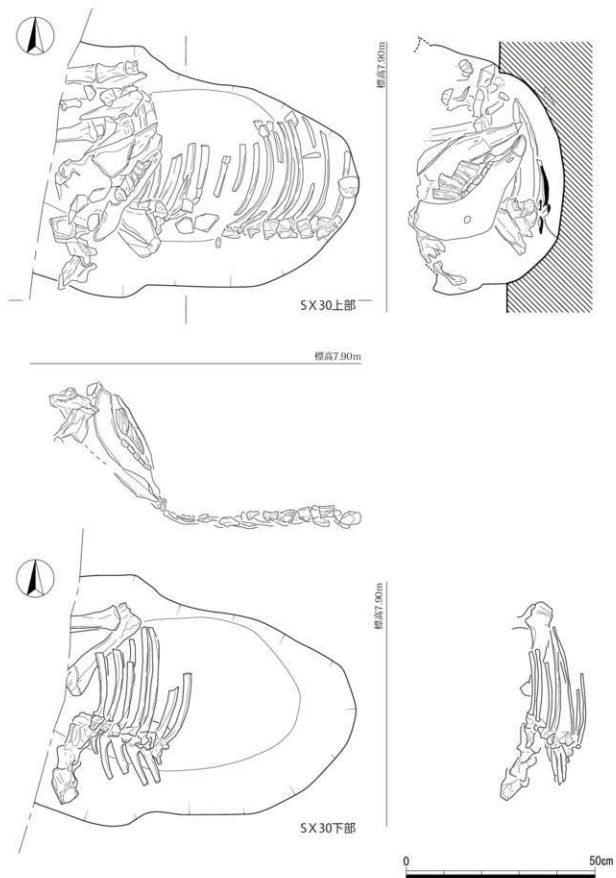
**S K 553** (第31図)

調査区南西部で検出した。平面形は不整形を呈し、西部に3つの段を有する。長軸1.2 m以上、短軸1 m、深さ0.5 mを測り、S D 510に先出する。弥生土器や石器が出土している。弥生時代前期末から中期初頭に属する。



第32図 SX 4実測図 (1/10)





第33図 SX30実測図 (1/10)

## 不明遺構

## S X 4 (第32・45・65図)

調査区北西部で検出した。北部は調査区外へ延びるため、調査区を可能な限り北側に拡張した。上位を一部重機で削平してしまっている。平面形は隅丸方形を呈し、動物骨を検出した。長軸1m、短軸0.4m以上、深さ0.15mを測る。失われている。出土遺物は弥生土器の破片のみであるため弥生時代以降に属すること推定されるが、詳細は不明である。

## S X 30 (第33・66・67図)

調査区北西部で検出した。西部は調査区外へ延びるため、可能な限り調査区を拡張した。平面形は楕円形を呈し、動物骨を検出した。長軸0.7m以上、短軸0.6m、深さ0.15mを測り、S D150に後出する。S X 4と同様に上部を重機で削平してしまっている。頭部の上方は近代の遺構に削平されている。出土遺物は弥生土器や石器、須恵器などがあり、古墳時代以降近代以前に属する。

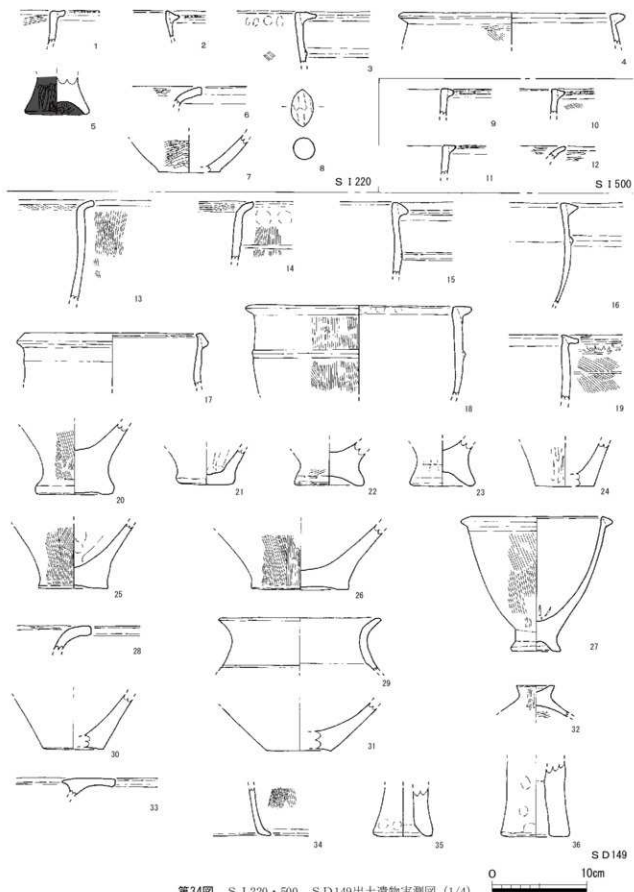
## (3) 遺物の概要 (第34~44・70~73図、第4~9表)

遺物の総量は、パンコンテナー25箱である。弥生土器が大半を占め、土師器、須恵器、石器、土製品、炭化物を含む。法量や色調などの詳細は、遺物観察表を参照願いたい。以下、各遺物の特徴について弥生土器、須恵器、土製品については遺構毎、石器については器種毎に簡単に補足する。

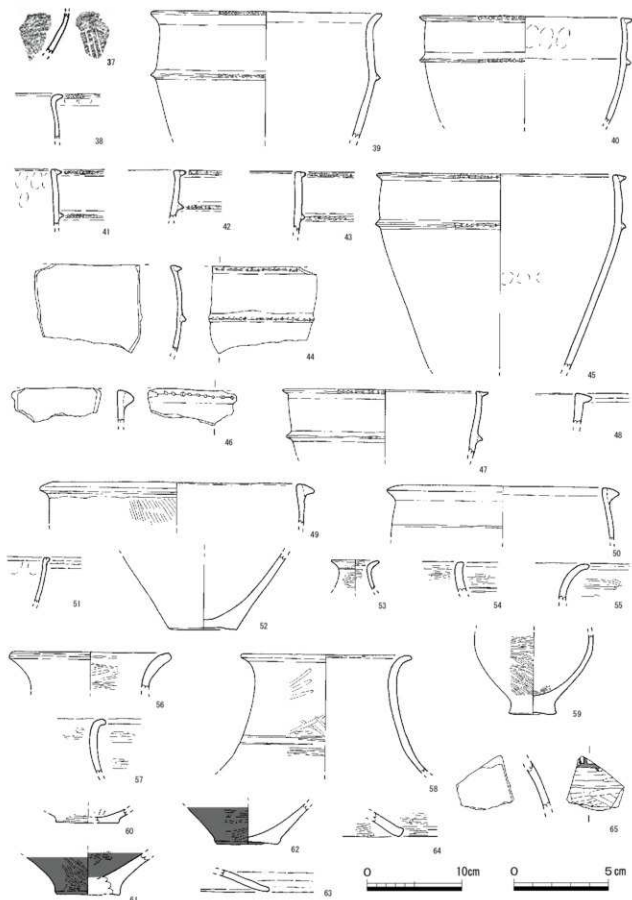
1~8はS I 200出土の弥生土器、土製品である。1~5は甕で、1は逆L字状口縁で、口縁端部が斜めに外反し、上端に刻目を施す。2は断面三角形の口縁で、口縁端部に刻目を施す。3は断面逆L字状に近い三角形の口縁である。胴部に突帯を有し、内面に一部ハケメが残る。4は丸みを帯びた口縁で口唇下にナデを施し窪む。5は張り出した上げ底の黒色磨研土器である。内外面にミガキを施し、内外面とも黒色化している。6・7は壺であり、6の内面はハケ後ミガキを施している。8は投弾で、一部ミガキが施される。

9~12はS I 500出土の弥生土器である。9~11は断面三角形の口縁を有する甕である。口縁端部に刻目を施す。12は壺の口縁で内外面にミガキを施す。

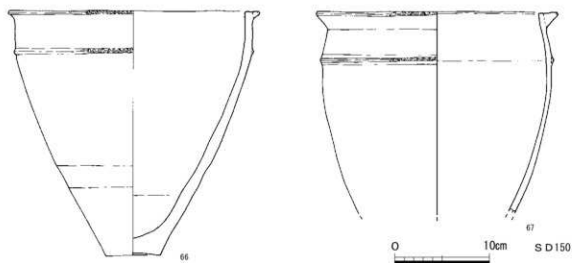
13~36はS D149出土の弥生土器、土製品である。13~27は甕で、13・14は如意形口縁で、口縁から頸部にかけて内面にハケメが残る。14は胴部に沈線を施す。15~18は断面三角形の口縁であり、15・16・18は胴部に低い突帯を有する。15は口縁端部が下がる。17は口唇部が内側へ発達し、口縁端部が下がり、胴部が膨らむと予想される。19は口縁が内側に突出し、口縁上面にハケメが残る。外面口縁下に強いオサエを施し、胴部に1条の沈線を施す。20は底部が張り出し、わずかに底が上がる。底面は白色化し、ミガキ状の光沢がみられる。21は底部がわずかに膨らみ気味で、内面がナデ、オサエによって凹凸が著しく蓋の可能性もあるが、胴部の膨らみ具合から甕とした。22・23は底部が張り出し、上げ底である。22は外面底部付近にミガキを施す。24は平底で外面にミガキを施しにぶい褐色を呈し、胴部が直線的に立ち上がる。25・26はわずかに底が上がり、26は底部に多量の礫が付着する。27は小型の甕で、断面三角形の口縁を有する。胴部下半は器表面の剥離が著しく、底部は張り出し、上げ底である。28~31は壺で、28は内面にミガキを施すが不明瞭である。29は



第34图 S 1 220・500、S D 149出土遺物実測図(1/4)



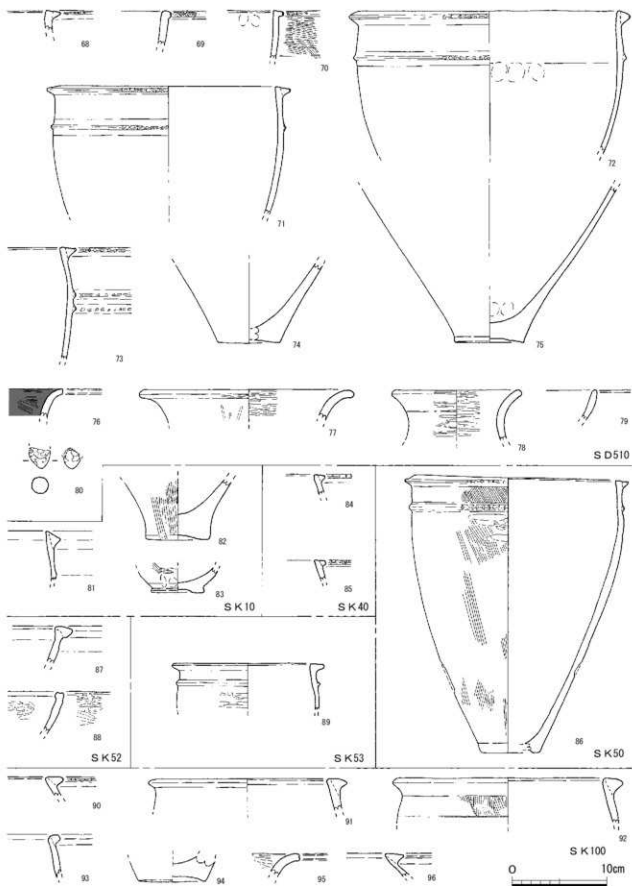
第35图 S D150出土遺物実測図① (1/2, 1/4)



第36図 SD150出土遺物実測図② (1/4)

内外面を丁寧にナデ、褐灰色を呈し、頸部に沈線を施す。30は単位が不明瞭であるが外面にミガキを施し、胴部の立ち上がり急である。31は内外面とも摩耗が著しく調整が不明瞭である。32は蓋で、内外面にミガキを施す。33は高杯の鋤先口縁で口縁上面と内面に丹塗りを施す。34は立ち上がりが急なため高杯の脚部としたが、破片であるが底径が大きくなるのが想定されることから蓋の可能性もある。35・36は器台で、35は底面にミガキ状の光沢が一部みられる。

37～67はSD150出土の縄文土器、弥生土器である。37は縄文土器で、外面に3条の凹線文が施される。胎土に滑石細片が混ざった曾畑式土器で、内外面が平滑になっている。曾畑式土器は久留米市西部では初出土である。38～52・66・67は甕で、胴部はあまり張らない。38・39は如意形口縁で口縁端部に刻目を施す。38は頸部外面にオサエが残る。39は胴部に刻目を有した1条の突帯を有し、突帯から上位はわずかに内傾する。40～51・66・67は断面三角形の口縁を有し、40～45・47・66・67は胴部に刻目を施した突帯を1条有する。66は外面胴部下部の摩耗が著しい。67は口縁の突帯が厚く、口縁端部、胴部の突帯の刻目を斜め方向に施す。46は口縁の突帯が厚く、浅い刻目を施す。48～50は断面三角形の口縁を有し、49は外面口縁部下のナデ調整が不十分で、粘土の塊が薄く残る。50は胴部に1条の沈線を施し、内面口唇下がナデによって凹む。51は胴が広がらず鉢の可能性もある。52はほぼ直線的に胴部がたちあがり、外面に一部不明瞭なミガキが残る。外面の底面付近は被熱により赤色化している。53～62・65は壺である。53は小型壺の口縁で、頸部に沈線を有し、内外面にミガキを施し、灰褐色を呈する。54は内傾する口縁で、内面口縁下に1条、外面頸部に2条の沈線を有する。55は内外面にミガキを施すが、内面のミガキ痕跡は不明瞭である。56は口縁が厚く、内面口唇下がナデ調整によって面取り状になっている。57はわずかに内傾しながら立ち上がり、口縁は外反する。内面が被熱により赤色化し、一部器表面が剥離している。58は内外面にミガキを施すが、内面のミガキは不明瞭である。頸部に2条の沈線を施す。59は厚底でわずかに上げ底である。内面は底部にミガキが残る。60は底面にもミガキを施す。61・62は黒色磨研土器であり、底面にも



第37図 SD510・SK10・40・50・52・53・100出土遺物実測図(1/4)

ミガキを施す。62は外面のみ黒褐色を呈する。65は彩文土器片で、赤色顔料で線を描いている。63・64は蓋で、63は外面にミガキがわずかに残る。64は内外面にミガキを施し、壺の口縁の可能性もあるが、外面がわずかに膨らむため蓋とした。

68～80はS D510出土の弥生土器、土製品である。68～75は甕で口縁に刻目を有する。68、70は断面三角形の口縁で、70は胴部外面をハケメ調整し、沈線を施す。69は薄い突帯を貼り付けた口縁で、刻目の幅が広い。71、72は胴部に1条の突帯、73は2条の突帯を有し、ともに刻目を施す。72の口縁は厚く、口縁端部の刻目は浅い。74は胴部がほぼ直線的に広がり、外面底部付近や底面にわずかにミガキの痕跡が残る。75は投棄後に貝などが外面器表面に付着しているため、調整は確認しづらいがナデ、工具ナデを施す。76～78は壺である。76は黒色磨研土器で、76は頸部から口縁部にかけての破片であるため詳細は不明であるが、内面は口縁部から頸部にかけて、外面は頸部より下部にミガキを施す。78は頸部に沈線を施した後、全面にミガキを施し、内外面が灰褐色を呈する。口縁端部にはわずかに赤色顔料が付着する。79は鉢の口縁である。80は投弾で、大きく破損している。

81～83はS K10出土の弥生土器である。81、82は甕で、81は断面三角形の口縁を有し、胴部に低い突帯を貼り付ける。82は底面が白みを帯び、硬質化している。83はナデやオサエで調整しており、形が歪で、底部は粘土の塊が張り出す。

84・85はS K40出土の弥生土器の甕で、断面三角形の口縁端部に刻目を施し、胴が張る。

86はS K50出土の甕である。被熱により内外面は赤みを帯び、胴部下位の剥離が著しい。内面に黒色、灰白色の焦げが広い範囲に広がる。内面口唇部付近は赤褐色を呈し、特に痕が残る。内面はナデ調整、外面は一部ミガキを施した後ハケメ調整を行う。断面三角形の口縁で口縁下に突帯を有し、口縁と突帯に刻目を施す。土器の被熱痕が著しいことや付着物から製塩を行ったと考えられる。

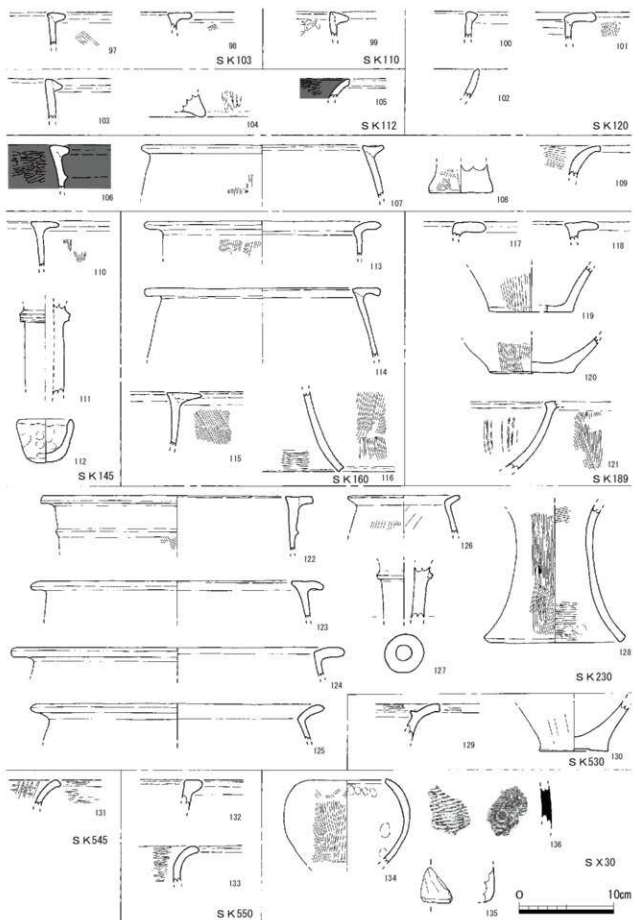
87、88はS K52出土の弥生土器の鉢である。87は丸みのある断面三角形の口縁で、内面口唇下にナデを施し窪む。胴部外面は剥離が著しく調整不明である。88は内外面にミガキを施し、内面が黒色化した黒色磨研土器である。口唇部に粘土帯を張りつけ内側に突出する。

89はS K53出土の弥生土器の甕である。逆L字状口縁で胴部に1条の突帯を有し、突帯より下にミガキを施す。

90～96はS K100出土の弥生土器である。90～94は甕で90～92は断面三角形の口縁である。90は口縁端部に刻目を施す。92は胴部に沈線を施す。93は丸みを帯びた口縁を有する。94は立ち上がり急であるため甕としたが、壺の可能性もある。外面に単位は不明瞭であるがミガキを施す。95、96は壺で95は内外面にミガキを施すが、外面は摩耗が著しく調整が不明瞭である。96は広口の壺である。断面三角形で口縁端部が一部ミガキ状になっている。

97、98はS K103出土の弥生土器の甕で、逆L字状口縁を有する。口唇部下をナデ調整を施し、口唇部が内側にわずかに突出する。

99はS K110出土の弥生土器の甕で、断面三角形の口縁を有する。



第38図 SK 103・110・112・115・120・145・160・189・230・530・545・550、S X 30出土物実測図(1/4)



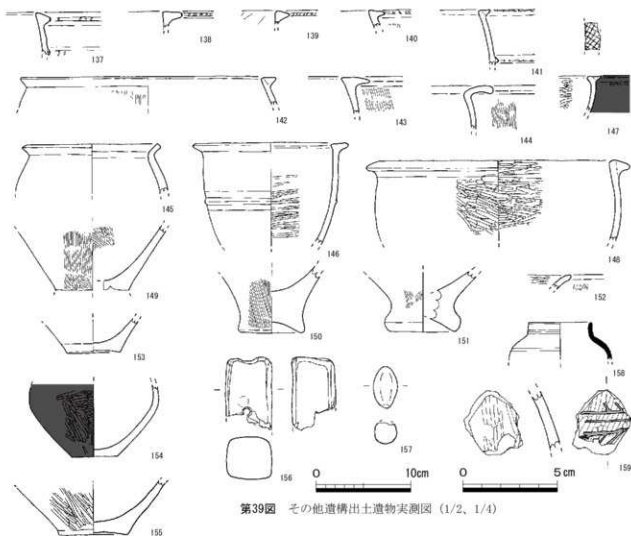
103～105はS K112出土の弥生土器である。103、104は甕で103は断面三角形を有する。104は上げ底の甕の底部と考えられる。外面にミガキを施す。105は壺で口縁部と内面にミガキを施し、内面が黒褐色を呈する黒色磨研土器である。

106～109はS K120出土の弥生土器である。106～108は甕で、106は黒色磨研土器である。丸みを帯びた口縁を有し、胴部に突帯を有する。内面上部と外面突帯下にミガキを施し黒色を呈する。107は逆L字状口縁で、内側にわずかに突出する。108は底部がわずかに張り出し、底面は白みを帯び、硬質化する。109は壺で内面にハケメ、外面にミガキを施す。

110～112はS K145出土の弥生土器である。110は断面逆L字状の口縁部で口縁が内側に突出する。111は高杯の脚部で断面M字状の突帯を有し、一部に丹塗り痕跡が残る。112はミニチュア土器の鉢である。

113～116はS K160出土の弥生土器である。113～115が断面逆L字状口縁で113は口縁部上面が内傾する。頸部内部のナデが不十分なためか段ができている。114は胴が張り、内外面に丹塗りを施す。115は口縁が内側に突出する。116は器台で内外面にハケメを施す。

117～121はS K189出土の弥生土器である。117～119は甕で、117、118は断面逆L字状口縁である。117の外面口縁部下に灰白色の物質が付着する。118は口縁が内側に突出する。119は内面も胴部が



第39図 その他遺構出土遺物実測図 (1/2, 1/4)

ほぼ直線的に立ち上がり、底面にミガキ状の調整を施す。120は胴部の立ち上がりが緩やかなため壺とした。外面にハケメを施す。121は鉢で、鋤先状口縁であると想定される。外面にハケメ、内面にナデ調整を施す。内面に放射状にハケを施す。122～128はS K 230出土弥生土器である。122～126は甕で、122、123は断面逆L字状の口縁を有する。122は胴部に1条の突帯を有し、123は口縁が大きく内側に突出する。124はややく字状に頸部が屈折する。125、126はく字状の口縁を有し、126は小型の甕である。127は高杯の頸部で、端部が少し下がる突帯を有する。一部に赤色顔料が残り、突帯から下は頸部の直径が狭くなる。128は器台で内外面にハケメを施す。

129～130はS K 530出土の弥生土器である。129は壺で、内面口縁部に突帯を有し、突帯より上位、外面にミガキを施す。130は甕の底部で、内外面に工具ナデ、ナデ調整を行う。

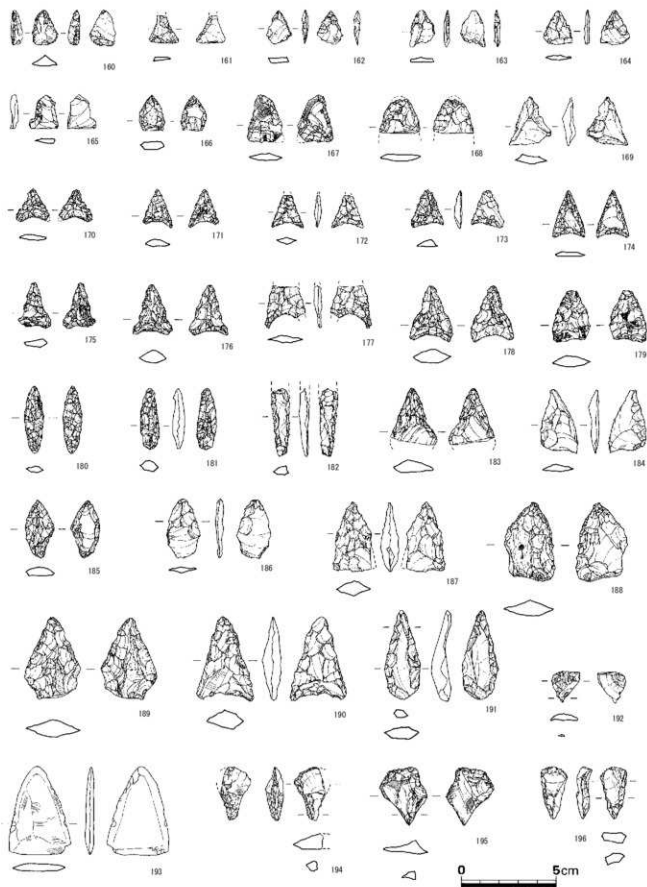
131はS K 545出土の壺であり、内外面に丁寧にミガキを施す。

132、133はS K 550出土の弥生土器である。132は丸みを帯びた口縁の甕で摩耗が著しく調整は不明瞭である。133は内外面にミガキを施すが、外面は摩耗が著しく調整は不明瞭である。

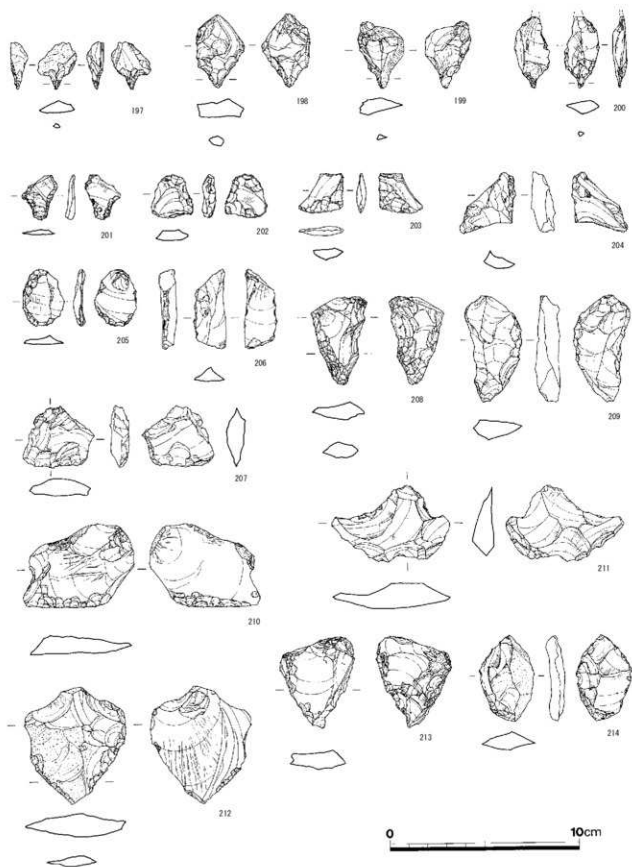
134～136はS X 30出土土器である。134は弥生土器の鉢で口縁が狭まり、橙色を呈し硬質である。135は支脚の破片であると考えられ、丁寧にナデ調整を行う。136は須恵器の甕の破片で、内面はハケメ後青海波のタタキ、外面は平行タタキが残る。

137～159は上記以外の遺構や検出面出土の弥生土器、土製品である。137～151は甕で、137～142は断面三角形の口縁である。137～141は口縁端部に刻目を施し、137、141は胴部に刻目を施した突帯を有する。143は逆L字状口縁でわずかに口縁が内側に突出する。144は口縁がややく字状を呈し、口縁端部がやや垂れる。145は口縁がく字状を呈し、胴が張る。146は逆L字状の口縁で、口唇部に粘土帯をのせ口縁は内側に少し突出する。内外面にミガキを施し、胎土が層状に剥離する。147は断面逆L字状口縁を呈し、口縁は内側に突出する。口縁上面はミガキ後格子状の沈線を施す。内外面にミガキを施し、外面は黒色を呈す黒色磨研土器である。148は丸みを帯びた口縁で、内外面にミガキを施し、被熱により外面が一部赤褐色を呈する。149は内外面にハケメを施し、底面に円形の溝状の窪みを有する。150、151は上げ底で、151は底部が張り出し、内外面にナデ調整を施し、黒色を呈する。152～155は壺である。152は内面にミガキを施し、黒色を呈する黒色磨研土器である。153は甕の可能性もある。外面は強い被熱により、大半が暗赤色を呈し器表面が剥離する。内面には灰白色のコゲが付着する。154は外面、底面にミガキを施し、黒色を呈する黒色磨研土器である。155は強い被熱によって内外面が赤みを帯びる。残存する胴部上位の内面には灰白色のコゲが付着する。156は支脚で全体をナデ調整し硬質であり、体部に穿孔を有する。上面には窪みを有し、窪み部は黒色を呈する。157は投擲で丁寧にナデを施し、滑らかに調整している。158は須恵器の壺で口縁は垂直に立ち上がり、肩部に沈線を施す。159は壺の胴部に赤色顔料で有軸羽状文を描く。

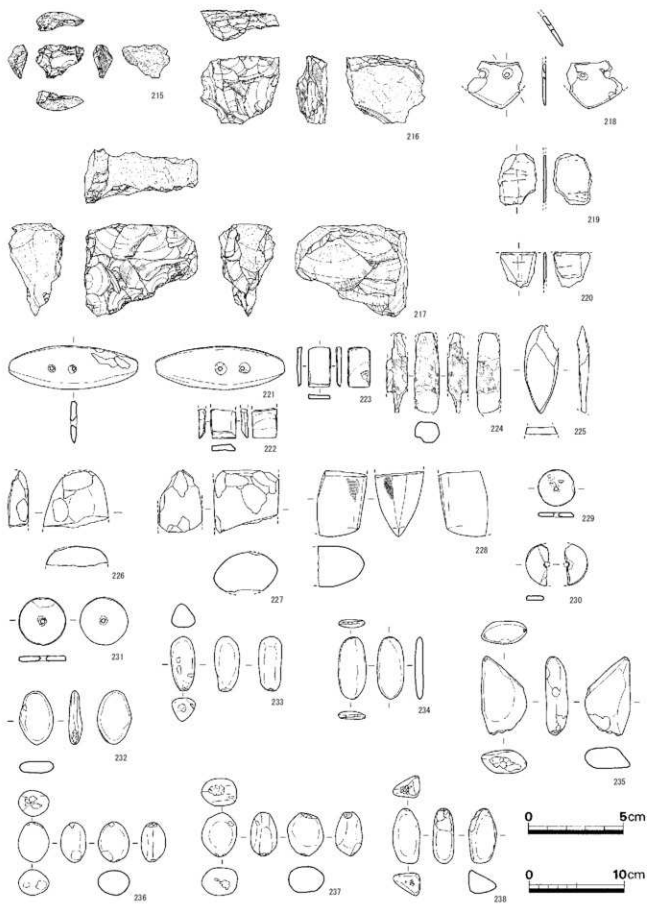
160～266は石製品である。160～191は打製石鏃で161、164～167、169、187、188は平基式、163、170～179、184、190は凹基式、162、180～182、185は尖基式、160、186、191は円基式である。162、163、165、169は未成品の可能性があり、178はわずかに肩が張る。193は平基式の安山岩製磨製石



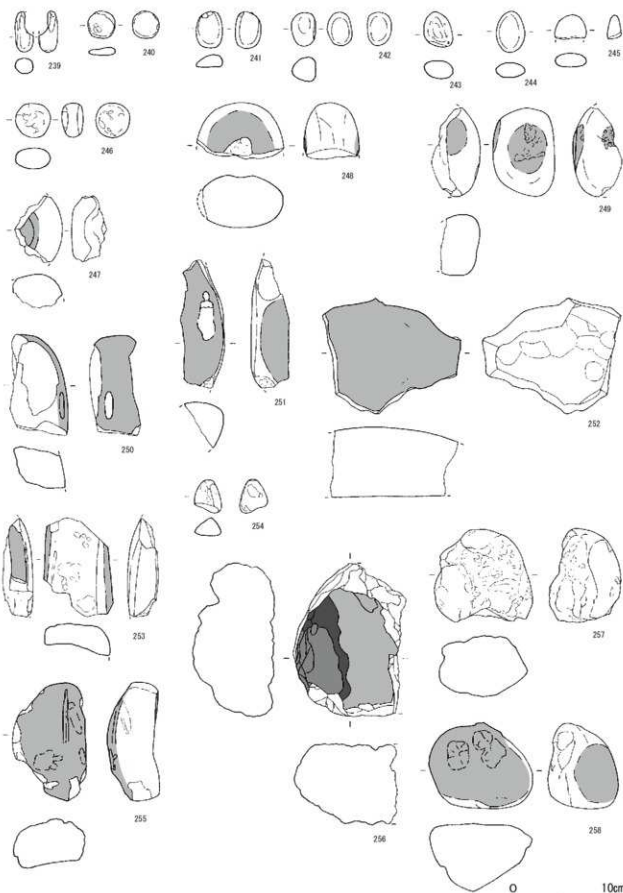
第40図 出土石製品実測図① (1/2)



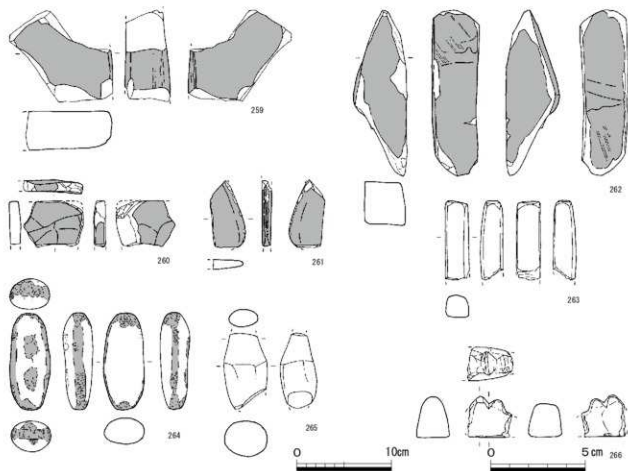
第41图 出土石製品実測図② (1/2)



第42図 出土石製品実測図③ (1/2、1/4)



第43図 出土石製品実測図④ (1/4)



第44図 出土石製品実測図⑤ (1/2, 1/4)

鎌である。192・194～200は石錐であり、196は石英製である。201～214はスクレイパーである。215～217は石核である。215、216は円盤状の残核である。217は自然面を打面とする。石鎌、石錐、スクレイパー、石核は196以外黒曜石製、安山岩製である。218～221は石庖丁である。218は背部が欠損し、摩耗が著しい。刃部平面形は三角形を呈し、刃部は鋭い。219、220は安山岩製の破片で、ともに厚さ3mmで両面に擦痕が残るため石庖丁である。221は輝緑凝灰岩製で、平面形は楕円形を呈する。刃部両端は鋭いが、中央部は刃こぼれや摩耗が著しい。222、223は泥岩製の扁平片刃石斧である。222は基部が欠損する。224は柱状片刃石斧で刃部、基部を欠損する。225～228は玄武岩製の太型蛤刃石斧である。229～231は紡錘車であり、それぞれ大きさが異なる。232～238、241は敲石である。232、234は扁平で敲打面以外は滑らかである。239、240、242～246は磨石である。表面が磨かれ平坦面を有する。247～249は凹石である。248は敲打面の周辺部と裏面を磨き滑らかになっている。249は少なくとも4面が敲打されている。250～253は台石で平坦面を有する。250は被熱によって表面が剝離し、一部赤色化する。252は底部を磨き、平滑になっている。254～258は軽石製品であり、用途は不明である。254は灰色を呈し平坦面を有する。255は上面に溝が掘られ、下面は窪ませている。256は平端面を有し、一部被熱し赤色化している。257、258は部分的に平坦面を作りだしている。259～261は砥石である。259は砂岩製で砥面も底面もほぼ平坦である。260は

第4表 出土遺物観察表①

遺物No.	調査号	出土遺物	種類	数量			位置			備考	発掘番号	
				口縁(個数)	底面(個数)	蓋面(個数)	外周	内周	背面			
1	第34期	31279	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000017
2	第34期	31279	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000018
3	第34期	31279	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000019
4	第34期	31279	布片	124	—	—	1	1	1	—	—	3417000020
5	第34期	31279	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000021
6	第34期	31279	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000022
7	第34期	31279	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000023
8	第34期	31279	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000024
9	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000025
10	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000026
11	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000027
12	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000028
13	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000029
14	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000030
15	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000031
16	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000032
17	第34期	31280	布片	124	—	—	1	1	1	—	—	3417000033
18	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000034
19	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000035
20	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000036
21	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000037
22	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000038
23	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000039
24	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000040
25	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000041
26	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000042
27	第34期	31280	布片	124	—	—	1	1	1	—	—	3417000043
28	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000044
29	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000045
30	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000046
31	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000047
32	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000048
33	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000049
34	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000050
35	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000051
36	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000052
37	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000053
38	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000054
39	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000055
40	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000056
41	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000057
42	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000058
43	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000059
44	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000060
45	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000061
46	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000062
47	第34期	31280	布片	124	—	—	1	1	1	—	—	3417000063
48	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000064
49	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000065
50	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000066
51	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000067
52	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000068
53	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000069
54	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000070
55	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000071
56	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000072
57	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000073
58	第34期	31280	布片	124	—	—	1	1	1	—	—	3417000074
59	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000075
60	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000076
61	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000077
62	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000078
63	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000079
64	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000080
65	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000081
66	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000082
67	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000083
68	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000084
69	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000085
70	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000086
71	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000087
72	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000088
73	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000089
74	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000090
75	第34期	31280	布片	—	—	1	1	1	1	—	—	3417000091



第5表 出土遺物観察表②

調査No.	調査日	出土遺物	種別	数量	長さ		幅		重量	備考	調査番号
					計長	実長	内長	内幅			
76	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-1
77	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	113.50	—	—	—	—	—	30108-0001-2
78	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	113.20	—	—	—	—	—	30108-0001-3
79	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-4
80	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	123.50	123.50	—	—	—	—	30108-0001-5
81	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-6
82	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-7
83	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-8
84	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-9
85	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-10
86	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	126.20	126.20	—	—	—	—	30108-0001-11
87	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-12
88	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	106.14	—	—	—	—	—	30108-0001-13
89	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-14
90	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	102.40	—	—	—	—	—	30108-0001-15
91	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	104.40	—	—	—	—	—	30108-0001-16
92	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-17
93	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-18
94	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-19
95	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-20
96	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-21
97	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-22
98	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-23
99	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-24
100	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-25
101	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-26
102	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-27
103	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-28
104	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-29
105	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-30
106	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	105.10	—	—	—	—	—	30108-0001-31
107	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-32
108	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-33
109	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-34
110	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-35
111	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-36
112	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-37
113	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	105.10	—	—	—	—	—	30108-0001-38
114	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-39
115	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-40
116	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-41
117	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-42
118	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-43
119	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	106.20	106.20	—	—	—	—	30108-0001-44
120	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-45
121	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-46
122	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	106.14	—	—	—	—	—	30108-0001-47
123	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	102.40	—	—	—	—	—	30108-0001-48
124	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-49
125	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	102.40	—	—	—	—	—	30108-0001-50
126	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	104.40	—	—	—	—	—	30108-0001-51
127	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	106.30	—	—	—	—	—	30108-0001-52
128	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	114.90	114.90	—	—	—	—	30108-0001-53
129	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-54
130	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-55
131	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-56
132	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-57
133	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-58
134	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-59
135	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-60
136	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-61
137	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-62
138	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-63
139	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-64
140	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-65
141	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-66
142	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	107.40	—	—	—	—	—	30108-0001-67
143	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-68
144	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-69
145	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-70
146	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	106.40	—	—	—	—	—	30108-0001-71
147	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-72
148	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	106.30	—	—	—	—	—	30108-0001-73
149	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-74
150	2010.03.28	30108	赤土系土器	壺	—	—	—	—	—	—	30108-0001-75



第7表 出土遺物観察表④

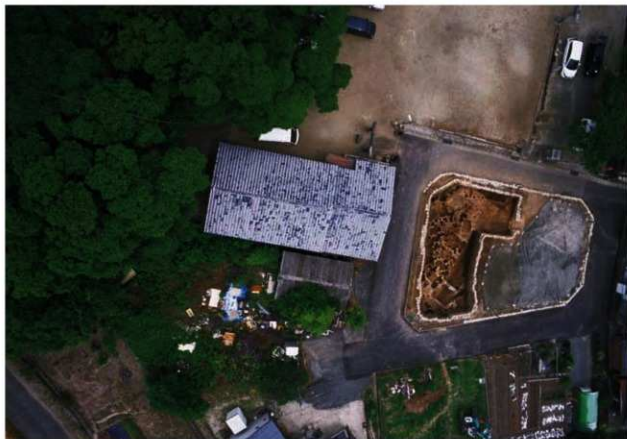
遺物No.	測号	以上遺構	種類	形状	寸法				位置				備考	発掘番号	
					口径(長さ)	径(厚さ)	底径(厚さ)	外径	内径	高さ	内高				
220	第43測	12010	石製	磨石	6.5	6.9	5.5	磨石							201704000299
221	第43測	12009	石製	磨石	10.5	8.5	10.0	磨石							201704000307
222	第43測	12012	石製	磨石	10.50	10.50	10.50	磨石							201704000306
223	第43測	12125	石製	磨石	5.9	15.5	6.0	磨石							201704000310
224	第43測	12010	石製	磨石	14.50	12.45	9.5	磨石							201704000305
225	第43測	12010	石製	磨石	5.9	5.8	5.5	磨石							201704000317
227	第43測	12110	石製	磨石	5.7	5.8	5.2	磨石							201704000317
232	第43測	12110	石製	磨石	5.8	5.5	5.5	磨石							201704000315
234	第43測	12010	石製	磨石	6.5	5.9	5.9	磨石							201704000348
235	第43測	12010	石製	磨石	15.30	6.8	5.2	磨石							201704000351
236	第43測	12010	石製	磨石	6.5	5.5	5.7	磨石							201704000313
237	第43測	12010	石製	磨石	14.80	5.8	5.7	磨石							201704000352
238	第43測	12010	石製	磨石	15.40	5.8	5.4	磨石							201704000353
239	第43測	1230	石製	磨石	6.5	5.9	5.6	磨石							201704000312
240	第43測	12110	石製	磨石	5.9	5.9	5.9	磨石							201704000300
241	第43測	12010	石製	磨石	15.50	5.9	5.4	磨石							201704000300
242	第43測	12010	石製	磨石	5.8	5.9	5.6	磨石							201704000377
243	第43測	12010	石製	磨石	5.8	5.5	5.9	磨石							201704000394
244	第43測	12010	石製	磨石	6.4	5.4	5.6	磨石							201704000393
247	第43測	12010	石製	磨石	15.20	5.9	5.4	磨石							201704000391
248	第43測	12010	石製	磨石	5.7	5.5	5.5	磨石							201704000376
249	第43測	12009	石製	磨石	17.20	10.1	10.70	磨石							201704000371
249	第43測	12010	石製	磨石	10.10	10.40	10.50	磨石							201704000371
249	第43測	12010	石製	磨石	10.40	5.5	10.50	磨石							201704000308
250	第43測	12010	石製	磨石	110.15	10.25	12.92	磨石							201704000309
251	第43測	12010	石製	磨石	12.50	14.40	14.80	磨石							201704000384
252	第43測	12009	石製	磨石	23.4	12.5	5.8	磨石							201704000367
253	第43測	12010	石製	磨石	118.40	17.40	12.80	磨石							201704000383
254	第43測	12010	石製	磨石	5.5	5.9	5.9	磨石							201704000378
255	第43測	12010	石製	磨石	12.4	5.8	6.5	磨石							201704000374
256	第43測	12010	石製	磨石	104.20	11.0	10.45	磨石							201704000382
257	第43測	12027	石製	磨石	10.5	8.8	5.5	磨石							201704000355
258	第43測	12021	石製	磨石	11.1	8.8	5.2	磨石							201704000372
259	第43測	12010	石製	磨石	118.90	15.20	14.20	磨石							201704000322
260	第43測	12220	石製	磨石	14.90	10.20	11.20	磨石							201704000323
261	第43測	12010	石製	磨石	17.15	12.80	11.80	磨石							201704000378
262	第43測	12110	石製	磨石	15.60	5.7	5.50	磨石							201704000394
263	第43測	12110	石製	磨石	10.20	5.5	5.5	磨石							201704000396
264	第43測	12025	石製	磨石	10.2	6.2	5.9	磨石							201704000397
265	第43測	12010	石製	磨石	10.80	6.7	5.9	磨石							201704000394
266	第43測	12027	石製	磨石	12.45	12.80	5.2	磨石							201704000395

砂岩製で側面も使用している。261は白色の凝灰岩製で、6面の紙面を有する。262～266は用途不明石製品である。262は玄武岩製で全面を磨き、縁部が細かく欠ける。263は片岩製で4面の平坦面を作りだす。264は全面を磨き、上下と表面に敲打痕を有し、側面には擦痕が強く残る。265は砂岩製で全面を磨いて成形し、中央から上部が狭まる。266は白色の凝灰岩製で、両端が欠損しており、高まりが2カ所残る。上面は狭まり、底面は平坦に加工している。

#### 4. 小 結

本調査では、狭い調査範囲ながら多くの遺構、遺物を検出した。特に調査区北部、S D150の北側は遺構が密集している。狭い調査範囲であるため溝の走行方向の詳細は不明であるが、北東を中心に緩やかに曲がっているため、弥生時代前期末から中期初頭の集落の中心が北東方向にあった可能性がある。埋土に貝殻を含んだ遺構が多いためか、動物骨などが多く出土し、S X 4・30ではまとまった状態で検出している。今回は紙面の都合上報告できないが、動物遺存体については来年度以降に改めて報告する。

(小川原)



第45図 北区全景と塚崎御廟塚（北上空から）



第46図 北区全景（北東上空から）



第47図 北区東部完掘状況（東から）



第48図 北区西部完掘状況（西から）



第49図 南区全景（東上空から）



第50図 S I 220完掘状況（南東から）



第51図 S I 500完掘状況（北東から）



第52図 S D 149・150土層（南東から）



第53図 S P 150土層（北西から）



第54図 S1220、SD150土層（北西から）



第55図 SD150東部掘削状況（南東から）



第56図 SD150西部掘削状況（北西から）



第57図 SD150貝検出状況（北西から）



第58図 SD150貝検出状況（北西から）



第59図 SD150遺物出土状況（北から）



第60図 SD510土層（北から）



第61図 SD510完掘状況（北から）



第62図 SK10完掘状況(西から)



第63図 SK40土層(南から)



第64図 SX4動物骨検出状況①(南から)



第65図 SX4馬骨検出状況②(東から)



第66図 SX30馬骨検出状況①(東から)



第67図 SX30馬骨検出状況②(西から)

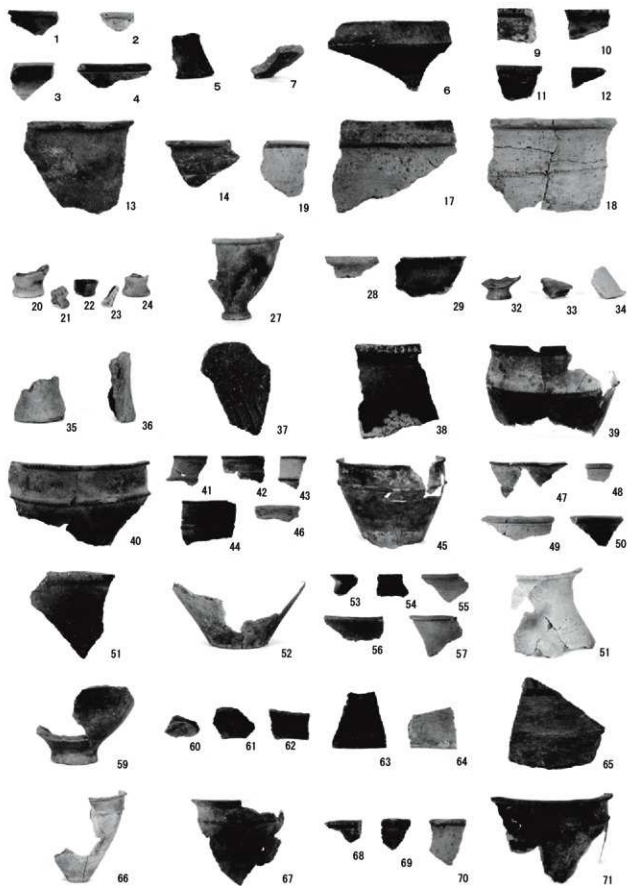


第68図 調査区東壁噴砂検出状況(西から)

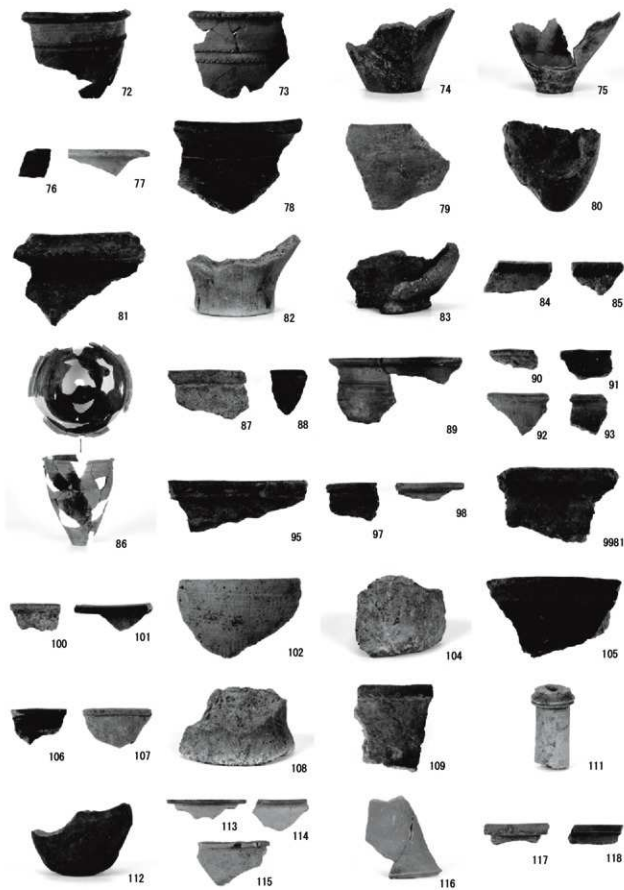


第69図 調査区南部噴砂検出状況(西から)

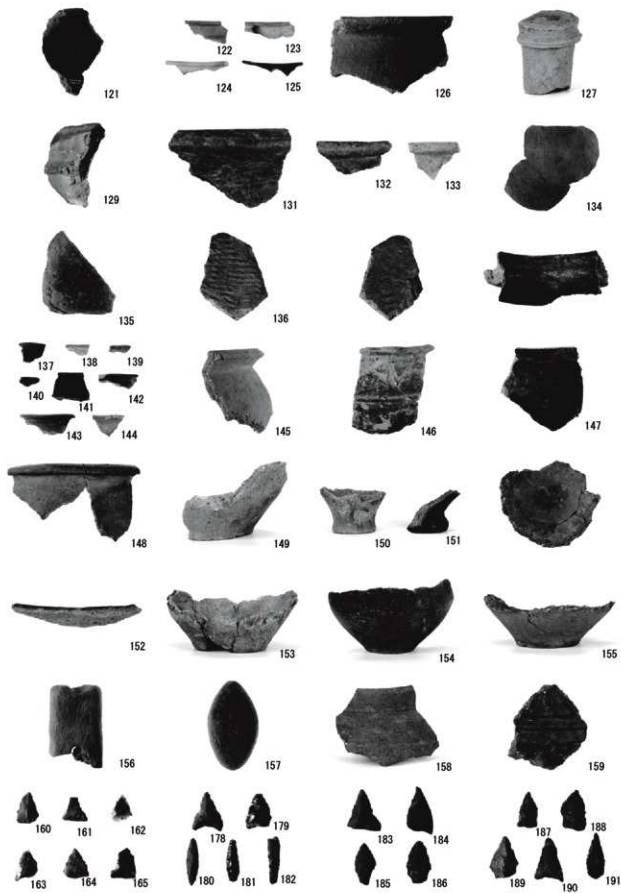




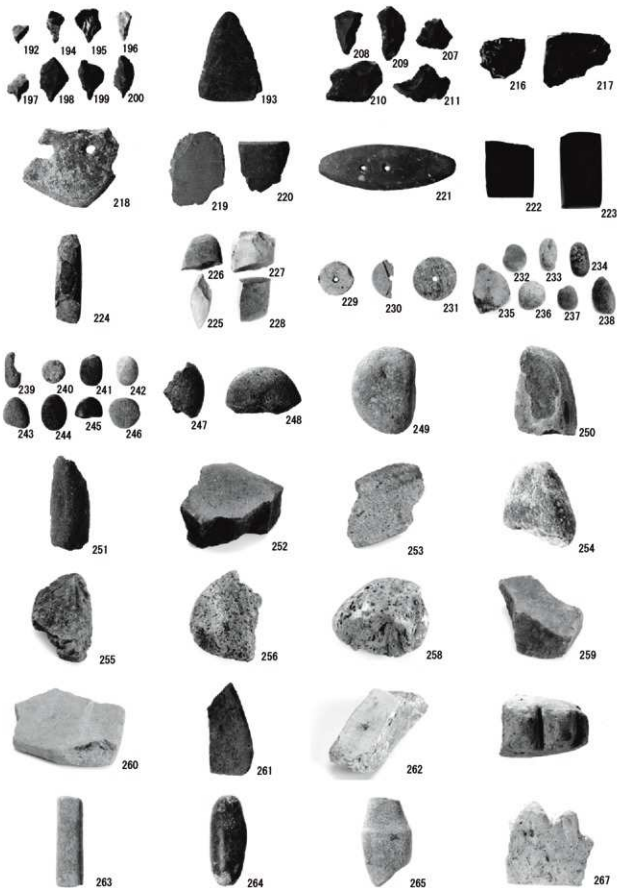
第70图 出土遺物写真①



第71図 出土遺物写真②



第72図 出土遺物写真③



第73図 出土遺物写真④

## V. 第8次調査

### 1. 調査に至る経緯

平成29年7月25日、土地所有者より久留米市三潞町高三潞72-1における「埋蔵文化財包蔵の無い」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、高三潞遺跡第6次調査の西50m、第7次調査の南東100mに位置する。西隣に位置する塚崎東畑遺跡では甕棺墓や竪穴建物跡が検出されており、本調査地でも同様の状況であることが想定された。今回の開発では遺跡への影響が低く、保存調整を図ったが、遺跡の内容を鑑み一部確認調査を実施することで所有者と協議を行い、8月16日にその旨を回答した。9月26日、土地所有者から発掘調査の依頼が提出され確認調査を実施する運びとなった。現地での発掘調査は、平成29年10月10日から開始し、12月15日に完了した。対象面積は220㎡で、調査面積は158㎡である。

### 2. 調査の記録

#### (1) 調査の経過

今回の発掘調査は、高三潞遺跡における遺構の位置・範囲確認を主な目的として実施した。なお、排土置き場を確保するため、調査区は道路部分の北区と遺跡が破壊される南区の2箇所を設定した。平成29年10月10日に器材を搬入し、重機による表土剥ぎを行った。南区から作業を行い、遺構の検出や遺構掘削、個別遺構の実測、測量、写真撮影を順次実施した。11月28日に調査区の清掃を行い、気球により全景写真を撮影した。その後、遺物の取り上げや、残りの個別遺構の実測や測量、写真撮影を行い、12月15日に埋め戻して、器材の撤収を行い、現地での発掘調査を終了した。

#### (2) 基本層序

北区では0.2～0.5mの暗灰色砂質土の表土が堆積し、東部では攪乱による削平が著しい。南区では0.2～0.6mの暗灰色砂質土、0.2mの暗褐色粘質土、0.2mの暗灰色粘質土が堆積する。削平を受けているが、南区の検出面は低く、弥生時代も北から南に標高が下がっていたと考えられる。

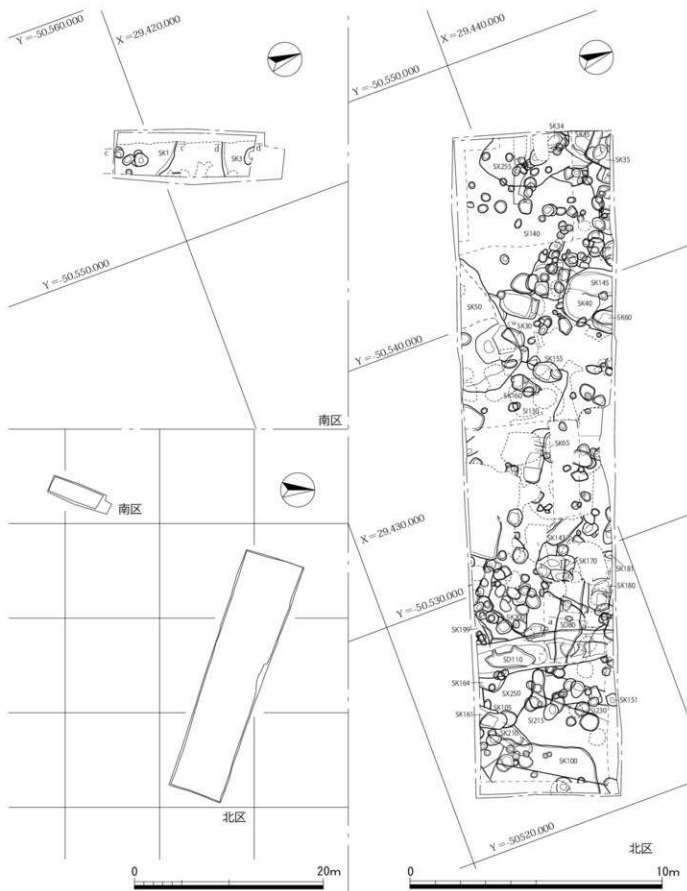
#### (3) 遺構の概要

遺構は、竪穴建物4棟、溝2条、土坑26基、不明遺構2基、その他ピットを検出した。以下、各遺構について述べる。なお、確認調査のため一部の遺構は上面確認に留めている。

#### 竪穴建物

##### S I 130 (第74図)

北区中央部で検出した。1段掘削したのみで完掘はしていない。東側は攪乱によって削平され、南側は調査区外へ延びるが、平面形は方形を呈すると考えられる。他遺構の掘削後確認された断面



第74図 遺構配置図 (1/150)

から、底面が平坦であることが確認されたため堅穴建物とした。長軸3.9m以上、短軸2.7m以上を測る。弥生時代中期初頭以前に属する。

#### S I 140 (第74・108図)

北区西部で検出した。複数の遺構が重複しているが、平面形は円形を呈すると考えられる。直径5.4m以上、西部の深さ0.2mを測り、S K 50に先出する。弥生時代中期中葉以前に属する。

#### S I 215 (第74・109図)

北区東部で検出した。北側は調査区外へ延びるが、平面形は方形を呈する。長軸4.5m以上、短軸3.9m以上、深さ0.15mを測る。底面は平坦である。弥生土器や石器、土製品が出土している。弥生時代中期前葉に属する。

#### S I 230 (第74・110図)

北区東部で検出した。他遺構に重複しているため平面形は不明であるが、床面が平坦面であること、平面形の辺が直線的であるため堅穴建物とした。長軸1.6m、短軸0.6m、深さ0.2mを測り、S I 215に先出する。弥生土器が出土している。弥生時代前期末から中期初頭に属する。

### 溝

#### S D 80 (第75・111・112図)

北区東部で検出した。長さ4.1m以上、上面幅1.1m、深さ0.3m、軸はN-61°-Wを測り、S D 110に後出する。底面はほぼ平坦である。弥生土器、土師器、土製品、須恵器が出土する。古墳時代以降に属する。

#### S D 110 (第75・113図)

北区東部で検出した。長さ5.4m、上面幅1.4m、深さ0.9m、軸はN-13°-Eを測る。南側が最も深く、北側に4つの段を有する。弥生土器、土師器、土製品、須恵器が出土する。古墳時代前期に属する。

### 土坑

#### S K 1 (第75・114図)

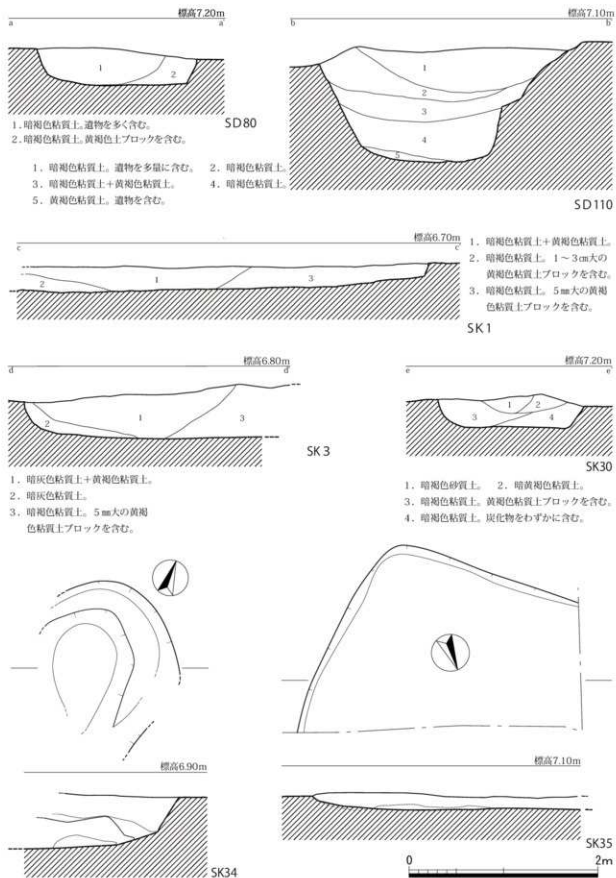
南区南部で検出した。平面形は円形に近いが、東部で外側に反れる。堅穴建物の可能性もあるが、平面形が歪であるため土坑とした。底面は平坦である。長軸2.2m以上、短軸1.5m以上、深さ0.3mを測る。弥生土器や石器、土製品が出土している。弥生時代前期末から中期初頭に属する。

#### S K 3 (第75・115図)

南区北部で検出した。確認できた範囲が狭いため、平面形が円形になるか方形になるか不明である。底面は平坦であり堅穴建物の可能性があるが、一部のみの検出であるため土坑とした。長軸2m以上、短軸1.8m以上、深さ0.3mを測る。弥生土器、貝殻が出土している。弥生時代中期前葉に属する。

#### S K 30 (第75図)

北区中央部で検出した。平面形は楕円形を呈する。長軸0.9m、短軸0.5m、深さ0.2mを測り、



第75図 SD80・110、SK1・3・30・土層図SK34・35遺構実測図(1/40)



S K 50に後出するように検出した。弥生土器が出土している。遺物は弥生時代中期初頭でS K 50の時期より古くなるため、遺構の前後関係が逆の可能性もある。

#### S K 34 (第75図)

北区西部で検出した。南部は攪乱により削平されているが、平面形は円形を呈すると考えられ、北部に段を有する。直径は1 m、深さ0.3mを測る。弥生土器が出土しており、弥生時代前期に属する。

#### S K 35 (第75図)

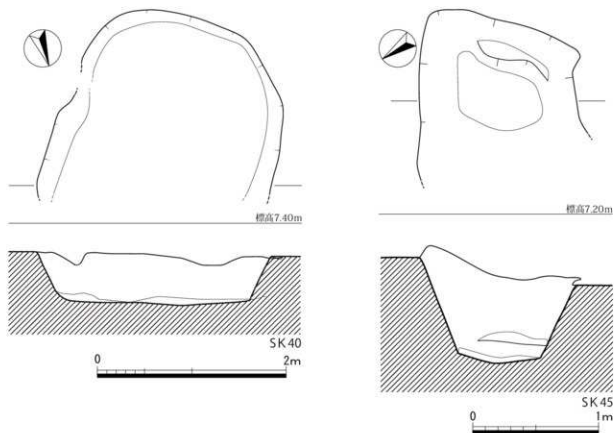
北区北西部に属する。大部分が調査区外へ延びるが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。長軸1.4m以上、短軸1.1m、深さ0.1mを測る。弥生土器や石器、土製品が出土しており、弥生時代中期前葉に属する。

#### S K 40 (第76・116図)

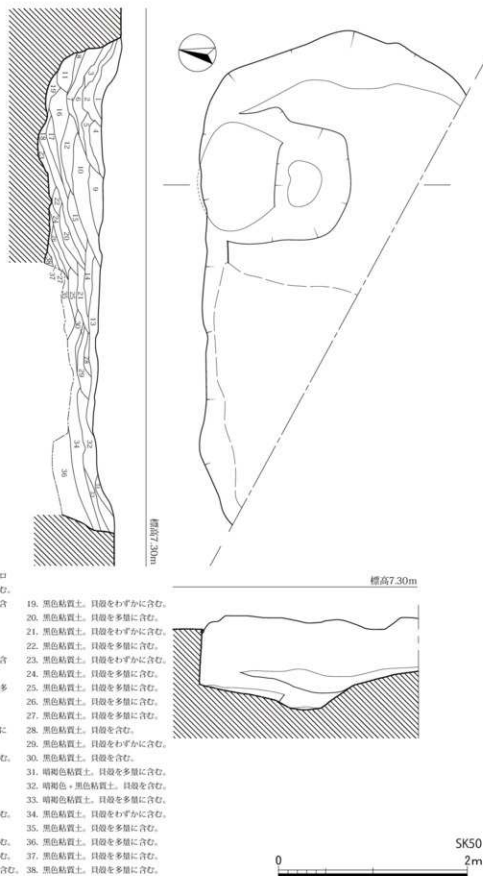
北区西部で検出した。北部が調査区外へ延びるが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。長軸2.4m以上、短軸2 m以上、深さ0.6mを測り、複数の遺構が重複している可能性もある。弥生土器や石器、土製品が出土しており、弥生時代中期前葉に属する。

#### S K 45 (第76・117図)

北区北西部で検出した。西部が調査区外へ延びるが、隅丸方形を呈すと考えられ、北部に段を有



第76図 S K 40・45実測図 (1/30, 1/40)



第77図 SK50実測図 (1/20)

する。長軸、短軸ともに1.3m以上、深さ0.9mを測る。弥生土器や石器、動物骨が出土しており、弥生時代中期前葉に属する。

**SK50** (第77・118～122図)

北区中央部で検出した。西半は完掘していない。南側が調査区外へ延びるが、隅丸方形を呈すと考えられ、中央部付近で1段下がる。北側の壁は抉るように掘削している。長軸5.1m以上、短軸2.8m以上、深さ1mを測り、S I 130に後出する。多量の貝殻が廃棄されており、それに伴い動物骨も多量に出土した。弥生時代前期から中期前葉に属する。

**SK55** (第78・123図)

北区中央部で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、北側に段を有する。長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.3mを測り、S I 140に後出する。弥生土器や石器、動物骨が出土しており、弥生時代前期末から中期初頭に属する。

**SK60** (第78図)

北区北西部で検出した。北部は調査区外へ延びるが、平面形は楕円形を呈すと考えられる。長軸0.8m以上、短軸0.7m以上、深さ0.1mを測り、SK40に先出する。弥生土器がまとまって出土しており、弥生時代中期前葉に属する。

**SK65** (第78・124図)

北区中央部で検出した。北部は削平を受けているが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。長軸1.2m以上、短軸0.4m以上、深さ0.3mを測る。弥生土器や貝殻が出土しており、弥生時代中期前葉に属する。

**SK100** (第78図)

北区東部で検出した。東部は調査区外へ延びるが、隅丸方形を呈すと考えられる。長軸は4.7m以上、短軸は2m以上、深さ0.15mを測る。埋土に多量の弥生土器の破片を含んでいた。弥生土器や石器が出土しており、弥生時代中期後葉から後期に属する。

**SK105** (第78・125図)

北区東部で検出した。平面形は楕円形を呈する。長軸1m、短軸0.7m、0.7mを測り、SK161・210、SX250に後出する。弥生土器や石器が出土しており、弥生時代中期前葉に属する。

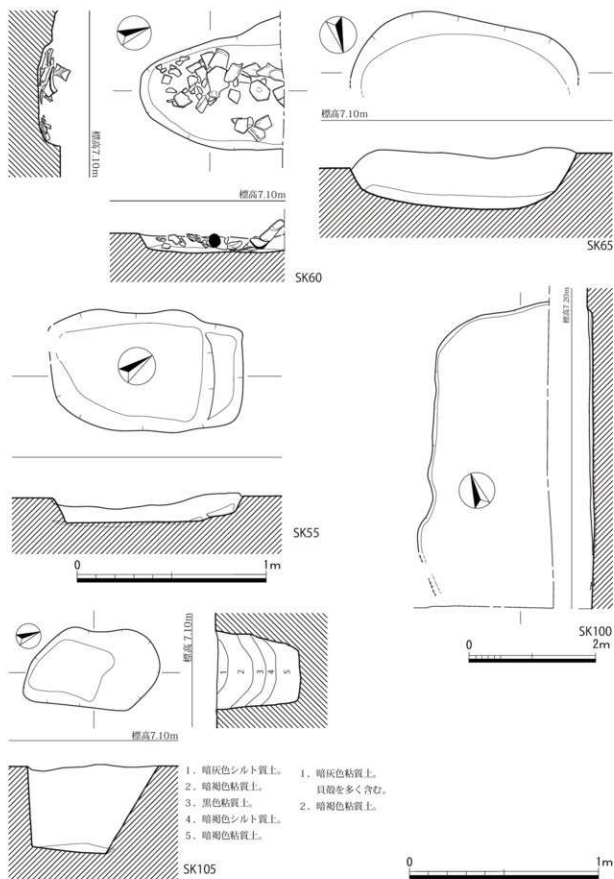
**SK143** (第79図)

北区中央部で検出した。平面形は楕円形を呈する。長軸1.7m、短軸0.7m、深さ0.3mを測る。弥生土器や動物骨が出土しており、弥生時代中期前葉に属する。

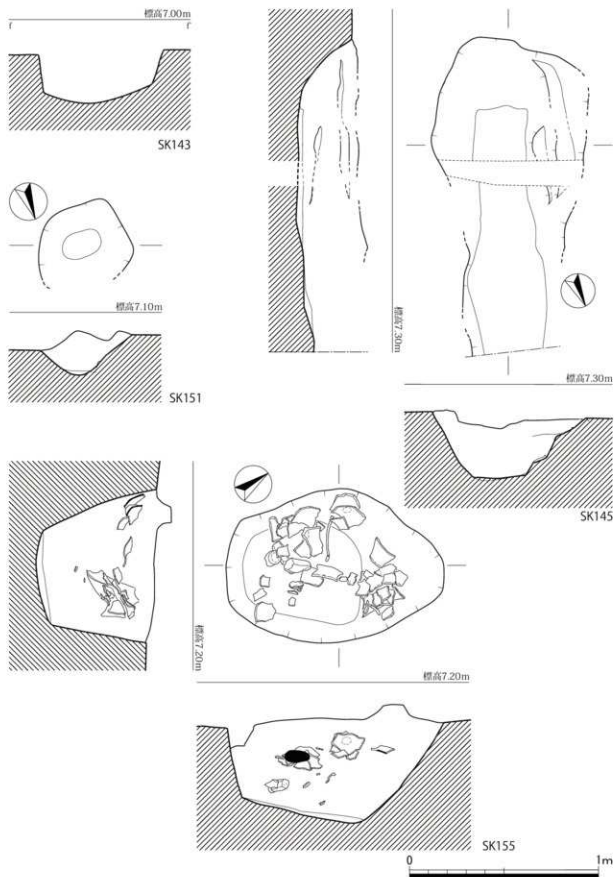
**SK145** (第79図)

北区西部で検出した。平面形は隅丸方形を呈し南西側に2つの段を有する。長軸3.2m以上、短軸1.6m、深さ0.8mを測り、S I 140に後出し、SK40に先出する。弥生土器や石器、土製品が出土しており、弥生時代前期末から中期初頭に属する。

**SK151** (第79図)



第78図 S K55・60・65・100・105・120実測図 (1/20, 1/30)



第79図 SK143・145・151・155実測図 (1/20)

北区東部で検出した。平面形は円形を呈する。直径0.5m、深さ0.2mを測る。弥生土器や土製品が出土しており、弥生時代中期前葉に属する。

**S K155** (第79・126図)

北区中央部で検出した。平面形は楕円形を呈する。長軸1.2m、短軸0.8m、深さ0.6mを測り、S I 130に後出する。多量の弥生土器や石器、土製品がまとめて出土しており、弥生時代中期初頭に属する。

**S K160** (第80・126図)

北区中央部で検出した。平面形は楕円形を呈し、北部と南部にそれぞれ2つの段を有する。長軸1.3m以上、短軸0.6m、深さ0.2mを測り、S I 130に後出する。多量の弥生土器や石器、土製品がまとめて出土しており、弥生時代前期末から中期初頭に属する。

**S K161** (第80図)

北区東部で検出した。S K105と大部分が重複しているため、平面形は不明である。長軸0.9m以上、短軸0.8m、深さ0.7mを測り、S X250に後出する。弥生土器や石器が出土しており、弥生時代中期に属する。

**S K164** (第80図)

北区東部で検出した。平面形は不明である。長軸1.1m以上、短軸0.5m以上、深さ0.5mを測り、S D110、先出しS X250に後出する。弥生土器や石器、土製品が出土しており、弥生時代中期前葉に属する。

**S K170** (第80・127図)

北区中央部で検出した。平面形は楕円形を呈し、断面形が重であることから複数遺構が重複している可能性がある。長軸1.5m、短軸1.2m、深さ0.5mを測り、S D80に後出する。多量の弥生土器や石器、土製品がまとめて出土しており、弥生時代前葉から中期中葉に属する。

**S K180** (第81図)

北区西部で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、西部に3つの段を有する。長軸1.6m、短軸0.9m、深さ0.6mを測る。弥生土器や石器、動物骨が出土しており、弥生時代中期前葉に属する。

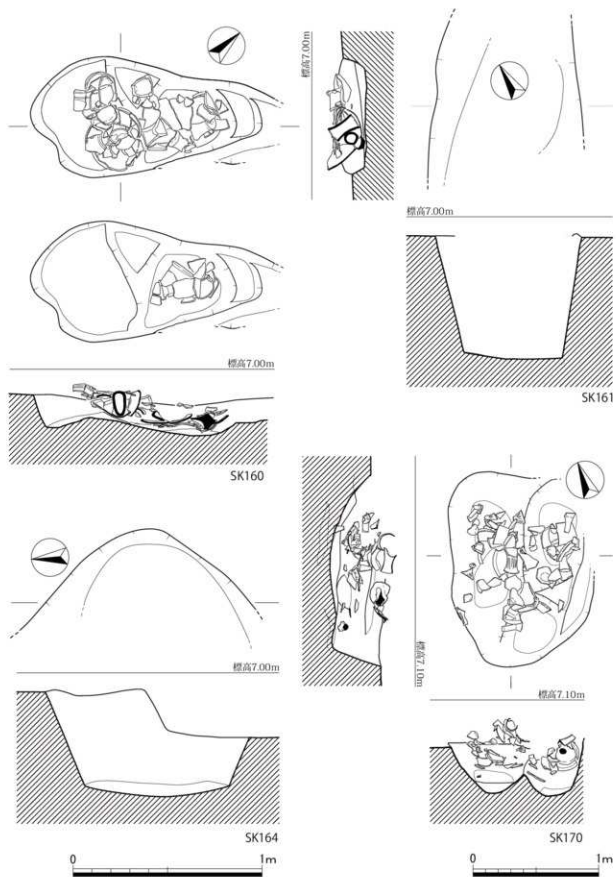
**S K181** (第81図)

北区中央部で検出した。大きく削平を受けているため平面形は不明である。長軸0.4m以上、短軸0.3m以上、深さ0.3mを測る。弥生土器や石器、動物骨が出土しており、弥生時代中期初頭から前葉に属する。

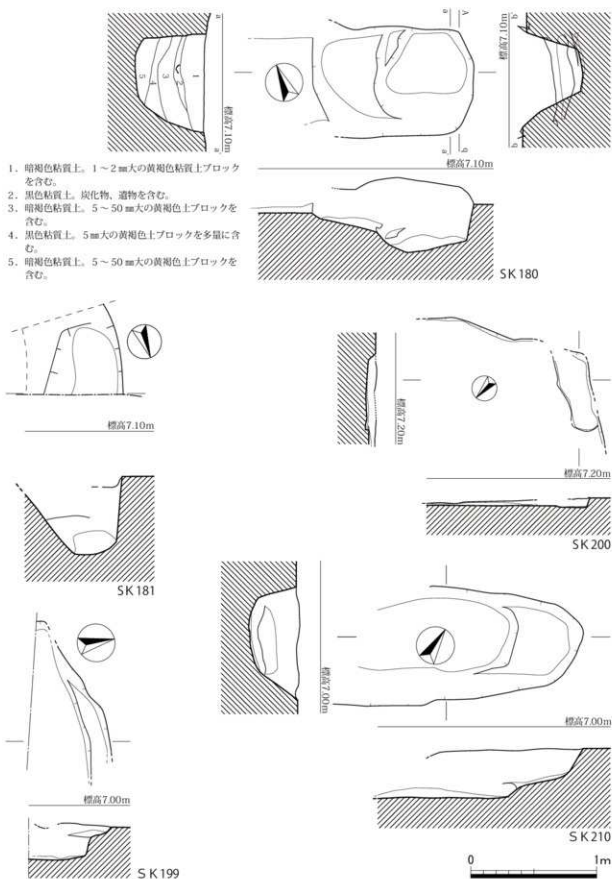
**S K199** (第81図)

北区東部で検出した。南側の大部分が調査区外に延びるため平面形は不明であり、北側に段を有する。長軸1.2m以上、短軸0.6m以上、深さ0.3m以上を測り、S D110に先出する。弥生土器や石器の破片が出土しており、弥生時代中期に属する。

**S K200** (第81図)



第80図 SK160・161・164・170実測図 (1/20, 1/30)



第81図 SK180・181・199・200・210実測図(1/30)



北区東部で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、南西部がわずかに1段下がるが底面はほぼ平坦である。長軸2.5m以上、短軸2m以上、深さ0.2mを測り、S D110に後出する。弥生土器や石器が出土しており、弥生時代中期初頭に属する。

#### S K210 (第81・128図)

北区東部で検出した。平面形は楕円形を呈し、東部に段を有する。長軸2m以上、短軸1m以上、深さ0.4mを測り、S K100に先出し、S I 215に後出する。弥生土器や石器、土製品、動物骨が出土しており、弥生時代中期前葉に属する。S K105・161と底面がほぼ平坦になるため同一遺構である可能性もある。

#### 不明遺構

#### S X250 (第74図)

北区東部で検出した。平面形は不明であるが北東から南西にかけての辺は直線的である。長軸は5.3m以上、短軸2.4m以上、深さは0.2mを測る。掘削はしておらず、複数の遺構が重複している可能性もある。

#### S X255 (第74・129図)

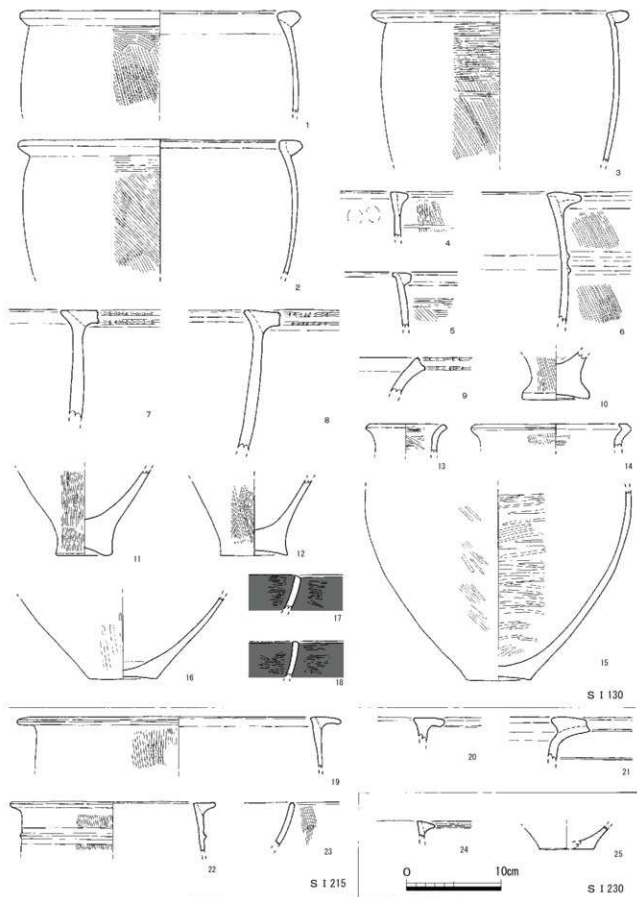
北区西部で検出した。平面形は楕円形を呈する。長軸4m以上、短軸2m以上、深さ0.15mを測り、S K34・45に先出する。埋土は橙色、黒色の焼土が大部分を占める。弥生時代前期以前に属する。

### (3) 遺物の概要 (第82～101・130～136図、第8～12表)

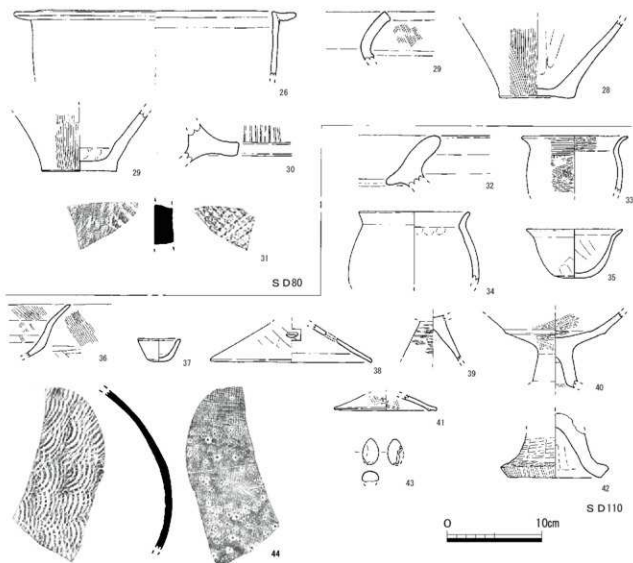
遺物の総量は、パンコンテナ47箱である。弥生土器が大半を占め、土師器、須恵器、石器、土製品、炭化物を含む。分量や色調などの詳細は、遺物観察表を参照願いたい。以下、各遺物の特徴について弥生土器、土師器、須恵器、土製品については遺構毎、石器については器種毎に簡単に補足する。

1～15はS I 130出土の弥生土器である。1～12は甕で、1～3は端部が丸みを帯び、肥厚した口縁を有する。4は口縁部が断面三角形を呈し、口縁から胴部にかけて緩やかに器壁が薄くなる。胴部に1条の沈線を有する。5は口縁部外面が断面台形を呈し、口唇は内面に張り出す。6は逆L字状の口縁をもち胴部に2条の突帯を有する。7～9は大型甕の口縁部である。7と8は口縁部外面が断面方形を呈し、口唇は内面に張り出す。口縁端部の上下に刻目を施し、同一個体の可能性がある。9は如意型口縁で、口縁端部上・下部に刻目を施す。10～12は甕の底部で、全て上げ底である。10は底部が張り出す。13～16は壺である。13は口縁部が外反し内外面ともミガキを施す。14は袋状の口縁を有し、上部は面取り状にナデを施す。15は急に立ち上がるため胴部の最大径は上部に位置すると推測される。17・18は両面にミガキを施した黒色磨研の鉢口縁部である。特に17は光沢を有する。

19～23はS I 215出土の弥生土器である。19～22は甕で19・20・22は逆L字状の口縁を呈す。22は胴部に1条の突帯を有する。21は外反する口縁上面に厚い粘土帯が平坦面を形成する大型甕の口



第82図 S I 130・215・230出土遺物実測図 (1/4)

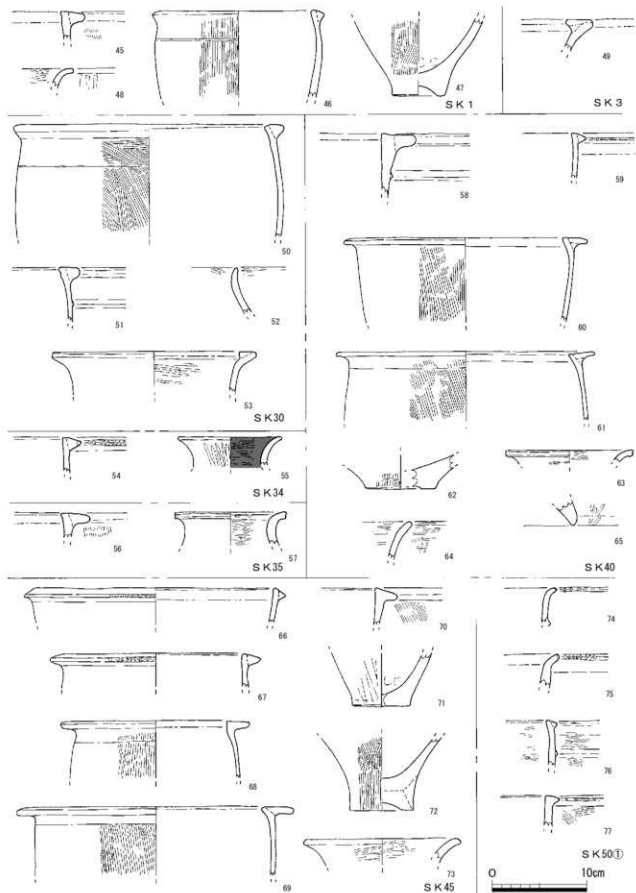


第83図 S D 80・110出土遺物実測図 (1/4)

縁部である。23は鉢の口縁部である。24・25はS I 220出土の弥生土器である。24は口縁が断面三角形で端部がやや下がる甕である。25は破片であるが胴部の立ち上がりが緩やかであることから小型壺の底部であると考えられる。

26～31はS D 80出土の弥生土器・須恵器である。26～29は甕で、26は口縁上面が窪む断面逆L字状の口縁を有し、内面の口唇下がナデによって窪む。外面は口縁部と胴部の境の凸凹をナデ消していない。27は大型の甕で口縁はく字状に外反し、口縁下部に突帯を有する。28・29は底部で、29はオサエによって器壁の厚さが不均一になっている。30は筒形器台である。内外面ともに丹塗りで、外面上部には暗文を施す。31は須恵器の甕の胴部である。

32～42は、S D 110出土の弥生土器・土師器・須恵器・土製品である。32は弥生土器の大型甕で口縁部は内側に突出し、内傾する。33・34は土師器の甕である。34は外面をハケメ調整した後にナデで調整している。35は土師器の鉢で、内面に線状の工具ナデ痕が残る。36・38～41は土師器の高杯である。36は胴部が2度屈曲し、口縁部はやや外反する。38・39・41は脚部で、38は穿孔が施され、



第84図 SK 1・3・30・34・35・40・45・50出土遺物実測図 (1/4)

内面では穿孔部周辺が剥落している。39は小型の高坏脚部で外面にミガキを施し、胎土は硬く明赤褐色を呈す。40は胴部が屈曲し、坏部は内外面ともミガキを施す。脚部も屈曲し底部は広がる。41は底部内面のナデ調整が不十分のため帯状に粘土が残る。37はミニチュアの鉢である。42は支脚で外面と底面にタタキを施す。43は投弾で、1部を欠き、摩耗している。44は須恵器の甕胴部で、外面に自然釉がかかる。

45～48はS K 1出土の弥生土器である。45～47は甕で、45は口縁が断面L字形を呈し、内面上部を強くナデを施しているため、端部はわずかに内側に張り出す。46は口縁が断面三角形を呈し、胴部外面はハケメ調整後に沈線を1条巡らす。沈線より上部はその後ナデを施す。47は上げ底の底部である。底部から急な角度で立ち上がったのち胴部が広がる。48は壺の口縁である。口縁は外反し、内外面にミガキを施しており、外面は縦方向のミガキが暗文状に等間隔にみられる。

49はS K 3出土の弥生土器である。鋤先口縁を有する壺で、口縁部に粘土帯を貼付し厚肥させる。口縁部上面に極暗赤褐色の付着物があり、丹塗りの可能性もある。

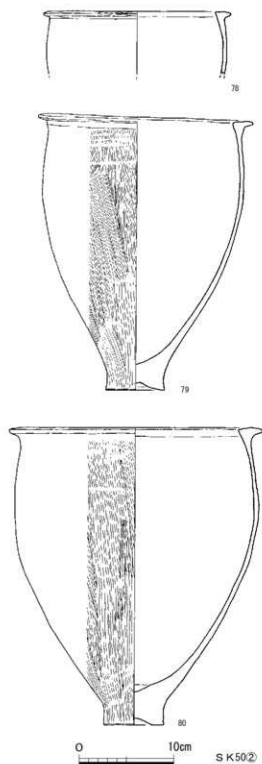
50～53はS K 30出土の弥生土器である。50・51は弥生土器の甕で、50は端部が丸みを帯び、肥厚した口縁を有し、胴部に1条の沈線を施す。51は口縁部外面が断面台形を呈し、口唇は内面に張り出す。胴部には低い突帯を有す。52・53は壺の口縁部である。52は口縁部がわずかに外反する。摩耗が著しく、外面下部は器表が剥落しており、調整不明である。53は鋤先口縁で、口縁部に粘土帯を貼付し厚肥させる。内面と口縁上面は横方向のミガキを施し、外面はナデ調整後不定方向にミガキを施している。

54・55はS K 34出土の弥生土器である。54は断面三角形を呈す口縁の甕で、口縁端部下に刻目を施し、口唇はわずかに内面に張り出す。55は外反する口縁の壺で、内面は横方向、外面は縦方向のミガキを施し、内面は黒色を呈する。

56・57はS K 35出土の弥生土器である。56は断面逆L字状の口縁を呈す甕で、口唇は内面に張り出す。57は外反する口縁の壺で、口縁端部は窪む。内面はミガキを施し、白みを帯びた色調である。

58～65はS K 40出土の弥生土器である。58～62は弥生土器の甕である58は断面逆L字状を呈す口縁の甕であり、胴部に1条の低い突帯を有す。口縁の器壁は厚く、口縁上面はわずかに窪む。59は断面三角形を呈す口縁の甕で、口縁端部に刻目を施し、口唇はわずかに内面に張り出す。60・61は逆L字状を呈す口縁の甕であり、60は口縁部端部がやや垂れ、61は口縁部が内傾し、端部は垂れる。62は底部外面にハケメ調整を施すことから甕としたが、胴部の立ち上がりが緩く、胴部が広がることから甕の可能性もある。底部は上げ底である。63・64は壺の口縁部である。63は内外面にわずかにミガキが残り、口縁が大きく外反し、端部がわずかに窪む。64は外面と内面上部が赤色化し、緩く外反する。65は破片であるため器種の断定はできないが支脚とした。外面にミガキを施しており、硬質で白みを帯びた色調である。

66～73はS K 45出土の弥生土器である。66～72は甕で、66・67は断面三角形の口縁を有し、端部は垂れ、刻目を施す。68～70はL字状口縁で、口縁上面は68・69がほぼ水平、70がやや垂れる。

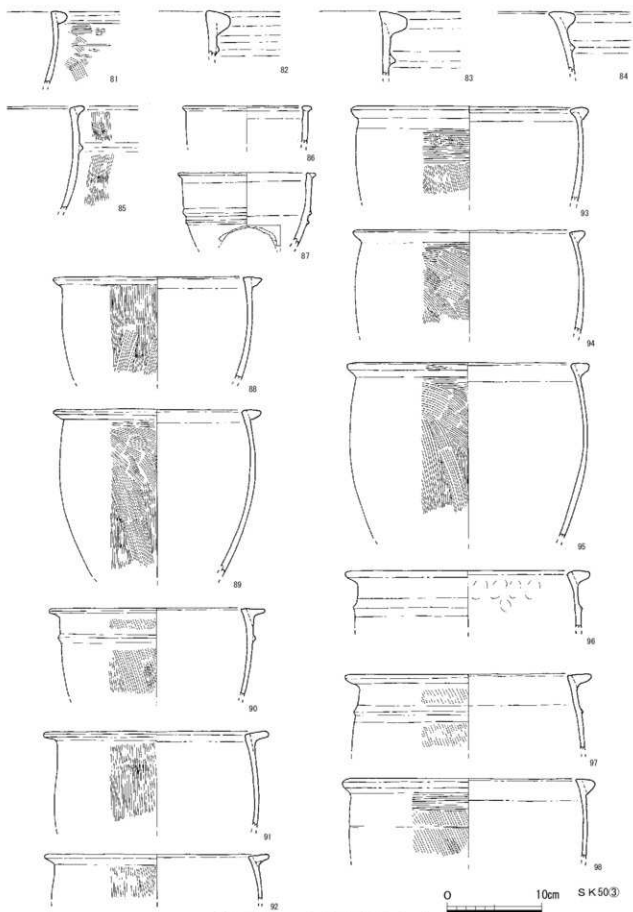


第85図 S K 50出土遺物実測図 (1/4)

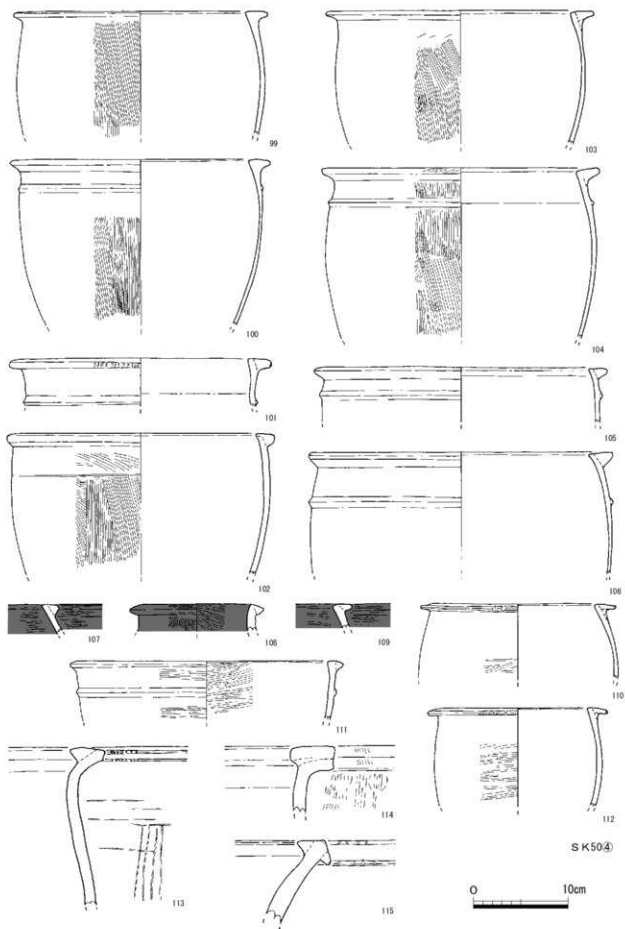
のナデが不十分なため凹凸が著しい。89は口縁が厚く丸みを帯び、口縁上部にもハケメを施す。90は胴が張り、外面の口縁部下が被熱により赤みを帯び、胴部に1条の突帯を有する。91・92は胴部が張り、わずかに内傾する。93・94・98は丸みを帯びた口縁端部を有し、内面口唇下がナデによ

68は内面の口唇下がナデによって凹み、69は口縁が内面に突出する。70の口縁端部は垂れる。71は外面に丁寧な工具ナデを施し器表面が滑らかで、色調は赤褐色を呈する。底面には一部ミガキを施す。煤が広い範囲に付着し、底部は内外面から穿孔されている。72は上げ底で底部にわずかにミガキが施される。73は内外面にミガキを施し、内面は特に白みを帯びる。

74~175はS K 50出土の弥生土器である。74~135は甕である。74・75は如意形口縁の甕で、74は口縁端部全面に刻目を施し、胴部にわずかに突帯を有す。75は器壁が厚く、口縁下部に刻目を施す。76・77は断面三角形の口縁で、76は胴部に突帯を有す。内外面にミガキを施し、外面は突帯から下が黒色化している。77は口縁端部に刻目を施す。78~80は逆L字状の口縁で、78は内外面とも器表面の大部分が剥落しているが、わずかにミガキが両面に残る。特に口縁上面は丁寧にミガキが施され、赤色化している。79はわずかに胴が張る。底部はわずかに上げ底で灰白色を呈する。モミ圧痕が確認される。80は胴が張り、底部は上げ底で、部分的に灰白色を呈する。81~84は断面台形の口縁で、81は器壁が薄く外面に不定方向のハケメが施され、最大径部付近に1条の浅い沈線が施される。82~84は胴部に1条の突帯を有し、83は内面口唇下がナデによって凹み、84は口縁が内側に突出する。85~92は逆L字状口縁で、85は胴部に1条の突帯を有する。外面は被熱により、赤みを帯びている。86・87は小型の甕または鉢であり、同一個体の可能性もある。口縁上部にミガキを施し、外面は丁寧にナデ調整を行い、一部ミガキ状の光沢がみられる。87は胴部に2条の突帯を有し、突帯の下を外面から打欠いて円形に穿孔したと考えられる。88は口縁部がやや断面三角形を呈し、口縁部下

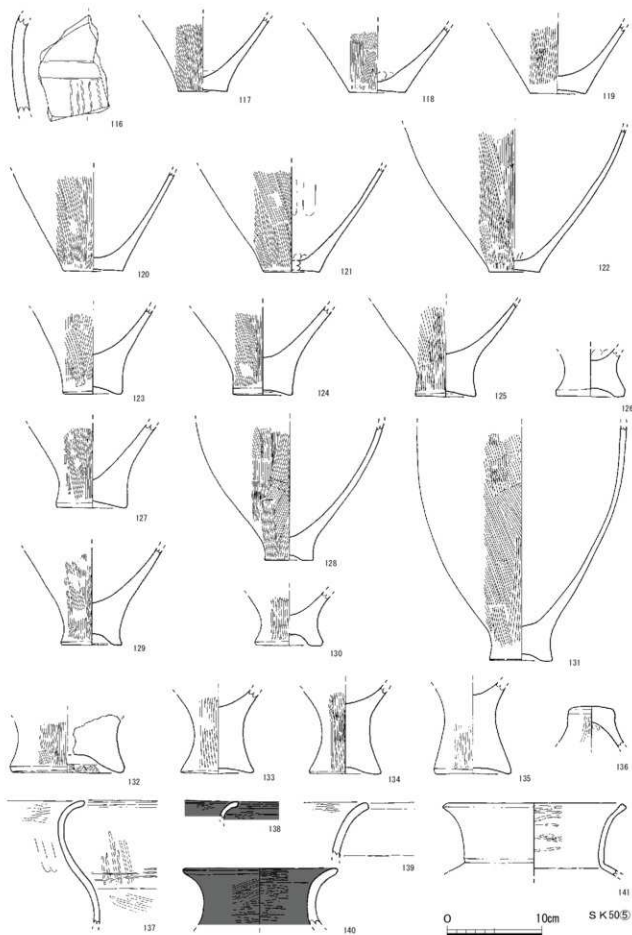


第86图 S K 50出土遺物実測図 (1/4)



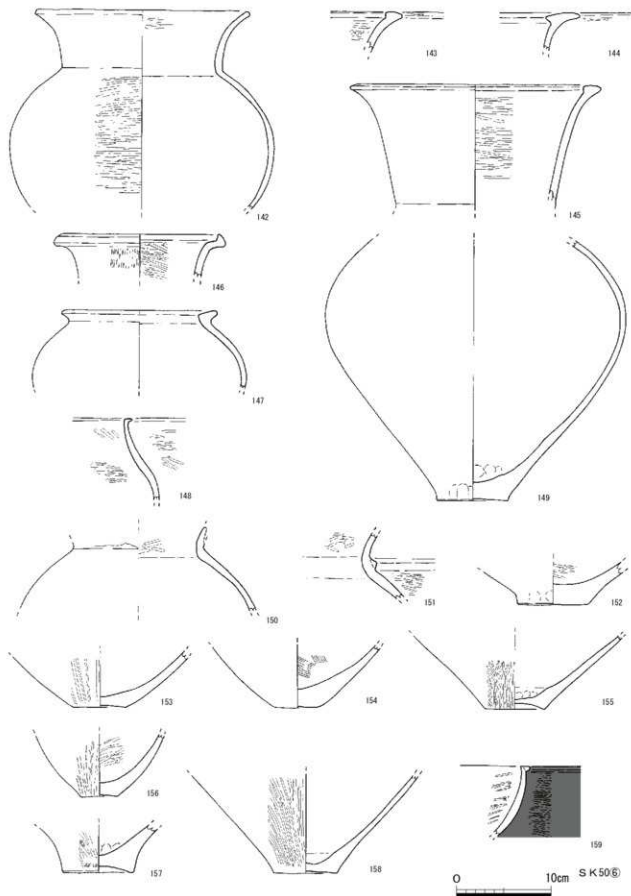
第87圖 SK50出土遺物実測図(1/4)



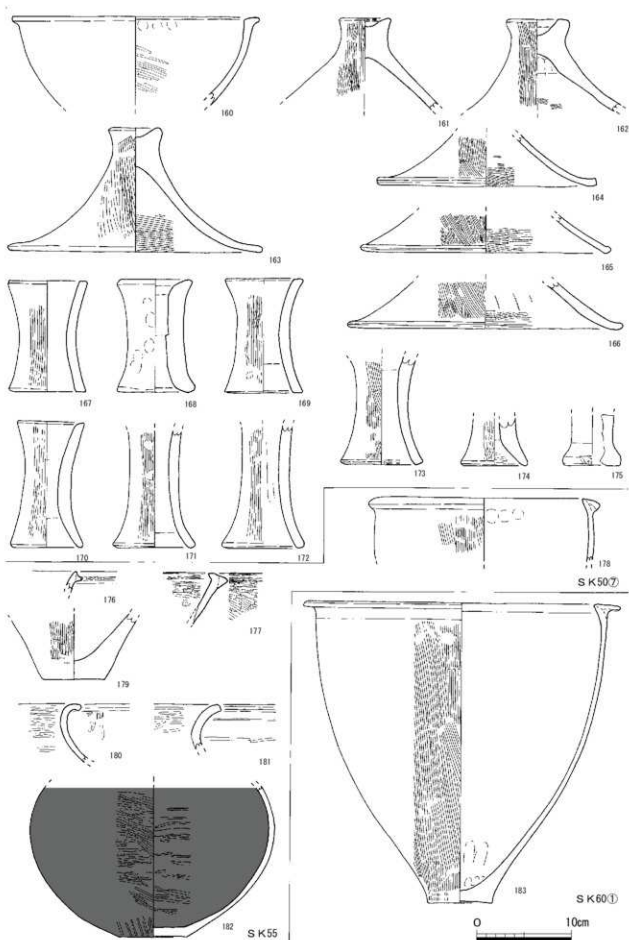


第88図 SK50出土遺物実測図(1/4)

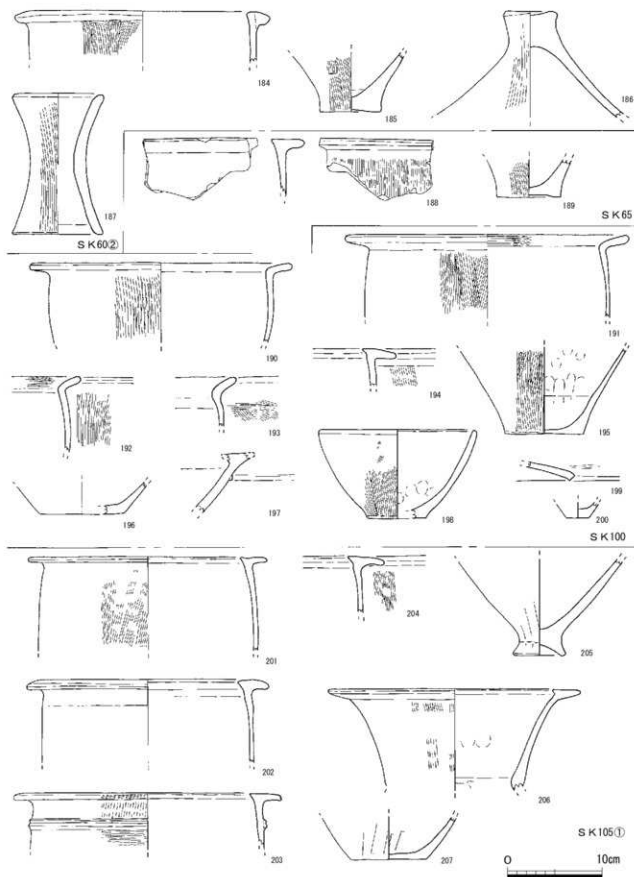
て凹み口唇部が内面に突出する。95は断面台形の口縁で内面口唇下がナデによってわずかに窪む。96・97は逆L字状口縁で胴部に1条の突帯を有する。96は口縁上面が膨らむ。99～101は逆L字状口縁であり、100・101は胴部に突帯を1条有する。101は口縁端部に刻目を施す。102の口縁端部は丸みを帯び、内面口唇下がナデによって窪む。胴部には沈線を1条施し、沈線より上はハケメ後ナデを施す。103・104は逆L字状口縁であり、104は口縁上面にもハケメを施し、胴部に1条の低い突帯を有する。105・106は口縁端部が丸みを帯び、胴部に1条の突帯を有する。106は外面の摩耗が著しく、調整が不明瞭である。107～109は黒色磨研土器である。107は口縁端部に沈線を施し、胴部が膨らむ。内外面とも丁寧にミガキを施す。鉢である可能性もある。108は断面三角形の口縁で、口縁上面から内面にかけてミガキ、外面胴部はハケメ後ミガキを施す。胴部が膨らむと予想され、壺の可能性もある。109は口縁上面が平坦で、胴部が膨らみ内外面にミガキを施す。鉢である可能性もある。110・112は逆L字状口縁で口縁端部に刻目を施し、外面にミガキを施し胴部が張る。ともに褐色を呈し胴部の張り具合は異なるものの、同一個体の可能性もある。111は断面三角形の口縁で、胴部に1条の突帯を有する。内外面に丁寧にミガキを施し外面は明赤褐色、内面は暗褐色を呈する。113・114・116は甕棺片と考えられ、城ノ越式段階甕棺と呼称される甕棺で、113は口縁下に3条の沈線を施し、その下に4条の縦沈線を施す。口縁端部の上部、下部に刻目を施す。114は口縁上面に厚い粘土帯を貼り付ける。116は胴部片で2条の沈線と5条の縦沈線を施す。115は大型の甕の口縁と考えられる。断面三角形の口縁で、内面と外面に同程度突出し、頂部と外面側端部に刻目を施す。破片であるため実測図の傾きは推測で示した。117～135は底である。117～122底面がほぼ平坦で、123～125・127はわずかに底が上がり、126・128～132は上げ底である。115・121・124・125・129は底面が白みを帯び、硬化している。123は底部に一部ハケメ調整が残る。130は底面端部を丁寧にナデを施し光沢を有する。128の底面はミガキが施され、平滑で光沢がある。131は胴部があまり張らない。132は底面にハケメを施す。133～135は厚底甕の脚部である。135は被熱により、赤みを帯びている。136は蓋であり、外面にミガキを施す。137～155は壺である。137は胴部に2条の沈線を施し、肩部より上に縦方向、下に横方向のミガキを施す。138・140は黒色磨研土器であり、138は胎土も黒色である。141・142は頸部がく字状を呈し、口縁は外反する。143～145は鋤先口縁であり、144は口縁部上部が黒色を呈すが、外面は灰黄褐色、内面は褐灰色を呈する。145は頸部から急な角度で立ち上がり口縁部は外反する。146は袋状の口縁を有し、上部を面取り状にナデを施す。147は広口の壺であり、内外面の摩耗が著しい。148は口縁上面が水平で、緩やかに胴部が張る。149は胴部上位が最大径となる。150・151は頸部が緩やかに外反し立ち上がり、151は頸部に1条の突帯を有する。152～158は底部で152の底面は楕円形で底が厚い。153～155・158は胴部が緩い角度で立ち上がり、156は急な角度で立ち上がる。157は急な角度で立ち上がったのち、緩やかな角度に広がり胴部が張る。159・160は鉢または高坏で逆L字状口縁である。159は内外面ともミガキを施し、外面は黒色化しているが、内面は黒色化していない。160は外面が著しく摩耗している。161～166は蓋であり、内外面に細かくハケメを施す。161～163の天井部は窪ませ、161は天井



第89图 SK 50出土遺物実測図 (1/4)



第90図 S K 50・55・60出土遺物実測図 (1/4)



第91図 SK60・65・100・105出土遺物実測図(1/4)

部にもハケメを施す。167から174は器台であり、167・169～173は外面にハケメを施し、168はナデ、オサエのみで製作している。167～170・173は外面が白みを帯び、胎土が明赤褐色を呈す。174は底面、中央の孔の直径が他の器台に比べ小さく、内外面にミガキを施しており、通常の煮炊き用の器台とは異なる。175は破片であるが支脚と想定され、意図的か不明だが底部に斜め方向の刻みが入る。

176～182はS K 55出土の弥生土器である。176・179は甕である。176は断面三角形の口縁部で、端部に刻目を有する。178は底面隅が丸みを帯び、底面の一部や外面下部がミガキ、ナデにより平滑になる。177・180～182は壺である。177は口縁上面が外傾し、内面に種子圧痕がみられる。内外面にミガキを施し、黒褐色を呈し黒色磨研の可能性もある。178は口縁端部が丸みを帯び、内面口唇下がナデによって窪む。180は口縁が大きく外反し口縁端部は垂れる。181は口唇下、頸部に沈線が施される。182は黒色磨研土器で外面は黒色、内面は黒褐色を呈する。

183～187はS K 60出土の遺物である。183～185は甕である。183は逆L字状口縁であり、底部は白みを帯び、硬質化している。184は丸みを帯びた断面三角形の口縁で口縁下を指でオサエを施す。185は底部で、底面は白みを帯びて硬質化している。186は蓋で天井部がわずかに窪む。187は器台である。

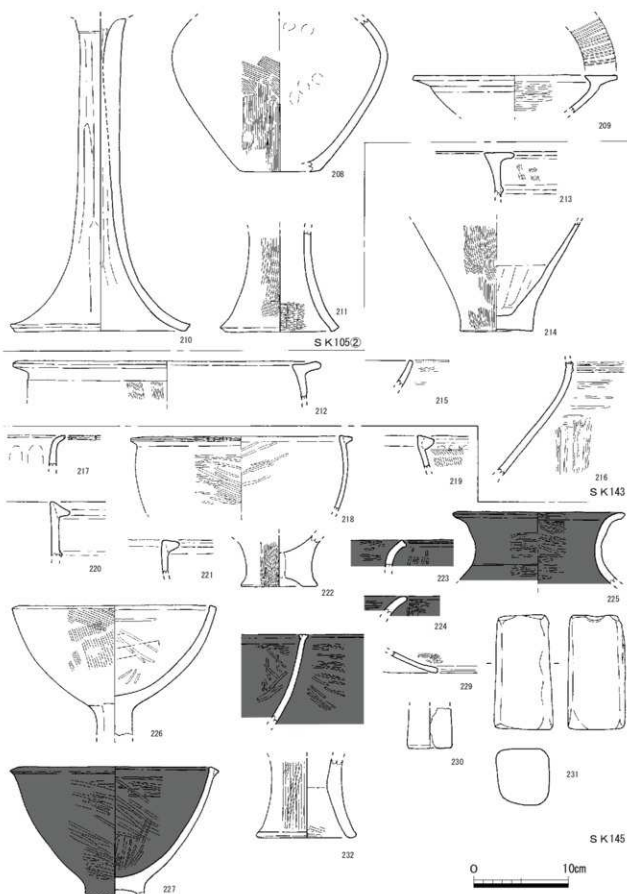
188・189はS K 65出土の弥生土器の甕である。188は逆L字状の口縁で内面口唇下がナデによって凹み、口唇は内面に突出する。189は底部で底がわずかに上がる。

190～200はS K 100出土の弥生土器である。190～195は甕で、190～193はく字状の口縁で192は口縁部内面にもハケメを施す。193は頸部内外面がナデやオサエによって窪む。194は逆L字状の口縁で口縁端部は垂れる。内面口唇下がナデによって凹み、口唇は内面に突出する。195は底部で、底の厚みが薄い。196は弥生土器壺の底部であり、内外面の摩耗が著しい。197は高坏で、内外面とも丹塗りを施し、口縁下に突帯を有す。198は鉢で、外面にハケメを施した後、口縁下にナデを施す。199は蓋で、外面に横方向のハケメを施す。200はミニチュア土器である。

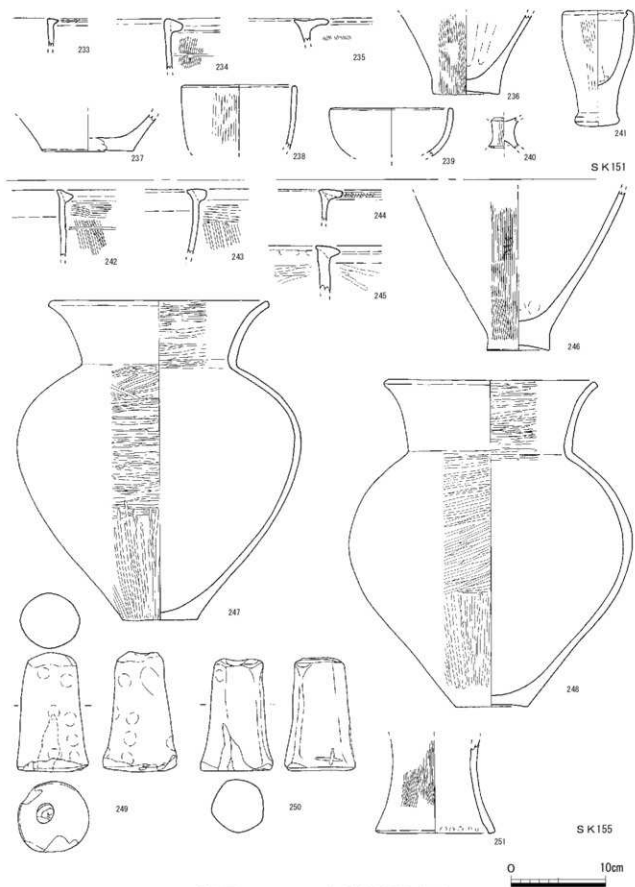
201～211はS K 105出土の弥生土器である。201～205は甕で、201～204は逆L字状の口縁を有し、口唇部は内面に突出する。203は口縁端部に刻み目を施し、胴部にM字状の突帯を有する。204は口縁端部がわずかに垂れる。205は上底の底部である。206～208は壺で、206は鋤先口縁を有する。207は胴部の立ち上がりが急で樽形甕である可能性もある。208は胴部上位が最大径となり、胴部上位はナデ、下位はハケメを施す。209は摩耗が著しいが口縁上面と内面にわずかにミガキが残る。210は高坏の脚部で、摩耗が著しい。211は器台である。

212～216はS K 143出土の弥生土器である。212・213逆L字状の口縁で212は口縁が内傾する。213は口縁下に1条の突帯を有する。214は甕の底部で外面は摩耗が著しいがハケメ調整が残る。215は鉢の口縁部であり、外面にミガキ、内面にナデ調整を施す。216は壺の胴部で胴部中位は横方向、下位には縦方向のミガキを施す。

217～232はS K 145出土の弥生土器、土製品である。217～222は甕で217は如意形口縁の端部



第92図 SK105・143・145出土遺物実測図(1/4)

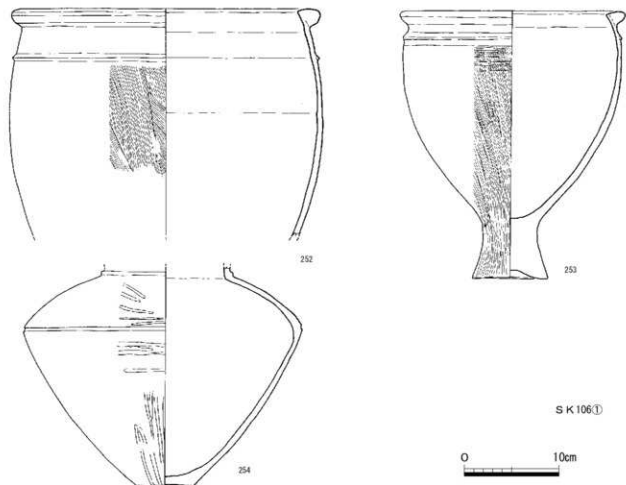


第93図 S K151・155出土遺物実測図 (1/4)

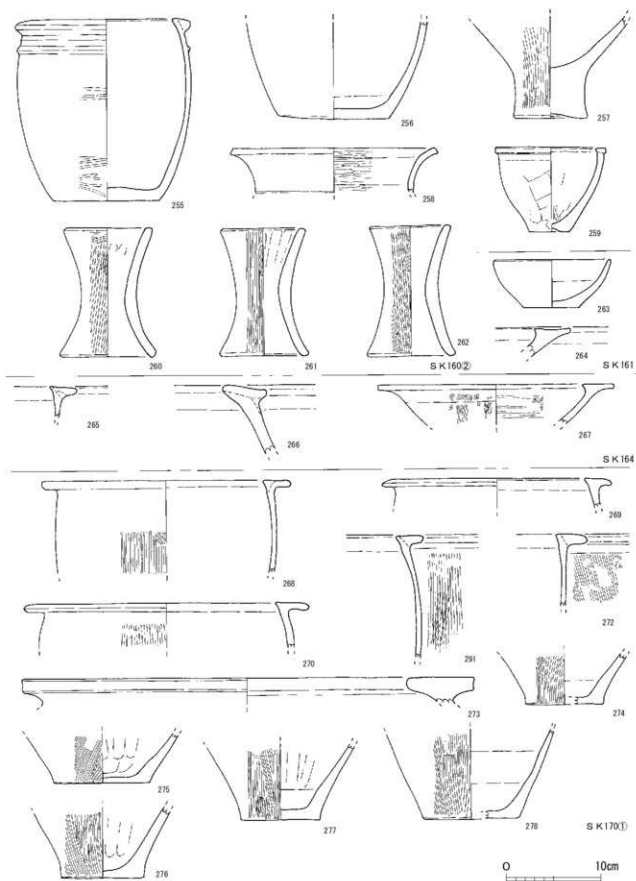


に刻目を施す。218～221は丸みを帯びた断面三角形の口縁で、218は口縁端部に刻み目を施し、内外面にミガキを施す。219は口唇部が突帯を覆うように接合している。内面口唇部下はナデによってわずかに窪む。220は口縁端部が垂れ、胴部に1条の突帯を有する。221は口縁上面から内面上部にかけて白みを帯びて硬質化している。222は底部がわずかに張り出し、上げ底である。223～225は黒色磨研土器の壺で、224は内面にハケメが残り、225は頸部に沈線を施す。226は高環であり、口径に比べて脚部の直径は小さい。内部はミガキを施し、外面はハケメ後ミガキを施している。227・228は黒色磨研土器の鉢で、断面三角形の口縁を有し、口唇が内面に突出する。同一個体の可能性もある。227はわずかに底が上がり、底部に貼りついた粘土帯が剥離している。229は蓋であり口縁端部がわずかに窪む。230・231は支脚で、230は隅丸の四角柱の角部分の破片と考えられる。231は隅丸の四角柱状で、上面が凹み、凹んだ部分が黒色になっている。器表面が白みを帯び、胎土は赤褐色を呈し硬質化している。232は器台で外面がやや白みを帯びる。

233～241はS K 151出土の弥生土器である。233～236は甕で233は断面三角形の口縁で口縁端部に刻目を施す。234は丸みを帯びた口縁で胴部に1条沈線を施す。235は逆L字状の口縁で摩耗が著しく調整が不鮮明である。口唇は内面に突出する。236は底部で、内面にオサエの痕跡が強く残る。237は壺の底部で内外面とも摩耗が著しく調整は不鮮明である。238・239は鉢で、238は円筒状で、



第94図 S K 160出土遺物実測図 (1/4)



第95図 S K 160・161・164・170出土遺物実測図 (1/4)

橙色を呈し、摩耗が著しいが外面にわずかにハケメが施される。239は灰白色を呈し、調整は摩耗のため不明である。240はミニチュアの高坏と考えられる。外面にミガキの痕跡がわずかに残る241は不明土器で、ガラスのような形状である。底部はやや丸みを帯び、口唇下にナデを施し細くした後、口唇を内面に曲折げている。外面はハケメを施した後ナデを行っている。242～251はS K 155出土の弥生土器である。242～246は甕で、242は断面三角形の口縁で内面口唇下がナデによって凹み、胴部に1条の沈線を施す。243は断面台形の口縁で口唇が内面に突出する。244・245は逆L字状口縁で、244は口縁端部に刻目を施し、わずかに内面口唇下がナデによって窪む。245は口縁部を内面に突出する。246は底部で底がわずかに上がる。247・248は壺で胴中央部よりやや上が最大径である。口縁から頸部にかけて外面はナデを施す。249・250は円柱状の支脚で上面は窪む。249は底面から穴が開いている。251は器台である。

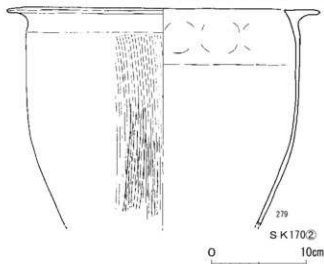
252～262はS K 160出土の弥生土器である。252・253・255～257は甕である。252・253・255は丸みを帯びた口縁で、252は2次被熱を受けて一部赤色化しており、口縁下の一部に煤がついている。胴部に1条の突帯を有する。253・257は厚底である。255・256は樽形の甕であり、255は外面、底面にミガキを施している。256は摩耗が著しいが、外面・底面にミガキがわずかに残る。254・258は壺で、254は最大径が胴部上位に位置し、沈線が施され、頸部に突帯を有する。258は頸部に沈線を施す。259は小型の甕である。内外面をナデ調整の痕が目立ち、粘土の塊が残る。底部がわずかに上がり、口縁は口唇部を上から覆い、雑に接合している。260～262は器台で、被熱を受け部分的に赤色、暗赤色を呈す。

263・264はS K 161出土の弥生土器である。263は鉢で、外面下部にはハケメが残る。258は高坏の口縁で、摩耗により調整は不明瞭である。

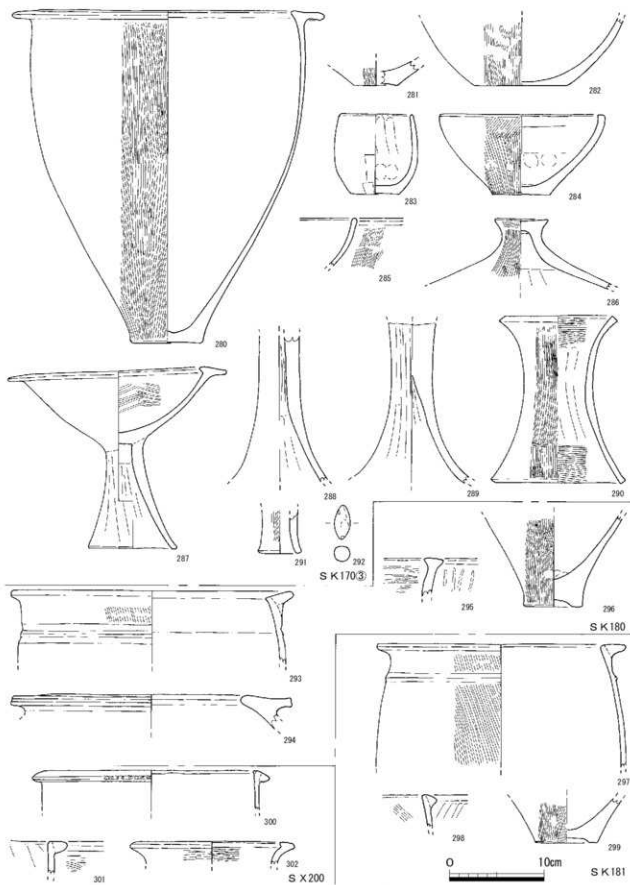
265～267はS K 164出土の弥生土器である。265・267は甕で、265は逆L字状の口縁である。266は大型の甕で口縁は内側に突出している。267は高坏で外面にハケメ、内面にミガキが残る。

268～292はS K 170出土の弥生土器、土製品である。268～274は甕で、268～272・280・281は逆L字状の口縁である。口縁は内面に突出している。269・270は口縁端部が垂れる。280は平底である。273は大型甕の口縁部で、口縁は内側へ突出し、胴部が張ると想定される。274～278は底部で、全て平底である。281・282は壺の底部であら281は内外面にミガキを施し、内外面、胎土が黒色化している。282の底部の厚さは薄い。

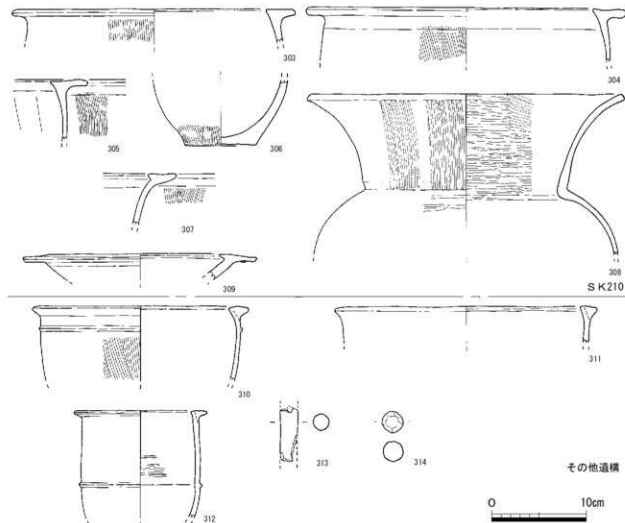
283～285は鉢で、283は内外面とも丁寧にナデを施している。286は蓋で、天井部は平坦である。287～289は高坏で、287は鋤先口縁



第96図 S K 170出土遺物実測図 (1/4)



第97图 S K 170・180・181・200出土遺物実測図 (1/4)



第98図 S K 210・その他遺構出土遺物実測図 (1/2, 1/4)

で摩耗が著しいが内外面に丹塗りの痕がわずかに残る。脚部は大きく広がらない。289は脚部が広がることが推測され、外面に丹塗りの跡がわずかに残る。290・291は器台で、290は内面の上下に横方向のハケメを施す。291は小型の器台である。292は投弾で、ナデ調整を施す。

293～296は S K 180 出土の弥生土器である。293・294・296は甕で、293は口縁が外傾し、胴部に1条の低い突帯を有する。突帯下の胴部が膨らむ。294は口縁が内側に突出し、胴が張る。296は底が上がる。295は壺の口縁部で頸部外面には暗文状に縦方向のミガキを施す。

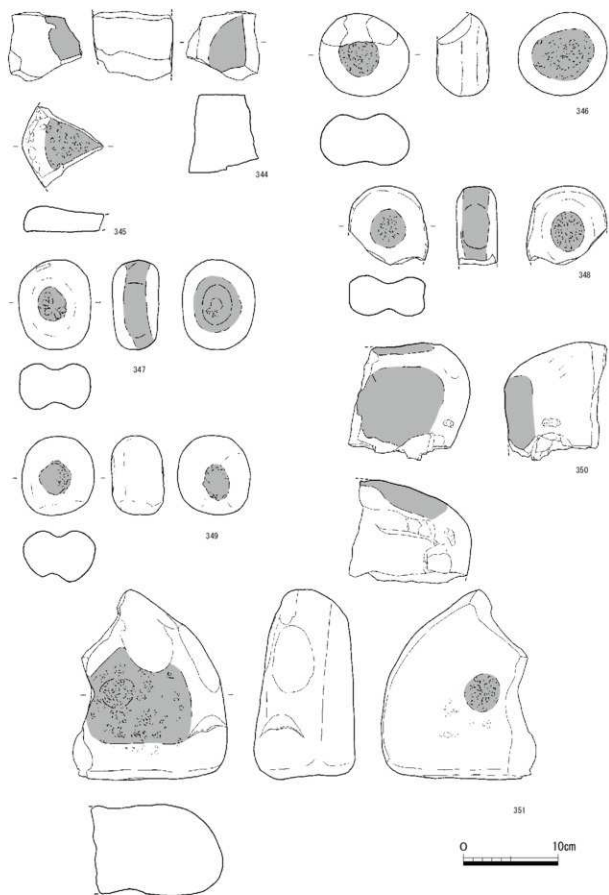
297～299は S K 181 出土の弥生土器甕である。297は逆L字状の口縁で口縁部下に1条の低い突帯を有し、胴が張る。298は断面三角形の口縁で、299はわずかに底が上がる。

300～302は S K 200 出土の弥生土器である。300・301は断面三角形の口縁で、300は口縁が内側に突出し、口縁端部が垂れ、刻目を施す。302は壺の口縁部で、口縁上部に粘土帯を貼り付ける。

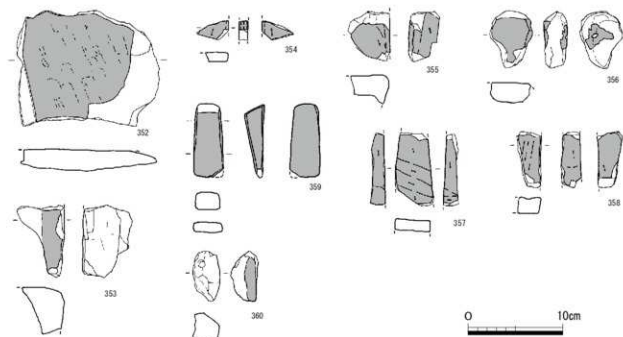
303～309は S K 210 から出土した弥生土器である。303～305は逆L字状の口縁で内側に突出する。306～308は壺で、306は胴が大きく膨らみ、外面にハケメを施す。308は口縁から頸部にかけて、10～20本程度の縦方向のミガキを単位として暗文状にしている。309は鋤先口縁の高坏である。



第99図 石製品実測図① (1/2, 1/4)



第100図 石製品実測図② (1/4)



第101図 石製品実測図 (1/4)

310～314は上記以外の遺構から出土した弥生土器・土製品である。310～312は甕で、310は丸みを帯びた口縁を有し、口縁下に突帯を有する。311は断面三角形の口縁で、内面口唇部下はナデによってわずかに窪む。312は逆L字状口縁で口径が小さく、胴部に1条の突帯を有する。内外面に化粧土を塗っている。313は円柱状の土製品で焼成前に穿孔している。314は粘土の玉である。

315～360は石製品である。315～325は石鏃で、315～318・322は凹基式、319・321・323～325は平基式、320は凸基式である。320は、刃部は剥片剥離面を利用し、基部は加工により作りだす。321・323は未成品の可能性もある。326・327は石錐である。328は二次加工のある剥片である。先端部を利用した石錐の可能性もある。329～331はスクレイパーで、331は半円形の搔器である。332は石核であり、自然面を打面とする。石鏃、石錐、スクレイパー、剥片は安山岩製と黒曜石製のみが出土している。333・334は大型蛤刃石斧の基部で、333は厚さが薄い。335は鉋入柱状片刃石斧の基部で、袂りを有し、断面形は半円形を呈する。336は片岩製の紡錘車の未成品である。上部が欠け、中央の孔は貫通していない。337～339は敲石である。340～344は加工による平坦面を有す磨石である。345～349は凹石で、346～349は両面に凹みを有し、側面も敲打により平坦面や凹面を作りだす。350・351・352は台石であり、350は平坦面を有する。351は両面がわずかに凹み、353は研磨面を有する。352は板状の製品で平坦面が残る。354～358は砥石で、354は厚さ約1cmで両面と側面がほぼ平坦である。354・356～358は砂岩製、355は白色の凝灰岩製である。359は4面に平坦面を有する用途不明製品である。360は軽石製品で平坦面を有し、一部被熱を受ける。











第12表 出土遺物観察表⑤

探検地	調査号	出土層階	種類	位置		形状		素材		主上	観察番号		
				口径 (長さ)	底径 (長さ)	外径	内径	外径	内径				
301	第99探	N2006	弥生土層	壺	—	—	2.3	壺	12.0-12	ナツ、ハナツ	土器ナツ	弥生中・後葉土層	301.17.0000479
302	第99探	N2006	弥生土層	壺	116.21	—	2.3	底物	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000472
303	第99探	NK210	弥生土層	壺	120.07	—	2.7	壺	12.0-12	ナツ、ハナツ	ナツ工具、ナツ	弥生中・後葉土層	301.17.0000481
304	第99探	NK210	弥生土層	壺	120.25	—	2.7	底物	底葉物	ナツ、ハナツ	ナツ工具、ナツ	弥生中・後葉土層	301.17.0000480
305	第99探	NK210	弥生土層	壺	—	—	6.6	底葉物	12.0-12	ナツ、ハナツ	ナツ工具、ナツ	弥生中・後葉土層	301.17.0000484
306	第99探	NK210	弥生土層	壺	—	—	7.6	7.1	壺	ハナツ、木製物	ナツ	弥生中・後葉土層	301.17.0000478
307	第99探	NK210	弥生土層	壺	—	—	5.4	12.0-12	壺	ナツ、ハナツ	ナツ工具、ナツ	弥生中・後葉土層	301.17.0000483
308	第99探	NK210	弥生土層	壺	122.4	—	7.0	壺	12.0-12	ナツ、ハナツ	ナツ工具、ナツ	弥生中・後葉土層	301.17.0000485
309	第99探	NK210	弥生土層	壺	119.01	—	2.8	壺	壺	ナツ工具、ナツ	ナツ工具、ナツ	弥生中・後葉土層	301.17.0000486
310	第99探	NK120	弥生土層	壺	121.08	—	6.0	底葉物	12.0-12	ナツ、ハナツ	ナツ	弥生中・後葉土層	301.17.0000488
311	第99探	NK120	弥生土層	壺	120.47	—	2.9	底物	底葉物	ナツ	ナツ	弥生中・後葉土層	301.17.0000489
312	第99探	NP106	弥生土層	壺	114.87	—	11.4	底葉物	底葉物	ナツ、ヒコ	ナツ、ヒコ	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
313	第99探	横江原	土器土	不明	2.8	—	1.8	6.9	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000479
314	第99探	横江原	土器土	粘土土	1.1	—	1.1	—	12.0-12	—	ナツ	—	301.17.0000492
315	第99探	横江原	土器土	赤土	1.4	—	0.9	—	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000492
316	第99探	NK109	赤土	赤土	12.21	—	0.9	—	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000492
317	第99探	NK102	赤土	赤土	11.81	—	0.3	—	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000492
318	第99探	NK120	赤土	赤土	2.4	—	11.81	6.4	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000492
319	第99探	NP10	赤土	赤土	2.3	—	2.2	0.2	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000492
320	第99探	横江原	赤土	赤土	2.9	—	1.4	0.2	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
321	第99探	横江原	赤土	赤土	0.8	—	2.1	1.8	0.5	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
322	第99探	NK30	赤土	赤土	0.8	—	2.6	2.8	0.4	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000492
323	第99探	江ノ原	赤土	赤土	0.8	—	2.2	0.6	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
324	第99探	NK110	赤土	赤土	3.2	—	1.9	0.6	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000492
325	第99探	NK100	赤土	赤土	3.9	—	12.41	0.5	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
326	第99探	NK30	赤土	赤土	0.8	—	1.7	0.2	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
327	第99探	NP11	赤土	赤土	2.4	—	1.9	0.5	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
328	第99探	NK109	赤土	赤土	2.8	—	1.5	0.7	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000489
329	第99探	横江原	赤土	赤土	12.21	—	0.4	0.3	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
330	第99探	NK30	赤土	赤土	0.3	—	2.7	1.1	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000492
331	第99探	NK45	赤土	赤土	7.9	—	0.6	2.5	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000492
332	第99探	301	赤土	赤土	6.8	—	0.8	1.7	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
333	第99探	横江原	赤土	赤土	0.9	—	7.6	0.7	2.9	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
334	第99探	NK120	赤土	赤土	0.8	—	0.7	4.0	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
335	第99探	NK40	赤土	赤土	13.11	—	12.41	2.4	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000489
336	第99探	NK102	赤土	赤土	0.61	—	0.6	0.3	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
337	第99探	NK10	赤土	赤土	12.21	—	12.01	2.4	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000492
338	第99探	NK30	赤土	赤土	4.2	—	2.0	2.2	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
339	第99探	NK10	赤土	赤土	0.47	—	0.2	2.7	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000489
340	第99探	横江原	赤土	赤土	12.41	—	12.41	12.41	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
341	第99探	NK30	赤土	赤土	10.21	—	10.41	10.41	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
342	第99探	NK30	赤土	赤土	12.21	—	12.11	12.41	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
343	第99探	N2006	赤土	赤土	10.21	—	10.21	12.41	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
344	第100探	NP120	赤土	赤土	17.61	—	17.21	8.4	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000494
345	第100探	NP70	赤土	赤土	10.71	—	10.41	12.41	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000492
346	第100探	NK50	赤土	赤土	0.41	—	0.4	0.5	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000492
347	第100探	NP120	赤土	赤土	0.3	—	7.6	5.0	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
348	第100探	NK30	赤土	赤土	0.81	—	0.3	0.3	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000492
349	第100探	NP100	赤土	赤土	0.4	—	7.7	5.4	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
350	第100探	NK10	赤土	赤土	11.2	—	11.81	11.41	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000494
351	第100探	NK30	赤土	赤土	20.1	—	18.4	9.7	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000494
352	第100探	NK10	赤土	赤土	10.47	—	14.21	10.1	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000494
353	第100探	NK30	赤土	赤土	12.21	—	12.11	12.1	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000494
354	第100探	N2006	赤土	赤土	10.41	—	12.11	11.81	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
355	第100探	NK102	赤土	赤土	0.4	—	0.2	2.1	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
356	第100探	NK30	赤土	赤土	10.21	—	14.21	7.1	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
357	第100探	NP112	赤土	赤土	7.8	—	4.1	1.2	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000492
358	第100探	NP90	赤土	赤土	10.81	—	12.71	1.6	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491
359	第100探	NK30	赤土	不明	7.8	—	12.21	2.9	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000492
360	第100探	NK45	赤土	赤土	12.21	—	12.21	2.8	—	—	—	弥生中・後葉土層	301.17.0000491

## 4. 小 結

調査地全体で弥生時代前期末から中期にかけての遺構が広がり、弥生時代後期の土坑や古墳時代の溝が東部に位置する。竪穴建物は北区全体で確認され、南区で検出した土坑も竪穴建物の可能性もあり、弥生時代前期末から中期初頃の集落の広がりが明らかになった。SK50は貝殻の廃棄土坑で、当時の食生活や環境を知ることができる良好な資料である。第7次調査と同様に動物骨については来年度以降報告する。

(小川原)



第102図 北区全景（北上空から）



第103図 北区西部掘削状況（北上空から）



第104図 北区東部掘削状況（北上空から）



第105図 南区全景（北から）



第106図 調査地上空から南西方向を望む(北東上空から)



第107図 S I 130、S K 155、160掘削状況



第108図 S I 140 検出状況 (北東から)



第109図 S I 215掘削状況(北から)



第110図 S I 215、230、S X 250 (南東から)



第111図 S D 80掘削状況(北東から)



第112図 S D 80土層堆積状況(南西から)



第113図 S D 110土層(南西から)





第114図 SK1完掘状況(南東から)



第115図 SK3完掘状況(北西から)



第116図 SK40完掘状況(南西から)



第117図 SK45完掘状況(南東から)



第118図 SK50掘削状況①(西から)



第119図 SK50掘削状況②(南から)



第120図 SK50掘削状況③(東から)



第121図 SK50東部土層(北東から)



第122図 SK50西部土層（北東から）



第123図 SK55掘削状況（北西から）



第124図 SK65掘削状況（北東から）



第125図 SK105掘削状況（北東から）



第126図 SK155・160遺物出土状況（北から）



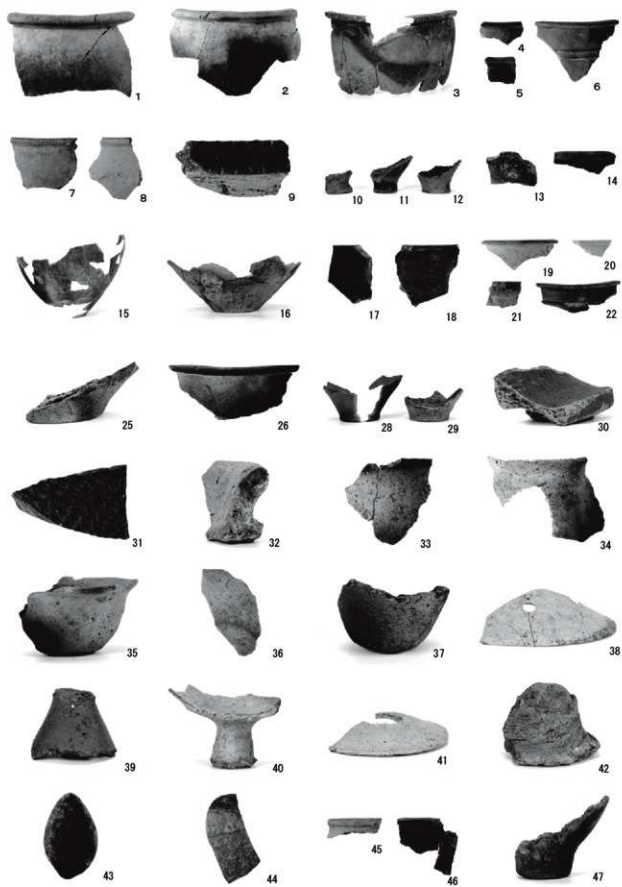
第127図 SK170遺物出土状況（北西から）



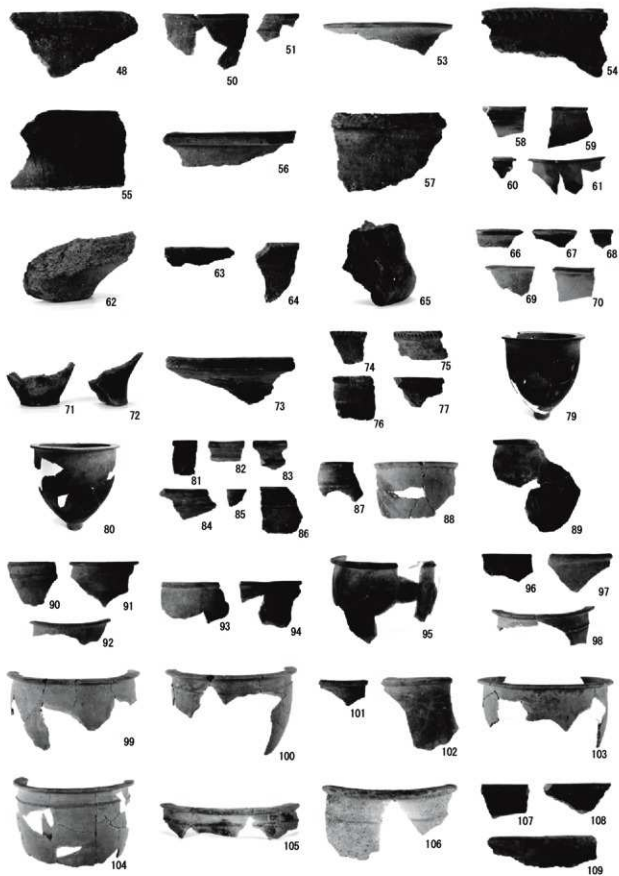
第128図 SK210完掘状況（南西から）



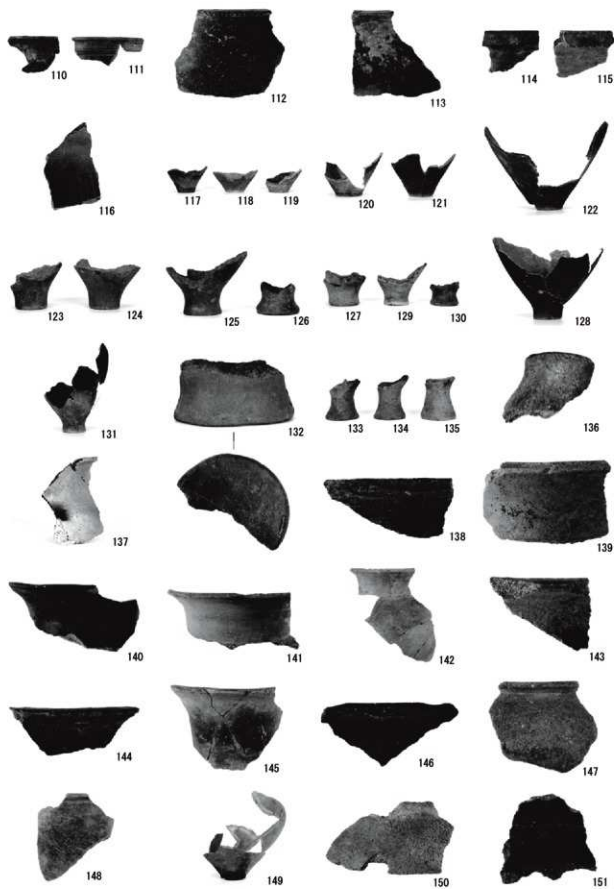
第129図 SX255検出状況（南西から）



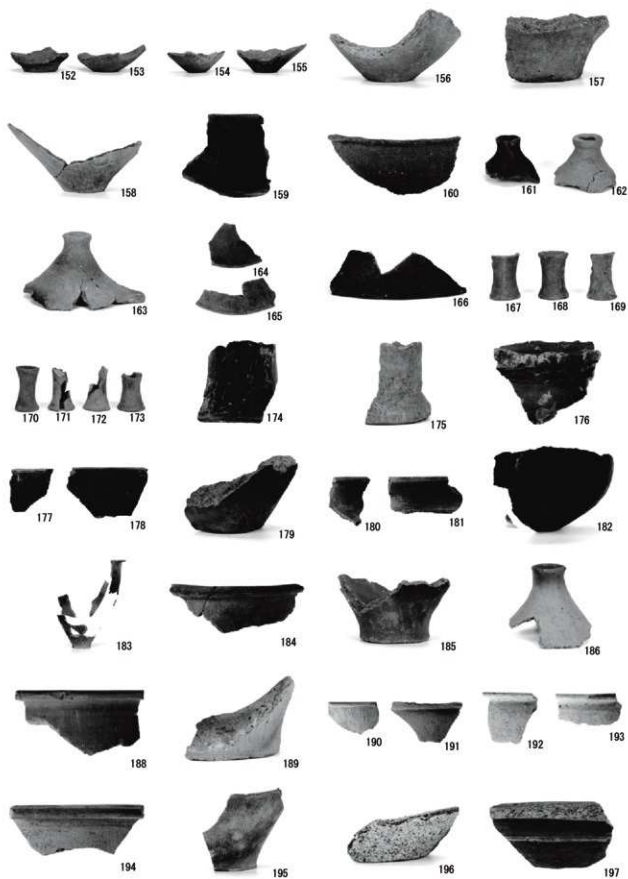
第130図 出土遺物写真①



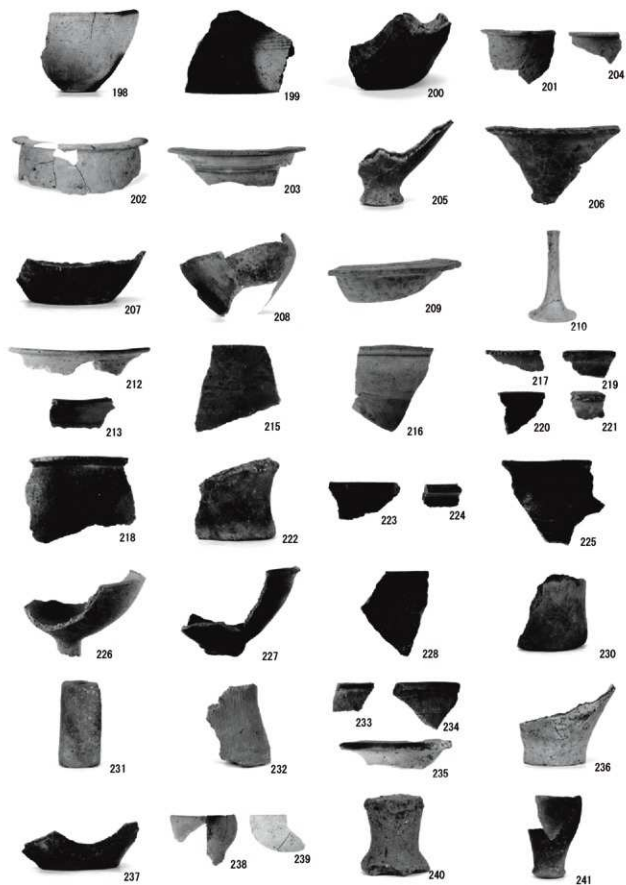
第131図 出土遺物写真②



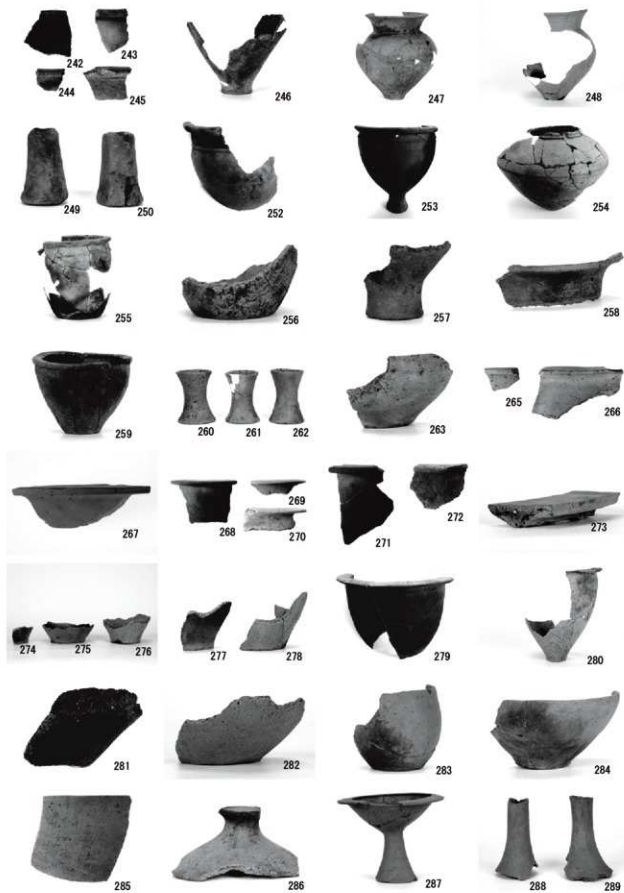
第132図 出土遺物写真③



第133図 出土遺物写真④

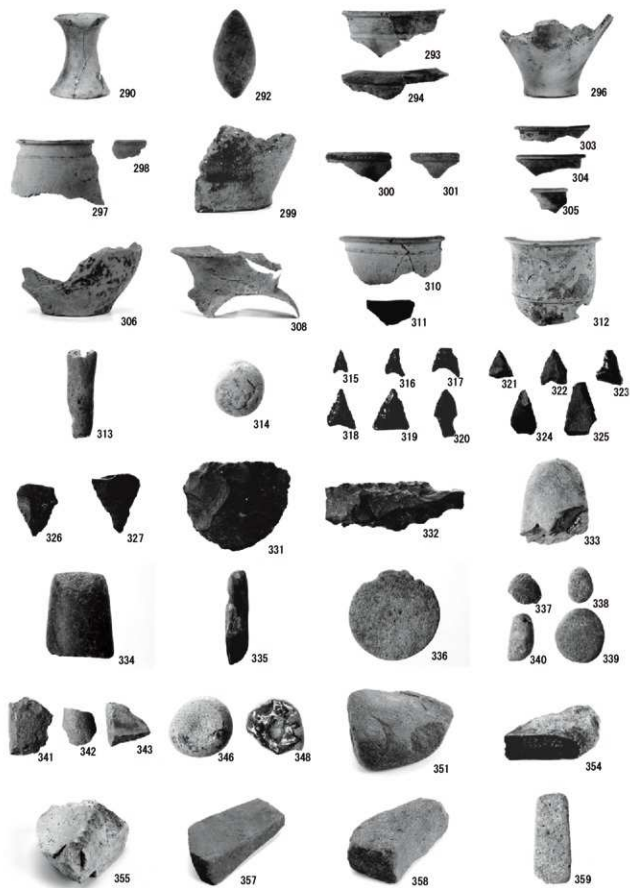


第134図 出土遺物写真⑤



第135図 出土遺物写真④





第136図 出土遺物写真⑦

## VI. 総括

### (1) 第6・7次調査検出溝について

第6次調査では弥生時代前期の6SD1、弥生時代前期から中期にかけての6SD6を、第7次調査では弥生時代前期末から中期初頭の7SD150を検出した。いずれも溝の断面は逆三角形を呈し、大型の溝であることから環壕である可能性がある。限られた調査区内での検出であったため、それぞれの溝の関係は不明である。しかし、7SD150は大きな曲線を描かないため、第6次調査地点まで南東側へのび、6SD1または6SD6へと続く可能性もある。その場合は第8次調査地点、塚崎東畑遺跡で前期から中期にかけての溝が出土していないため、第8次調査地の北側、塚崎東畑遺跡期の調査区と調査区の間を7SDの延長部が通っていると考えられる。6SD1の底部の標高は4.3m、7SD150は西から東に向かって標高が下がり、底部の標高が4.9～5.3mを測り、第6次調査の西側の谷に向かって緩やかに標高が下がることがわかる。

### (2) 出土遺物について

第7・8次調査では擬朝鮮系無文土器とされる黒色磨研土器が出土している。筑紫平野の遺跡を中心に出土しており、近隣では本市城島町の久保遺跡の井戸などからまとまって出土している。出土した黒色磨研土器は壺や鉢である。黒色磨研土器の影響のため丁寧に磨いた甕や器台、支脚が出土している。全体的に土器の保存状態は良く、焼成が良く硬質な土器も多い。また2次被熱によって赤色化し、白色の物質が付着している甕や壺が出土している。大川市の下林西田遺跡では製塩に使用した可能性が指摘されており、今回出土した遺物も製塩に使用された可能性がある。



第137図 6SD1・6、7SD150模式図 (1/1,000)

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	たかみずまいせき 一だい6〜8じはくつちょうきほうこくー
書 名	高三瀧遺跡 一第6〜8次発掘調査報告一
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第406集
編著者名	小川原 励(編)、江頭 俊介
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tn 0942-30-9225 FAX 0942-30-9714 E-mail : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	平成31 (2019) 年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
たかみずまいせき 高三瀧遺跡 だい じちよき 第6次調査	たかみずまいせき 福岡県久留米市 みずまのたかみずま 三瀧町高三瀧63	40203	690026 "	33° 15' 51"	130° 27' 29"	20161024 ～ 20161104	100㎡	確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高三瀧遺跡 第6次調査	集落	弥生	溝 柱穴 流路	2条 2基 1条	弥生土器、石器、木器 動物遺存体、植物遺存 体	弥生時代前期の断面V字 溝を2条検出した。		
要 約								
高三瀧遺跡は、広川の下流域の左岸に位置する標高5mの自然堤防上に立地する。弥生時代の集落や墓地在り。弥生時代の集落や墓地在り。周辺で確認されている。これまでの調査や探検によって小銅鐸や銅剣なども発見されており、前期から後期にかけてこの自然堤防上に地域の中核となるような有力な集落があったことが想定されている。今回の調査で前期の環濠と見られる溝が検出された。								
土木工事の届出日	平成28年9月21日				遺物の発見通知日	平成28年11月11日 (28文財第1173号)		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
たかみずまいせき 高三瀧遺跡 だい じちよき 第7次調査	たかみずまいせき 福岡県久留米市 みずまのたかみずま 三瀧町高三瀧161-5	40203	690026 "	33° 15' 54"	130° 27' 24"	20170417 ～ 20170615	118㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高三瀧遺跡 第7次調査	集落	弥生時代	竪穴建物 溝 土坑 不明遺構	2棟 3条 23基 2基	弥生土器、須恵器、石 製品、土製品、動物遺 存体	弥生時代前期から中期 の竪穴建物や弥生時代前 期末から中期初頭の断面 V字状の溝を検出した。		
要 約								
調査地点は江戸時代に細形銅剣が出土したとされる塚崎御廟塚貝塚の南30mの地点に位置する。標高6m程度で高三瀧遺跡内でも標高の高い地点である。弥生時代前期から中期の竪穴建物や弥生時代前期末から中期初頭の断面V字状の溝など多数の遺構を検出した。埋土に貝殻を含んだ遺構があり、動物骨が多数出土している。また擬朝鮮系無文土器の黒色磨研土器も出土している。								
土木工事の届出日	平成29年4月3日				遺物の発見通知日	平成29年6月22日 (29文財第461号)		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
たかみずまいせき 高三瀦遺跡 だい てりょうき 第8次調査	ふくおかけんくろめし 福岡県久留米市 たかみずま 高三瀦72-1	40203	690026 "	33° 15' 51"	130° 27' 27"	20171010 ～ 20171205	158㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高三瀦遺跡 第8次調査	集落	弥生  古墳	竪穴建物 土坑 不明遺構 溝	4棟 26基 2基 2条	弥生土器、土師器、須恵器、石製品、土製品、動物遺存体		弥生時代前期から中期の竪穴建物や貝殻を大量に廃棄した土坑を検出した。	
要 約								
調査地は第6次調査、第7次調査の中間付近に位置し、標高7m程度で高三瀦遺跡内でも標高の高い地点に立地する。弥生時代前期末から中期の遺構が主体となり、調査区全域に竪穴建物が広がる。弥生時代中期の大型土坑の埋土には多量の貝殻が含まれる。第7次調査と同様に、擬朝鮮系無文土器や動物骨が出土している。								
土木工事の届出日		平成29年10月5日			遺物の発見通知日		平成29年12月12日 (29文財第1285号)	

## 高三瀦遺跡

—第6～8次発掘調査報告—

久留米市文化財調査報告書 第406集

平成31年(2019)3月31日発行

発行：久留米市教育委員会

編集：久留米市市民文化部 文化財保護課

印刷：中村印刷株式会社

久留米市梅満町972